
地獄の空に舞うは花びらの虹

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄の空に舞うは花びらの虹

【Nコード】

N2038Q

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

隆汰は夜霧に紛れながら、道を歩いている。前後は不明。行き先もわからない。腕時計に表示される『地獄』という二文字だけがやけに明るい。そんな中、意識を失ってから目覚めると、彼は不思議な場所において、そして座敷わらしの、てらー、に出会う。てらーは「ここは地獄。そしてあなたは死者」だと言う。隆汰はてらーに付き従い屋敷の中に入るが、その地下にいた大家にぺらぺらにされてしまう。

夢を見た。それは思い出。先に死んでしまった彼女との束の間の安

息の時間。その思い出。隆太は一時その思い出に入り込んでから後、再び地獄の現実を見なければならなかった。

目を覚ますと、フレディ・マキユリー似のおっさんにぺらぺらになった身体をピザ生地のごとく扱われるというひどい有様。それが隆太の、地獄の中での現実だった。彼女の影はもう無い。

やがておっさんにも放置された隆太には、怒りばかりが巻き起こるようになる。騙されたことに対する怒り。自分を裏切ったてらーに對する怒り。

そんな彼の元に再びてらーは現れて、『記憶を書き換える』。つまり魔術によつて隆太の記憶は改ざんされ、彼は大家の下僕にされて利用されてもう散々だ。

隆太の怒りはやがて形を成し、やがて憎悪と怨嗟の念は黒く染まる。いつしか夢なのか現実なのかわからない感覚に嵌り込み、隆太は自らのなさけなさに追い詰められ、彼女のこととも思い浮かべることが…
…様々な弊害。生きるとは死ぬとは何なのか。そんな重たいことも含まれている非現実気味地獄物語。おひまだったら、よんでみてください。

隆汰

人は地獄にいても歌を歌う。笑うことができる。泣くことができる。怒ることができる。だから生きることができる。

夜霧。夜霧に塗れながら、朝野隆汰は、先日彼女にプレゼントされた腕時計を見つめ、そしてそこに映る、『地獄』という赤文字の意味を計りかねていた。

夜霧のせいで、必然的に視界が悪くなる中で、鮮烈な赤色で輝く『地獄』という二文字は、腕時計の中でよく映えて見えた。時計と

いうのは本来、長針、短針が数字を示すことによつて使用者に現在の時刻を教えるための道具であるのに、その腕時計には『地獄』だった。

夜霧に包まれた途端に出て来た二文字なのだから、何かしら夜霧と『地獄』は関係があるのだろうか、と隆汰は思う。なにか、背筋が強張り、悪寒のようなものが走る。

ただ、恐怖を感じているわけではなかった。平然と現在の状況を受け入れていて、心臓もドクン、ドクン、と、別にやかましくもなく鳴っている。気分が落ち込んでいて疲れているせいで、心臓さえも激しく動くのを拒否しているのかもしれない。

困ることがある。それは、どこにいけば良いのかわからないということだ。夜霧のせいで前後不明。行き先不明。何ゆえ、ここに迷い込んでしまったのかもあやふやになっている。隆汰は、実際に、体も心も迷子になっている状態の中で、夜霧に包まれていた。そして彼女が自分にプレゼントした腕時計に『地獄』という不吉な二文字が浮かび上がる理由が、わからない。

『……だけれどそれらは全て、どうでも良いことだろ？』

突然、聞こえた。耳に入り込んで、意味を持って脳に響く言葉。

隆汰は目を細めて、なんとなしに進めていた足を止める。夜を白くかすめる霧の何処かから響いた言葉の、その持ち主を探すことに神経を傾ける。だが、再び声が聞こえることは無かった。ため息をついてから再び腕時計を眺める。地獄に変化は無い。

相変わらず真っ赤に蛍光していて、存在が目立ち、やかましい。歩き出す。何年も履き潰している灰色の靴で、地面を踏みしめ先に行く。先があるかどうかはわからないし、もしかしたらその場で足踏みをしているだけの可能性もあった。

だが、狭まっている視界の中に突如現れた道路標識のおかげで、自分が前に進んでいると知ることが出来た。隆汰は一時停止の標識を見やり、ああ、ここは道路なのだと知り、コンクリを踏みしめて歩いていたのだとも知る。

今更なことだ。無意識下ではとっくの昔にわかつていたことだ。

土を踏む感覚とコンクリを踏む感覚の違いくらいは、意識を傾けるまでもなく理解できるのは、当然のことだ。子どものころにそういう術は、自然と覚えたじゃないか。何時の間にか両の足だけで前へ突き進んでいたことと同じように。今だって呼吸をしている。俺たちの母。俺たちの父。彼らの庇護の元、カラス一匹に勝てる力さえ持っていないくらいに小さかった俺たちは、いろんなことを覚えた。そしてこれからも覚えていく。生きるための、様々な術を。

『……なんで急に、そんなことを考えるんだ？ もっと考えるべきことがあるんじゃないのか？』

隆汰の耳に、声が再び。煌きが詰まっている洞窟の奥底から、反響してきたかのような、声。…？

果たしてそうだろうか？とも思うが、他に比喻が隆汰には思いつかない。煌きが詰まっている洞窟の奥底とは？そもそも煌きとは何なのか。それは暖かいのか。冷たいのか。無情なのか。慈愛なのか。わからない。まあハッキリ言ってこれこそどうでもいいこと、考えなくてもいいことだ。毎日の生活がつまらないのは自分のせいだと自嘲するよりも、つまらなく、他人の人生がくだらないとけなして自分の人生を省みないよりも、つまらない。

そういう風に思っていた時のことだった。

…から…から…から…

突如として夜霧を切り裂いて聞こえてきた。何の音だろうか、と隆汰は首をひねりながら音の正体を考える。そして思い出してきたのは、昔飼っていたハムスターが回し車を走る時に鳴らしていた音が、今聞こえている音と少し似ているということ。

…から…から…から…

音に導かれるようにして、夜霧を歩いてみる。

歩くにつれて音は大きくなっていて、音の持ち主に近づいているのだとわかる。そして、死んでしまったハムスターが黄泉より生き返り、姿を現すのだからかと感じ、不思議にふわふわとした落ち着

かない気持ちになる。自然と、飼っていたハムスターに対して理不尽な死を迎えさせてしまった苦い記憶が、頭を過ぎる。あの時は、自らのあまりの不甲斐無さに泣いた。

…から……から……から……

だが、やがて白く霞んでいる景色の中にシルエットが湧いてくるのが見えて、ああハムスターではないのかもしれないな、と。そしてシルエットがはつきりと形になって隆汰の目前に現れた時に、彼はそこにいるものが本当にそこにあるものなのか、わからなかった。思わず足は止まって、「怖いな」と呟いていた。

シルエットの正体。五歳くらいのおかつぱの髪型をした赤い振袖を着ている子どもが、道路の端にうずくまって、道路を指でなぞってお絵描きをしているような仕草。可愛い？違う、気味が悪い。それが座敷わらしだとは限らない。だけどきつと、座敷わらしだ。こちらに気が付いた彼女は、顔を上げた。彼女？彼女だとは勿論限らない。真ん丸い瞳はつぶらな瞳。黒目ばかりで白が少ない瞳。ジツとこちらを、見ている。見ないで欲しいが。指で道路をなぞる仕草も彼女はやめた。そういえば、からからから、という音ももう止んでいる。そもそも道路にいるはずなのに車のエンジン音も聞こえないし、犬が吠える声だつて無い。月さえも見えない霧に囲まれた夜。座敷わらしは女だろうか？そしてこの状況は一体、なんなのだろうか？

隆汰は今更に空気が凍てついていることに気が付き、背筋を凍らせ鳥肌も立った。座敷わらしは鹿のようにつぶらな瞳のまま、何もわかっていないような表情で、首をかしげている。隆汰が何かを言うよりも早く、口を開いた。

「お兄さんは迷子？ それとも……」

花を咲かすかのように、朗らかに笑う。ふふ、と。意味を深く持ち合わせている朗らかさだろうかと思つた隆汰は、「何で笑うの？」と座敷わらしに向かってニコリと笑うこともせず、尋ねる。座敷わらしは、しかし何も答えない。朗らかな笑い声を絶やさぬままに、

どこかへと行ってしまうおうとする。何故か、蛙飛びで、ぴよこぴよこと、振袖なのに、器用なもので、転ぶことも躓くこともない。ほとんど隆汰の視界から消えようとする。「待つてくれ」隆汰は蛙飛びの座敷わらしを二足で追いかける。何の手がかりも無い夜霧の世界では小さな手がかりさえも大切な欠片だから失いたくはない。だから焦って呼びかけたのだ。けれども、真つ赤な振袖の姿は彼の視界から消失する。簡単なものだった。物の数分。前後不明の霧の中を当ても無く彷徨う時間が、再開された。

回し車の音も無ければ、猫の気配も、建物の中で息づく人間の気配もない。自転車も走らないし、酔っ払いが通り過ぎることも無い。霧に包まれた夜は、静寂にも包まれている。

「何なんだよ…ここは…」

歩き続けてどれくらいのことだろうか、隆汰は倒れてしまい、体を丸めてぶるぶると小刻みに震えた。寒さをしのぐために、胎内で息づく赤ん坊のような姿勢で、コンクリに頬さえもくっ付けた。歩くのに疲れたわけじゃなかった。前後不明の道で歩き続ける理由がわからなくなったから、歩きたくなくなった。倒れた先のコンクリに頬をくっ付けるとひどく冷たくてやるせなく、身体の方までも、歩いていた時よりも過酷な冷たさに支配される。はあ、と小さく吐いた息は、隆汰自身が想像するよりもずっと透明に白い。

死ぬ。そんな風を感じる。それがどうした、と脳内で呟く。白い息を吐く度に、繰り返し呟く。強がりだということをも自分で理解しながら、それがどうした、と呟くことは隆汰にとつてのせめてもの抵抗だった。何に対する抵抗なのかは彼自身よく判然としない。死に対する抵抗なのか。それとも今まで生きてきた内で感じてきた何かに対する抵抗なのか。強く脳内で呟かれる『それがどうした』。やがて、言葉として紡ぐ。

「死…そんなの……たいしたことじゃ…ない…」

言葉はどうしても嘘になる。どこかの頭の良さそうな人が言っていた言葉だ。その言葉自体が言葉なのだから、それさえも嘘なのか

もしれないが。だとしたら何が本当かは真実絶対的にわからない。むちゃくちゃになって考えるのが面倒になってくるじゃないか。生まれた時からそもそも人間というのは何が目的であったかを探すものだったのか、それとも母の胎内から現世に生れ落ちた瞬間から既に目的を持って己でも気付かぬうちにその目標に向けて日々を過ごしているのか。生まれた瞬間から死に束縛されている。死に怯えた瞬間から生を意識する。生まれた瞬間にはハッキリと『生まれた』と、例え赤子の思考能力皆無な脳味噌であったとしても『生まれた』なんて大事なことから認識していたはずだ。俺たち全員が通過することだ。生まれる瞬間。死ぬ瞬間。だけど今は忘れてる。きつと思いつけないだけだ。生まれた瞬間の記憶。胎内で小さな魚みたいな形をして『生まれた』瞬間が俺たち全員にあった。俺たち人間は全員、それぞれが一人の母親の胎内から生まれ出て、そして他者の保護の元に成長する。それは誰しもが変わらないことだ。カラスにさえ負けてしまう貧弱なる赤子だった俺たちは、たくさん人の助けのおかげで大きくなって昔よりもいろんなことを覚えて、できるようになる。これからもいろんなことを覚えていく。余計なことも覚える。無駄なことも覚える。大切なことも覚える。そして生まれた瞬間を忘れ、日々をなんとなく過ごしていく。死を想う時に、ようやく自分が生きている状態なのだと感じ出す。でも生まれた瞬間を思い出すことはもう俺たちには出来ない。ここまで成長した俺たちの脳味噌の中には様々な不純物が詰まりに詰まっていて、『生まれた』瞬間などという純粹極まりない事象のことなど、詰める空気が無い。ほら、今、走馬灯のように思考が断続的に湧き出てきていて、もしかすると俺は死ぬ手前だ。だからこんな哲学的な、普段の生活には何の助けにもならなさそうな感じのことがボボボボと脳内回路を駆けずり回って爆発している。こんなことには意味が無い。腹は膨れない。そして他人と解り合うことも出来ない。他者を慰めることにもならない。己を高めることにもならない。ただただ、爆発しているだけのことだ。そしてそれはいまやどうでも

いいことだ。最近ずっとどうでも良かった俺の人生の中でも、さらにくだらない思考の連続は人を退屈にさせるだけではないか。俺が俺自身を退屈にさせている。もつと違うことを考えた方が楽しいに違いないのに。有意義に違いないのに。ああ、もう一度呟いておこつか。言葉を呟くことで本当を嘘に変えればいい。言葉が嘘ならば、嘘を紡げば事態はもしかしたら良い方向に傾くかもしれない。言葉というものもあるのだし。

「死…それは…とても恐ろしくて避け様のないことだ…な…」

隆汰はもう目を閉じていた。目を安らかに閉じた上で、寒さのせいで上手く動かすことが出来ない唇を動かして言葉を呟く。死が安らかでなおかつ回避可能な事象になってくれることを祈って。言葉が、一つの真実を嘘の力で無理矢理に捻じ曲げて、新たな真実を生み出してくれはしないかと願った。だけれど、走馬灯が駆けずり回る彼の脳内回路は、炎が薪を燃やし尽くして抛り所を無くし力尽きるのと同じように、その頼りを失って回転を止めようとしていた。隆汰の脛の裏にはチカチカと点滅する黄金色の輝きがいくつもあって、流星群のように脛の裏を走っている。それを隆汰は黄泉への誘いだと思つた。黄金の流星群は俺の意識を背中に乗せて『地獄』へと運んでいくのだろうと。その地獄で死の判決を下され、『生まれ』瞬間の次に純粋な瞬間であろう、『死ぬ』瞬間を体験させられるのだろうと。

そこまで思ってから隆汰は一つ、気がかりなことに気が付く。

彼は燃え尽きた脳内回路の中で呟く。

(何で、俺は、『地獄』に連れて行かれるんだっけ…?)

答えはすぐに出た。考える必要はほとんど必要なかった。腕時計を自分に渡したのはあの人じゃないか、と隆汰は思う。腕についている時間を刻む道具は相変わらず真っ赤に蛍光している。『地獄』。意味深かつ不気味に、その二文字が点きっぱなしだ。

白くて細長い指に、八重歯が目立つガチャガチャな歯並びを持つたあの人は青白い顔をしていたのに、毎日楽しそうに笑っていた。

本当に楽しんでいるように見えたあの人の微笑みが好きだったから一緒にいたいと思っていた。だから俺もそれなりに笑っていた。彼女ほどに楽しそうには出来なかつたけれど、笑ってた。そんな彼女から、誕生日にもらった腕時計。彼女がこれを差し出したとき、あの時、笑っていなかったのは『地獄』と表示されることを知っていたから？今となつてはわからないことだけど、俺は裏切られたのだろうか。そもそも、裏切られるだとか裏切つただとかいう関係になれていたのかもわからなくなってくるね。『地獄』。わかるのは、この二文字を腕に捲くり付けたまま死んで地獄へと招待されるのも、あの彼女からの誘いならそれ程悪くは無いつてことだ。このまま冷え固まつて命を失つた先に待っているのが閻魔大王や灼熱の炎だけでないならば、そんなに素晴らしい地獄も無い。呼吸を止めて、手足の力を抜こう。コンクリの冷たさに心地よさを感じながらずくずくになるう。

隆汰は素敵な気持ち良さに浸つた。彼は本当に自分が死ぬような気がしていた。地獄に招待されて現世から姿を消した彼女と再会できるかもしれないと気付くと、心が悶えた。面白いほどにゆるゆるな表情は、夜霧に包まれコンクリで横たわる人間が作る表情とは到底思えない。南の島で日向ぼっこをする人の快樂に塗れた表情のようだった。つまりそれがどういふことかという、彼は自分が思っているよりも頑強な肉体に恵まれているので、まだまだ死なないということであり、彼自身は地獄に招待されるつもりだが、心臓はトクン、トクンと鼓動をやめるつもりもなければやめる気配も無い。そもそも倒れた理由も、衰弱からではなく歩く気力が無くなったから倒れただけのことだから、身体はまだ限界を迎えてなどいない。隆汰は死なない。或いは、死ねない。

そんな彼の頬に突然、冷えた空気には不釣合いなほど暖かな手の平が触れる感触が、起つた。柔らかな感触は女性を彼に想起させる。彼女が地獄より迎えに来てくれたのだらうかと思つた隆汰の心はさらに悶えた。彼は閉じていた眼を思いつ切り良く開き、目の前にあ

る細長い白い指を見た。彼は自らの手で、その白い指を掴む。掴むと、それに温もりが存ずるのを実感する。そして、「連れて行つてくれ」と小さく唇を動かした後は、何かをやり遂げた人であるかのような満足の表情で、眼を再び閉じた。彼は掴み取った暖かみある手を、彼女の物だと考えそれ以外だとは全く疑わないまま、どのようなやり方で自分は地獄へと連れていかれるのだろうかと思う。乳母車にでも乗せられていくのも面白いんじゃない、粹な感じがあるよね何となくだけど、と思いながら眠気に誘われる。温もりのまどろみをきっかけにして。

だがその眠気はぶっ壊された。

乳母車に乗せられることは無い。誘われた眠気のおかげで睡眠に落とさせてもらうこともない。「ああっ……………痛ッ！」

暖かなる手は、隆汰の顔面と冷えたコンクリとを接触させたまま、何の計画性も無さそうな野蛮ぶりで彼を身体ごと引つ張ったのであった。ズリッ、ガッ、グア、ガガ。即座に眼を開いた隆汰は「あだだッ!……………あだだだだッ」と衝動のままに叫び声をあげるが、容赦が無い、ズリッ、ガガッ、グア、とされるせいで下瞼が引つ張られ眼球がむき出しになる。むき出しの眼球はコンクリと擦り合うことによつて最悪な事態、「うぎゃ、が、がが、ががああがああが」と叫び声をあげながら右の眼球が損傷していくことで生じる激痛に耐えようとしているが耐えられるわけではない。やがて、プツリ、と糸が切れたみたいなのが鳴った後に耳鳴りみたいなのが隆汰の脳内で鳴り響く。眼球がご臨終したことによつて生じた耳鳴りなのだった。

痛みを通り越して幸福感がふわふわと訪れる。隆汰は、今度は脳内で走馬灯を走らせることもないままに、意識をぼんやりとさせてしまい、やがてそれを消失させて、漆黒に落ちたのだった。

てらー（座敷わらし）

上手く、いかない。どうにも。

垂れてしまった右眼はかろうじて肉体と繋がっているから、何時地面に垂れ下がってもおかしくはない。右の手の平で眼球が落ちないようにしているが、盃を翻せば水が地面に零れ落ちると同じように、手の平を逆さにした瞬間かろうじて肉体と繋がっているそれはわずかな筋繊維すらもちぎれさせ地に落下するのは間違いなかった。だが不思議と痛みは無い。

左眼だけで垣間見る世界には、今はもう霧はさほど存在していない。視界の広がりをおれだけ邪魔した夜霧は気配を静め、邪魔をしたことを詫びることもなく景色から失われた。漆黒に落ちた意識が回復してしっかりと立ち上がった時、隆汰の視界に広がっている景色は様変わりしていて、地面も先ほどのようにコンクリではなく、いまは、少し湿っている土。

隆汰は散々履き潰した灰色の靴で、その土の上に両足で立っている。気が付いた時にはすでにそこに立っていた。まるで夢を見始めた瞬間であるように、突如として場面が切り替わり景色が変化している。先ほどまであんなに痛かった右眼が痛くないのは夢のおかげなのかは、わからないが。

土の他には、樹があった。何故か、幹の中心の部分にぽっかりと縁の荒い穴がある。葉も花もさかせていない枯れた樹だ。隆汰の左眼から見てちょうど真っ直ぐの位置に、中央に穴が結構大きく開いている割には土に崩れ落ちることもなく在るのだった。

夜空は藍色。もうすぐ夜が明けそうに見える中に星はひとつもないが、雲は途切れ途切れに藍色と溶け合いつつ浮かんでいる。そして、そのほかにも何かがあった。それは、一つだった。

「あ」

UFO。そんな表現って陳腐にも程があるんじゃないかと脳内で

断りを入れながら隆汰は、左手を望遠鏡の替わりだというのか輪っかの形にしてから左眼に当てた。そして彼はUFOがもつと良くハッキリと見えないかなと思っただけ、左手望遠鏡には実際のな効果はいかほども無く、本人の気分が盛り上がるという話でしかないわけではある。

UFO。左手望遠鏡を通して左眼で、UFOをの姿を確認している。雲しかない藍色の空に、一つ、虹色に光り輝いている物体は円盤の形をしているということで、隆汰の脳内から、『アダムスキー型?』とか知ってるだけの単語が飛び出てきたりする。

しばらく左手望遠鏡を使ってそのUFOが虹色に光っているのを隆汰は眺めていた。そして、UFOに夢中になるあまり、右手に右眼を乗せていることに注意を向けなくなり、ぼろり、彼が気が付かぬ内に少し傾いてしまった手の平から右眼は落下し、わずかに繋がっていた筋繊維もプチりとちぎれ、土に落下した。痛覚が無いからそんな重大な事態にも隆汰は気が付かない。夢中になっていて、いまだUFOのことにはばかり。

そんな彼がUFOからようやく意識を解放された時には、既に右眼は土に塗れていた。

「お兄さん、なんだか大仏さんに見えるポーズだね」

女性の声だが彼女のものとは違うと即座に気が付きつつ声の主を探して首を挙動不審に動かした隆汰は、ちょうど右側の眼が機能不全のせいで見えなくなっている右側の方に声の主がいることを知って、その時になってようやく右眼のことを思い出し、右の手の平をチエックした所、無残、わずかに肉体と繋がっていた筋繊維すらもちぎれた右眼が土に塗れていて、自分の視界をこれまで映してくれていたそれには到底見えないくらい汚らわしく、少し血走っているのが最悪に気持ち悪い。自分の右瞼部分にそんな汚らわしいものが付いていたということに衝撃を受けた隆汰は、こんなもん足裏で踏み潰しちゃおうかな、とも思ったがそれはさすがに早急な判断だとも思うので、右の手の平で再びそれを確保し、左手は望遠鏡、右手

は地面と平行。というポーズになったわけなのだが、自分でもこれは確かに大仏のポーズにちょっと似てるかもな、と先ほどの女性の声が言っていた内容を思い出し、もう一度左眼で先ほどの女性の声の主を探してみると、まださっきと同じところでそいつは突っ立っていて、赤い振袖を身に纏っているのだが、その娘は餓鬼の癖に辛気臭い無表情で、なんだか見ると自分もつられて無表情になっしまいそうだとか思う隆汰なのだが、黒目ばかりの鹿のような瞳はブラックホールみたいでちょっと吸い込まれそうですごい、という風にも考えちゃったりする。…から…から…から…から…という回し車の音が再び鳴りはじめた。

「ハムスターの怨霊とかつすか？ 恨みつらみでも俺にぶつけるつもりなんすか」

「そうかもしれない。でも、違いかもしれないよ。そんなのどうでもいいんだよ？」

「意味が良くわかんない」

…から…から…から…から…

そういえば俺は何時の間にかこいつが娘だと断定してるけど、座敷わらしのこいつが娘だとは限らないんじゃないかなかつたっけ、その前提を忘れてこいつが娘だと断定してた俺。と隆汰は思い出しながら、「座敷わらし、金玉ついてるか見せてみるよ」と口走った。

座敷わらしは苦笑いをしてから、「ついてないです」と簡潔に答える。その後、

「私、座敷わらしとかとは違います。ちゃんと名前だってあるんですよ？」

と何故か疑問符つきで答えてくる。少しいらつきながら「へえ」と相づちを打つ。

「てらー、って言うんです」

てらー。聞き覚えの無い名前だった。死んだハムスターの名前でもない。死んだハムスターの名前はハム三郎だった。てらーとハム三郎では一致するところがまるでない。

……から……から……から……

二人は大人の歩数十歩ほどの距離で向かい合い、しばらくの間無言で佇む。相変わらず車の音も聞こえなければ、犬が吠えることもない。回し車の音。そして、先ほど夜霧に囲まれていた時には無かった、星が流れるような音。流れ星が発しそうな音。効果音にすれば、キャウウン、とでも言うような。それは言葉を交わしていない間にしか聞こえない程に音量はわずかではあったが、隆汰の耳にはやけに心地よく残る。普段生きている時には、あまり聞くことの無い音だったから。

……から……から……から……

それに対してこの回し車の音は隆汰にとって気持ちの良いものではなかった。死なせてしまったハム三郎が息もせず籠の中で横たわっていた昔のことが思い出される。今、隆汰の脳裏には元気に回し車を走っているハム三郎の姿がある。生きている時と、死んでいる時。それが交互に思い出される。自然と気持ちが落ち込み、それが時間と共に不愉快に変わる。隆汰は感情の赴くままに眉を潜め、言葉が発する。

「やめてくんないかな。音、うざいんだけど」

「何の音のことを言ってるの？」

「この回し車みたいな音をやめろって言ってるわけ」

「…回し車って、何ですか？」

「このカラカラしてる音のことだ！ それを言ってるわけなんだよ！ わかる？」

「ああ、なるほど。…じゃあ、一つだけお願いがあるのですが」

「お、お願い……？」

「面白い話をしてください」

「…はっ？」

「意味がわかりませんでしたか？ 面白い話をして欲しいと思ったのです」

「……………」

座敷わらしは子どもの癖に大人が他人を出し抜いた時にするような不適な微笑みをしてみせた。隆汰はそれに対する不愉快を感じたすぐ後にそれを通り越して、…呆れた。のぼりあがっていた熱が瞬間的に冷めて、静かな苛つきだけが残った。

……から……から……から……

しかし、不適に微笑んでいる座敷わらしに面白い話をしてあげなければ……から……から……という回し車の音は止まないようだった。八ム三郎の影は隆汰の脳裏でちらつき続ける。隆汰は何か面白い話は思いつかないかと、頭を捻った。しばらくの間、大人の歩数三十歩ほどの距離にある樹の、幹の、縁の荒い穴を眺めながら、頭を捻る。結果、ちよつと面白かった話を思い出した。

「火口のすぐ側で何を血迷ったのか竹馬で跳ね飛びはじめたおじいさんの話なんてどう？」

しかしてらーは首を横に振った。イラツとしたが隆汰は違う話を思いついた。

「ニートになってから頭が狂って小便を便器に流さないと決めた変人の話なんてのはどう？」

しかしてらーは再び首を横に振った。ハードル高いな、と思いなから隆汰はまた違う話。

「じゃあ、三つ目として生まれてしまったせいで差別されてしまった女が、腹いせに爆弾をしこしこ毎日製作していたのだけである日手を滑らせてしまい、誘爆によって街一つを消し飛ばしてしまっただが生きのびた。その生きのびた三つ目の女に復讐をするとちかった少女が一人いて、何故復讐をちかったのかというと両親が爆死させられたから。彼女は三つ目の女を爆死させたかったので、しこしこ爆弾を製作することを自宅に籠ってはじめてた。結果、手を滑らせてしまい少女は爆死してしまっただが、それが動機も含めて二ユースになり、たくさんの人にその話が広まった。一人の死にたがりの男が、そのユースを聞いて怒りを感じた。男は包丁一つを握り締めたまま三つ目の女を探し出す日々を送った。住んでいる地域

は知っていたから、三日で見つけ出すことが出来た。男は三つ目の女を躊躇なく刺し殺した。三つ目の女は、『差別は失くさなくてもいい。どうせ、消し去った後に再び生まれる。あなただって明日には刺し殺されるわ』と呟いてから息耐えた。男は殺されることに怯え、自ら胸に包丁を突き立て、死んだ。という話は、どう？」

しかしてらーは首を横に振った。隆汰はもうどうでもよくなつてキレた。

「ハードル高いつつうの！ もう面倒くさくなった。死ね！ みんな死ね！」

から……から……から……

「うるせえ！」

大人気なく喚き散らす。てらーは少しきよとんとした後に、薄笑いを浮かべた。そして、

「落ちましたよ」

と隆汰の足元を指差した。え、と思いながら再び足元を見る隆汰の視線の先にあったのはまた落としてしまった右眼球。また土に塗れている。隆汰は腰を下ろして、「あーあ」と言いながらそれを拾い上げた。「右の手の平に乗っけておくから落ちるんですよ」と下の角度から上から目線の言葉をてらーから投げつけられた隆汰は、「じゃあ、こうすればいいんだろ。土は汚いがカビよりは汚くないな！」とヤケクソみたいな感じで右眼球を元の位置に無理矢理突っ込んだ。だが数秒の後に、ぼろりと右眼球は再び土に落つことになったのだった。

「ぶふ。……うくく。……大変ですね。ちぎれちゃつてると」

幼い座敷わらしのてらーに馬鹿にされながら土に塗れるあまりに土団子みたいになってしまっている眼球を茫然と見ていると面倒臭さがさらに募っていく。何ゆえに隻眼になってしまったのに餓鬼に馬鹿にされるのか。餓鬼じゃなくて座敷わらしだから馬鹿にしてくるのか。座敷わらしは幸せをもたらすのではなかったのか。赤い振袖を身に纏っている座敷わらしは縁起の良い存在ではないのだろうか。

か。そもそもここは何処なのか？

隆汰は深呼吸をすることで気持ちを整えてから、

「いろいろと説明してくれ。俺のことをからかうのも飽きただろう？」

と腹を抱えて笑っているてらーに小さく呻いた。こんなことを言ったら余計に調子に乗ってからかってくるだろうかとも思ったが、意外にも、てらーは笑うのを止めた。そして、

「説明することなんて特にありませんよ。ここは、ただ何も考えずに馬鹿みたいなことをしても許されちゃうくらいに敷居の低い場所ですから。衣食住の必要性が無い幻想的なこの空間では生きるためにしなければならぬことが一つも無いのです」

と語った。

「じゃあ、俺はもう死んでるっていうこと？」

と尋ねると、てらーは穴が開いている枯れ樹の元に駆け寄ってその穴に向けて跳躍、すぼんとちょうど良い感じに穴に納まってみせる。樹の穴に入り込んだてらーは、まるで元々樹の一部分であったかのようにだった。それ程にてらーと穴の相性は良かった。てらーのために穴があり、穴のためにてらーがある、といっても良かった。彼女は穴の中でも不気味に輝いている黒目をこちらに向けながら、

「死んでるんじゃないですか？　ここは死者の集う墓場ですから」と言うのだった。

隆汰は、思わず苦笑い。苦笑いをしながら、

「あ、おれ、死んだんだ？　ほんとに？　はは」

と阿呆みたいに口を開けながら呟いた。

『地獄』にやってきてしまった。そんな実感は右眼がおかしくなっていた時点で、少しはなんとなくわかっているというか、何かがおかしいとは感じていた。けどハッキリ死んだと言われると、何か後頭部を打ち付けられるようなショックがあるのは、否めない。隆汰は、心臓がドク、ドク、ドク、と少し激しく鳴り出したのに気が付く。

できることは、やねることは、蛙跳びをするてらーの後に付いていくとくらのものだった。

不気味な洋館

「他人が自分には得られない物を持つているとすぐに嫉むことが通常の感覚だとして染み付いている死者には気をつけてください。見境というものを持ち得ない死者たちには鉄槌を下す時が訪れるまでは苛立ちと束縛を放り投げられるのですから。もうそんな鎖に縛られるのは嫌でしょう？ あなたは何か大切なことと暖かく生きて行ければそれでいいのならば、そのことにだけ一心腐乱に心を傾けていけばいいのです。勿論、それは難しいことですし得がたいことです。世の中というものはそもそも暖かみを争奪することを前提として回転しているのかもしれないから。ですが争奪を繰り返していては最後には全てが損をすることになるというのもよく言われることです。ですからあなたに必要なのは勇氣と実力です。……ああ、これも暖かみでしたね。勇氣と実力も得がたい代物ですから、多くの方はこぞってこれを得るために奮闘する。得た者は驕り、得られなかった者は嫉む。そんな単純な女々しい構造はこれからは終わりにしましょう。過去の人々は苦しんだかもしれませんが、でも、だからって過去の人は未来の人に鉄槌を下す権利を持ちえることにはなりません。例え全てが過去の人から生まれ出たという理屈を放り投げられても、あなたはそれを拒否してもいいのです。さあ、拒否を。そのため刃をあなたは得なければならぬ。それは強靱なものにしないでならない。狂人になることはないのです。狂人のフリをするだけでいいのです。自らがどうすれば自らにとつての輝く未来を手に出れるのか知っているのならば、或いは知らなくても、願っただけは捨てずに心を保つための抵抗をしましょう。表面的には完全に敗北しても、内面の奥深くが敗北さえしてなければ希望はまた甦る。それさえも潰されなければ大丈夫。勿論その希望さえも潰してしまつたよと嘆く人はいるかもしれない。でもそれは勘違いだ。大丈夫だ。心の奥深くに願いはずっと根付いている。忘れていただけ

でずっと根付いている。これはきつと間違いないことだ。戯言じゃない。だから抵抗のための強靱な刃を手にするために、狂人のフリをしても良い。あなたは今日も、勇敢になれる可能性を秘めている。そのための毎日だと思えば気分はきつと安らぐ。奮えながら安らぐ」演説かと錯覚を起こさせるくらいに長い内容に眩暈を起こしそうになった時に右眼が無いことを再び思い出していた。忘れていたほうが良かったのか、忘れてはいけないのか。そんな二択を決断することにも迷いを感じるが彼はとりあえずの返事をてらーに渡す。「棒読みだったな。感情が込められてないのが丸わかりだよ。でもまあ、お疲れさんだったな……」

隆汰は建物に顔を向け、その様子をうかがう。

枯れた樹があつた場所から三分歩けば到着した。人の住めそうな巨大さを持つ横長の建物の前に隆汰とてらーは、今、いる。そこでは黒ずんでいる埃のような粒子が建物の周囲で浮遊している。特に害をもたらすような感じはしなかった。

横長の建物には窓らしきガラスが何枚も張り込まれているが、黒の粒子はガラスを汚すという行為をしているのだろうか、窓から建物の内部を窺うことは出来ない。漆黒に塗りつぶれている。

怪しい雰囲気存むその、門らしき鉄柵の前に辿りついた時に、てらーは突然先ほどの長文を横にいる相手に向けて語ったのだが、何故そのようなことを突如したのか。てらーによれば、

「儀式みたいなものです。死者が建物に入る直前には、この言葉を贈るようになっていのですよ」

という事だった。

「良い感じだったでしょ？」

と微笑みながら問いかけてくるてらーに隆汰は「よくわからなかった。長々と語られてもね」と仏頂面で答えた。その答えによつててらーがぶすつと不機嫌になるのは当然だったと言える。だがすぐに気を取り直したらしく「ま、いいや」と言いながら懐より鑄が目立つ一本の鍵を取り出した。隆汰がそれを鍵だと判別できた時には、

鍵は鉄柵の下の側にある黒ずみのなかに差し込まれている。特に印象的な音が鳴ることもないままに鍵は抜き取られ、鉄柵は鈍くて重たい、のろまな音を立てて道を開いた。

「地獄の門だつたりしないかな？」

「全てが過不足でない場所に地獄の門などはありませんよ」

「過不足でないことによつて生じる不満だつてあるだろ？」

「用心深いんですね」

てらーはくすくすと笑つてから蛙飛びで道を進み始めた。道は特に曲がつてもなくて真つ直ぐにのびている。てらーの後を追うようにして歩きはじめ鉄柵をくぐると、ぎい、と鈍いのが聞こえてやがて鉄柵が背後で閉じたのが音でわかつた。隆汰は気にせず建物に向けて歩を進める。道の左右は庭になつていて、何か見たことの無いどろどろとしたものが植わっている。どろどろは岩のようでもあり生物のようでもあつた。溶けているどろどろが庭の土に染み込んで、墨のように土を黒くさせているのが印象的に映る。道の部分にだけは墨は迫つてこず、何か避けるようにしてどろどろから発されている墨は道を跨がない。

道には、真つ赤な手跡と足跡が付いている。それは大人のものではなく子どもものらしく見え、小さい。てらーのものだつた。前を蛙飛びで進むてらーの手足の跡が、何故か道に残っているのだつた。ふと隆太が背後に振り向くと、自らの物と思われる真つ赤な足跡が道に残っていることを知つた。それを見ていると不思議な感じもあつたが気持ち悪い感覚の方が強かつた。自分の足跡が自分の意識しないところで付いているというのは果たして自らの責任として扱わなければならないのだろうか、とふと思いついたりした。だが、しばらく見つめてみると手跡や足跡は消失した。時間が経てば形跡は消える。雪の足跡が溶けていつかは消えるのと同じだつた。

「何をしているんですか」。そんな足跡なんて見ても面白くありませんよー」

少し間延びしたようなやる気をあまり感じられないてらーにそう

言われると確かに足跡に面白みは全く無いように感じられた。

どろどろに入らないようにすることにだけわずかな注意を向けながら、建物の入り口と見られる扉の前にまで歩を進める。ふと思いついて腕時計を見た。別に変化はなく、『地獄』という二文字は蛍光したままだった。

「天井からぶら下がっている腐った皮膚の塊みたいなものがあるでしょう？ 初めてこの建物に入った人は大抵があれに嫌悪を感じるんですけど、あなたはどうですか？」

「気持ち悪い」

「そうですか。ですが口には気をつけてください。あれ、ああ見えても生きてるんですよ。一応死者ですからね」

「生きてるんだか死んでるんだかどっちなんだかわかんなくなるね」「死者は死者として生きているってことです。だからお腹が空くこともないし、寒さで凍え死ぬこともなければ痛みで発狂することもありません。そういうわけで、あそこでぶら下がっている死者も皮膚の塊になっただけでも生きています。意識、あるんですよ。今は寝ているみたいですけどね」

「わかるの？ あれが起きてるか寝てるかの判別が付くわけ？」

「気配で分かるようになってきますよ。起きてる時はぶら下がりがらうじゃうじゃ蠢くんです。皮膚の塊の癖に、動くんですよあれ」「気持ち悪いな……」

「あなただつて右眼が無い癖に平然としてる化け物だと思うんですけどね」

「……」

「……片目男ってあだ名なんてどうです？」

「いらねえよ」

天井の薄明かりな照明に縄がくりつけられていて、地に向かって垂れている。その先端にくっ付いてる皺くちゃの、ただのゴミみ

たいなものが生きているのだと言う。しかも死者として生きているわけであって決して生者ではないのだという。だから痛覚も無ければ腹も減らない、と。その代わりとして、あんなにも皺くちやの破裂した風船みたいな容貌になっても意識を保ち続けなければならぬ、といったのだろうか。だとしたらそれはとてつもなく恐ろしいことじゃないか。

隆汰は身震いしてから、「何であんなところに吊らされたままなの？ 可哀想じゃん」と何故か屋内を蛙飛びで跳ね回っている。一に尋ねた。てら一は跳ね回のを止めてから、かくんと首を隆汰の方に向けた後に、「自分で望んだんですよ。あのような状態に陥ることにね。もう一年くらいはあのままだと思いますけど」と、なんともない世間話の一端であるかのように隆汰を驚愕させるようなことを言った。隆汰は当然驚愕した。

「一年もあんな状態です。死者は死なないってというのはそういうことか……」

「ええ。死者が生きているってのはそういうことです」

「へえ………」

「はい」

「……………」

隆汰は縄にぶら下がっている皺くちやな塊を、呆然としてしばらく見つめた。てら一はそんな隆汰を観察しながら、気ままに屋内を飛び跳ね回る。

洋館、と言った雰囲気の内装だった。床がチェス盤であるかのようになり白黒になっていて、天井にはシャンデリアもどきみたいなものが一つぶら下がっていてそこに差し込まれている蠟燭の灯火が薄明かりを作っている。蠟燭は屋内の至るところに見受けられ、一つや二つではない。だが蠟燭が幾つもあるといってもそれのおかげで屋内がまぶしいことにはなっておらず、むしろ薄暗い。壁と壁の間の直角になっている所などは明かりが届いていないせいで影が濃い。二階建ての様子で、一階二階それぞれに個室などに繋がっているの

あろう扉がたくさん設置されている。印象的なのは、肖像画が至るところに置かれているのだが、それが全て同一の人物であるということだ。何か女王のような雰囲気、絵画の中で佇んでいる女性が、屋内のいたるところに目を光らせているようで不気味。全体的に見て洋風仕立てのお化け屋敷に近かった。その中で座敷わらし風のでらーは唯一の和風だとも言えて多少浮いている。しばらく蛙飛びを止めなかったでらーだったが、やがて隆汰が呆然としている所にまで戻ると、「何か考え事をしてるのかもしれないが考えるのは後々。部屋に案内しますから、ついてきてくださいね」と言ってまた蛙飛びで飛び跳ね始めた。隆汰は腐った皮膚の塊に目をやるのを止めて、おとなしくてらーに付き従う。

階段の方角に向かっていたので、二階に行くのだと隆汰は思った。しかし、でらーは途中で階段とは別の方角に進む。そして、一つの肖像画の前、階段の脇にある不気味な女王が佇む絵画の前で、でらーは足を止めたのだった。何なんだと隆汰は不審に思うが、そんな彼にはお構いなしにてらーは絵画に手を伸ばし、厳粛な顔をしている女王の、青色の瞳や、三角な鼻、分厚い唇、などを一見では見出せない不規則な順序でいじくりまわしたのだった。

すると驚くことに、でらーがいじくつた数秒後、絵画の中の女王が動き出した。座っていた椅子から立ち上り、絵画の額縁の外へと出て行き、絵の中から姿を消した。

隆汰は驚きながら声も出さずにいると、数秒後、立ち去った女王が絵の中に帰って来た。彼女は大きな、何かドアらしきものを両手で抱え込んで運んでいる。そして、絵画の丁度額縁目一杯に当たる位置にまでそのドアを運び、置いたのだった。絵画はもう女王をそこに描いておらず、木製のドアだけを描いているという様になった。でらーは別に驚いてもおらず、その絵画の中のドアに付いているドアノブに手を伸ばし、捻った。絵画の中にあるドアのはずなのに、ドアノブは捻られた。そして、ドアは開いた。開いた先にあったのは地下か何かに繋がっているのだと思われる階段。ただでさえ薄暗

い一階と比べて、その階段はさらに薄暗くて何か虫とかがいそうだった。だが、てらーは「さ、いきましよう」とか何事もなかったように振舞う。「地下に部屋があるのか？」と隆汰が尋ねると「そうです」と言いながらてらーはもう階段を降りはじめている。蛙飛びで階段を下りる様は器用極まりない。

「日が当たらないんだろうな。かび臭いんだろうな。ていうか隠し部屋か何かだよ。ゴキブリとかいそうだな。蝙蝠とか……」

一人呟いてもむなしいだけだった。隆汰はため息をついてから、足元に注意して階段を降り始めた。てらーを見失わないようにもしたかったので、大変だった。

大家と血吸機

階段を下りきった所にあつた鋼鉄の錆だらけの扉の前で、懐より先ほどとは違う鍵を取り出した振袖のそいつは真剣な顔つきをしている。

そして妙なことを言った。

「部屋に入ってから、もし、私を殺したいと思つてしまつたら言つてください。殺したい、とハッキリと口に出してください」

隆汰は何か聞き違いをしたのだと思つた。だが、もう一回言つてくれと頼み、てらーに再び発してもらつた結果、聞き違いでなかつたと判る。

「…怖。なんだよそれ。わけわかんない」

背筋に寒気が走つていた。

「……おそらく、入ればわかりますよ」

隆汰はここが自分の想像の範疇を超えた空間かもしれないことを思い出した。そうだ、ここは『地獄』じゃないのか、と。

錆びた鍵が捻られてガチャリと重厚な音が鳴る。鋼鉄の扉と石床がこすれ合つているような音も。もう随分と古びている扉であるのがわかる。その奥にある部屋に何があるのかはまだわからない。隆汰の心臓が不安の音を鳴らす。ギギギ。

彼の心配をよそに気分が悪そうな音をたてながら扉は開き、開くと共に部屋の姿をさらした。

だが。

「もっと殺伐としたおぞましい部屋が現れるんかと思つただけ。何だ、ただのコンクリ尽くしじゃないか」

「コンクリ尽くしなんて変な表現ですね」

「まあ」

別によくある、地下駐車場。その大黒柱の数倍は太いあの支柱みたいなのが無くなつた空間、が暗闇を纏いながら佇んでいる光景

は、隆汰を拍子抜けさせるだけで『殺したい』などという感情を沸き立たせることも無い。なんてつまらないんだ、なんてくだらないんだ、子ども地味たひっかけをされたのだろうか、そう思い隆汰はてらーの横顔の様子をうかがう。だが、そこにはドツキリを成功させた者に生じるにやけがあるわけでもなく、生真面目に緊張している子どもの顔があるのだった。隆汰に再びのつべりとした不安が、蛞蝓のごとく巻きつく。てらーはそんな隆汰の表情を心配風な表情で眺めた後に、

「バケツをひっくり返さないように注意してください」と述べた。

「バケツ？」

尋ねた隆汰のすぐ目の前にてらーの人指し指が示された。その指先に目を向けると、そこには溢れんばかりに液体を含んでいるバケツがたしかに一つ。「あぶなっ」言いながら足を持ち上げてバケツを避ける隆汰。そのバケツ上を通り過ぎた時に、そこに注がれている液体から発されている液体は間違いなく血の臭いを出していると気が付いて鬱々した。

「今の、血？」

「この部屋の主は血液をバケツに溜め込んでおいて、暇な時にそのバケツを全身に浴びることで爽快感を感じてしまう精神異常者だということです。バケツはそこら中にありますよ。そのどれか一つでも倒してしまったらおしまいです。ひどい目にあうでしょう」

「具体的には？」

「具体的には、血を抜かれてぺらぺら人間にされてしまい自力で動くことを出来ない状態にさせられた上で、毎日、業苦のような屈辱を味あわせられるといったところでしょうか。何も起きず、何もできない。生きているし痛みもないのに、その場から動くことも出来ない。…という、苦しみですよ」

「なんでそういう鬼畜なことができる奴がいる部屋に訪れなきゃいけないわけなのか？」

「大家だからですよん。ここに住む人間はみんな彼に挨拶しなければならんです。なぜならばというとな、大家だからなんですよん」
「大家つてシステムが何で必要なのかわからん。お金とか払わなくちゃいけないのかよ。住む上で」

「いいえ。そんなことはありませんが。大家つていう人がいたほうがなんか、いいんじゃないかっていうことで大家がいるだけであつて、世の中の仕組みの一部として大家という立場が存在しているわけではありません。よくわからなくなつてきたかも」

「じゃあどういう理由なんだつて話」

「死者の世界は退屈だからわけわかんないことになるつていう理由です」

「そついうことか」

「ちなみに今通過したバケツは一番です」

「一番？」

「二番もあれば、三番もあります。確か今は百番まであつたかな」

「なんで、番号が……？」

「そりゃ、ラベリングしてるんでしよう」

「どついう理由で？」

「どの血液がどの人のものなのかハッキリさせないとダメつてことでしょ？ A型の血液を浴びたいのにB型の血液を浴びてしまったら悲しいつてことじゃないですか？」

「えー。まじきち」

「気をつけてください。この部屋は一見ただの地下駐車場ですが、混沌が詰まっているのですから。大家以外にもここに住み着いている死者たちは厄介者ばかりです。ほら、例えば向こうで全裸の女が二人いて、蟹股で蟹歩きをしている光景なんて、まさしくカオスそのものではありませんか」

「本当だ。色気も糞もないね。つてことは、あれの男版なんてのもいるのかな？」

「向こうで縄跳びをしながらハーモニカを吹いている男性なんての

はおかしいですよ」

「あ、本当だ。しかも何故か白鳥の湖みたいな服装してるし」

「アヒルのワルツですね」

「なんかそれ違うような。てか、何あそこにいる人。小刻みに頷いてる理由がわからない」

「あー。あれは肯定を繰り返すことで脳内を活発化させようとひらめいた、とか語ってた人です。まあよくわかりませんが、ただの終わってる人です」

「ああ、なるほどね。じゃあ、向こう側にある日本刀で素振りをしている女性は？」

「あれはすごいよ。なんつったってすごい。人を一度も切ったことが無い日本刀の使い手です」

「使い手なのかそれは？」

「雰囲気すごいでしょ？ 弓道の選手が実際に人間を打ち抜かないのと同じです。文化ですよ。競技ですよ。そういう美しさですよ」

「よくわからない。ていうか何だか、殺したい。あっちにいる五人組はなにあれ？」

「あれはダンスグループです。プロに憧れてかれこれ三百年はずっと練習していたのですが、その内にプロを遥かに超える技術を習得しました。しかし彼らはそのことに気が付かず、いまだにプロを目指しているのです。永遠に届かない課題だぜ、なんて呟きながら踊ってるのです」

「ふうん。なんかそれすごいね。いやーそれにしてもコロっとした死体が転がっていきそうな場所だね。あれ、何いってんだる俺」

「あ、今、何て言いましたか？ 聞き取れなかったんですが」

「殺したいって」

「あ、だめだ」

「え」

怒りがわなないていた。むかつきともとれたしイラつきとも取れる。自分の感情なのだからどう取ったって構わないことだ。とにかく怒っていた。怒りに任せて憎悪を増幅させることでオーラパワーみたいなのが爆発してハイパー化しないかなと感じる。実際、北斗の拳のケンシロウが服をびりびり破りちぎるのと同じように、現在自分を縛り付けている縄をぶつちぎって身体を自由にさせることも出来るだろう。だがこの『地獄』では漫画のような展開が生じるわけではなく、元々自分がただの人間という事実は変わらないらしく、どんなに嫌だ！と叫ぼうが、どんなに今を改善したい！と縄に縛り付けられてパイプ椅子に座らせられながら叫ぼうが、どうしようもないようだった。手足の自由さえも奪われている。自由なのはこうして頭の中で思考をさせてもらえるという点だけだ。

『殺したい』と隆汰が言った瞬間に『あ』と言いなから残像を残して彼の視界からてらーは消失した。しばらく彼は戸惑いながら、その場にて固まってしまったが、後頭部に鈍器らしき重たいもので殴られたような衝撃。倒れるに付して額をコンクリにぶつけた直後に隆汰は目の前がふわふわと霞んで薄れていくのを実感しながら、意識をなくしたのだった。

で、目を覚ましたら、猿ぐつわをかまされ手足を縛られパイプ椅子に固定されて身動きできない状態にされていたというわけだった。「んーんー」と喚いた隆汰に、びしい、と鞭が振り下ろされる。別に痛くはなかつたけど、なんとなく鞭でしばかれたノリに合わせて「んがー」と咆哮する隆汰。その周囲三百六十度には血が目一杯に入れ込まれている。「一番」などとラベリングされたバケツがこれでもかこれでもかと置かれており、臭いが凄まじく鉄分。なんだよこれまじ最悪だ、と思う隆汰に再び鞭が振り下ろされ、びしい、「んがー」となる。鞭を振り下ろしているのは仮面舞踏会に参加するよな人がつける名前のわからない蝶々をかたどった仮面を装着している、てらー。仮面をつけて変装をしているつもりなのか、それともただ単にノリなのかはわからないが、多分後者だろう。変装する

ならせめて振袖という目立つ姿成りを変えるはずだから。

そのてらーの隣にいる一人の人物。そいつが大家なのだ。隆汰はすぐに理解する。あまりに存在感が強すぎて、大家っぽいことから断定できた。

「……悪くない血を持っていそうだが、すこし物足りなさそうでもあるねえ。てらー。鞭をしまいなさい。そんな無駄なことをしてもしょうがないんだよ。さつさと吸いたいたいんだ私は」

「あ、すみません、了解です。つい面白くって」

「面白くってじゃないんだよダメな子だね！ ほらさつさとせんかい！ 吸い取るんだよ。吸い取れ！ 私はさつさと血液を頭から被らないといけないって何度言わせれば分かる！ 阿呆間抜け！ そもそもなんなんだそもそもなんなんだ。私はなんで血液なんて浴びる奇人変人の類として生きていかなけりゃならないんだ。意味わかんねえ。全部殺したい。ああ、ああ、いらいらする」

「そ、それは……」

「私が置いてるバケツが悪いつてんだろ！？ わかってんだよ阿呆ボケ糺な娘だねえ！ もういいや！ とにかくさつさと吸い取りたいんだよ私は！ わかってんだからさつさと私に血吸機を手渡すんだよどんくさいのろま！ ああ、いらいらする。いらいらする」

「た、ただいま、お持ちしますう」

仮面舞踏会でつけるような蝶々型仮面を顔から外し、焦りを浮かばせながらてらーは逃げるようにして蛙飛びをしていつて暗闇に紛れた。それから数分の間、隆汰と大家は無言でお互い見合ったまま何も話さない。隆汰はさつきまで怒りに満ち満ちていたが、血吸機という聞き慣れない言葉を聞いた瞬間に怒りがスツと冷め、その代わりに全身をはいずるような恐怖が心臓をギョツと締め付けるのだった。そのせいで口など利けるはずもなかった。

対して向かい側にいる大家。

風貌はまさしく修羅だと言える。どう修羅なのか。全身が真っ赤なのがまず修羅である。人の形をしているのだけど人に見えない。

人の形を模しただけの、何か違う生き物にしか見えなかった。血が瘡蓋のようになって赤黒くなっている部分と、血液がぼたぼたと垂れている部分、その二つだけで全身が覆われている大家。それが生きていくというのが不思議な存在。先ほどの声つきでようやく女性だとわかったが、髪の毛も無いのだから、声が無ければ間違いなく女性だと判断することはなかった。衣服は身に纏っていないらしく、胸の完全に垂れてしまっている様子などが隆汰の位置からでもわかる。とにかく、異常な風貌。そんな彼女はたしかに微笑んでいる。隆汰に向けて、歯を見せている。金歯だ。歯の部分だけが黄金に輝いている。

「ご馳走を前にしてよだれを垂らしそうなほどに喜んでいる修羅。隆汰はそんな存在の前で逃げ出すことも出来ないし反抗することもままならない。猿ぐつわのせいで叫ぶこともろくに出来ない。

危険が迫っている。どうにかしなければ血を吸い取られ、死なないままにずっと身動きもとれず永遠の退屈を味わうてはならなくなる。そんなことは隆汰はごめんだった。どうにかしたい。でもどうにもならない。そのジレンマ。「うがが」と隆汰は呻く。そんな彼を眺めている大家は、

「無駄、無駄」

と短くいうと薄笑いをする。そんな状態のまま時間が過ぎて行き、やがて遙か向こう側から一人の人物が。暗闇から蛙飛びで一人の人物が現れてしまった。てらーはどうみても掃除機にしか見えない、その血吸機、とかいうやつを携えながら、「お、おもちしましたあー」などとナヨナヨした風に言っている。「遅いんだよ！」大家は咆哮しながら立ち上がる。そしててらーから荒々しく血吸機たる代物を奪い取ると、その先端のホースみたいになつて握り、にやにや微笑んだまま、隆汰のほうへと近づいてくるのだった。血の臭いを振りまきながら。

猿ぐつわを外され、口の中にホースを突っ込まれる。隆汰は目をひんむいて、嫌々の仕草をするが大家は薄く笑って金歯を見せ付け

るだけだ。もう逃げられない。全て吸い尽くされる。血液を骨の髄まで搾り取られて死者としてひどい有様になる。さつき皮膚の塊として天井からぶら下がっていた存在と同じくらいに哀れな有り様になるに違いない。

「では、スイツチ押しますよー」

「よろしくどうぞ」

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん。

ぶちやちやちやちや。ぶちやちやちやちや。

ぶちやちやちやちや。ぶちやちや。

ぶつちやーぶちやぶちやちやちやちやちや。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおおん。

ぶちやちやちやちや。ぶちやちやちやちや。

ぶちやちやちやちや。ぶちやちや。

ぶつちやーぶちやぶちやちやちやちやちや。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおん。

ぶちやちやちやちや。ぶちやちやちや。

ぶちやちやちやちや。ぶちやちや。

ぶつちやーぶちやぶちやちやちやちやちや。

意識が遠のき、世界が回る。様々なものが内側から外側へ飛び出していく。

嫌だなあ、気持ち悪いなあ。そんな隆汰の気持ちなど、涙にしか変わらない。その涙でさえ、血吸機によって吸い取られていく。

ふと、彼女のことを思う。あの人はこの『地獄』にいるのだろうか、と。

なさけないな、と自嘲したところで、全てが途切れた。

思い出1

ねえ、聞こえてるの？

「聞こえてるよ…」

男は答える。女の声に。

だが、実際的には、ほとんど相手の言葉を聞き流していた。聞きたいとは思っていたが気力がその時はなくて、眠気が凄まじく襲い掛かっていたから、向かい側に座っている相手の言葉が念仏のように唱えられ続けるのを、延々と、意味も考えずに聞いていた。だからきつと男の目は死んでいる魚だったのだろう。

そういうわけで、向かい側に座っている女は、その不自然さに気が付き眉を潜め、相手に確認をしたというわけだ。男は、元々聞いていなかったわけだから、もう少し眠気が凄まじくなっていけば、相手の問いにそのまま正直に答えてしまうところだったかもしれない。聞いてなかった、と。だが、まだそこまでの油断はしていなかったということだ。女は、ふふ、と可笑しそうに笑った後に、

「本当じゃないでしょ？ 本当は聞いてなかった」

と男に問うた。男は少し表情を固まらせた後に、苦笑いをするしかなかった。ははは、と面白くもなさそうに頬をひきつらせて、ごまかすような体を取った。女は静かにため息をついてから、

「もう寝ててもいいよ。私、一人でも喋り続けられるかもしない。少なくとも、話を聞いているふりをしておいて、実際には相づちだけで何も聞いてもらえないよりは、独り言を言い続ける変な女だと思われたほうが、マシだから！」

女は、病人かと思紛うほどに血色が薄く、青白い肌をしている。にも関わらず声質は力強くて滑舌も良い。感情を時々、興奮のあまりか身振り手振りを加えつつ表現する。意識的というよりは、自然

的に勢いでやってしまふ身振り手振りだから、その動きをやつてしまった後に彼女は、ぴく、と眉毛を少しだけ反応させる。そして、おずおずと恥ずかしそうに、感情で動かしてしまった手、足、などの動きを自重するようになる。「ああ、また、やってしまった」と、呟き、周囲、ファミリーストラン内を見渡す。現在は、店内に客は他にいないので、店内を見渡す必要はそもそも無かつたし、そもそも、そうやってキョロキョロ辺りを見渡す行為自体が目立つのでやめたほうがよかつた。

男は、厨房のほうから不思議そうな視線をこちらに送つてきている学生風のウエイトレスに観察されているような気がして微妙な気持ちになりながら、しかし女に、「やめるように気をつけるよ。意識すれば、やめられることだよ」と忠告できなかつた。男自体がその女の動きを楽しんでみてしまつていてからという理由でもあるし、忠告する気力さえも失われているから、という理由でもあつた。後者の理由の方が圧倒的に強い。

男は 女の言葉に相づちを打つ程度のことしか出来ない程に、或いは、女の社会的に見て奇妙に思われる行為を忠告する気力も持たないほどに やる気が足りなかつた。気合が足りていなかつた。そんな男に対して、女は怒りを感じて感情的になつてしまつらしく、身振り手振りを混ぜて、語気を強める。その目立つ動作をしている女のことを、お店のウエイトレスや料理人が気が付き不審に思つたり戸惑つたりしている様を、無気力の男は時々確認する…。確認するだけで、他に何をしてもない。見てんじやねえよ、コラ、と怒鳴ることもしない。悪態を付くこともしない。

で、頭の中で一つの文章を起動させる。で、それだけすれば気持ちも穏やかだつた。穏やかというか、心内でもやもやとしている何かが霧散してどっかに飛んでいくという感じ。

(……………これら全ては、どうでも良いことだ)

男はこの言葉を脳内で呟くだけで、全ての厄介事、面倒事、考えなければいけないこと、をどっか遠くに蹴っ飛ばして爆発させて消

失させることが出来た。単純な内容の文章にも関わらず、その効果は抜群で、本当にいろいろと面倒なことを考えないようにできてしまっていた。男は、だから、女の怒りの感情の様子も、そして激しい身振り手振りから生じるわずらわしさも、全て気にしないでいることに成功している。女の、その血色の薄い顔つきを、ぼんやりと見つめているのだ。そして彼女の怒りがおさまるのをひたすらに待ち、機嫌が良くなった時に浮かべる表情を見れば男はとりあえず、それで彼女との日常はオツケーだった。満足だった。男はその表情をみるために、女と一緒にいると言っても過言では無いという程に、その表情のために生きている。

その表情のために生きている、というのはさすがに嘘じゃないかと男は自らの脳内に否定の釘を打ち込んでから、ぼんやりと窓の外を青空を眺めた。今日は快晴で、雲が一つもない。

澄み渡っている青は、何かブルーシートを被せられているみたいな錯覚を起こさせるせいで、ふと、空が恐ろしく狭いものなのではないか、と気が付かされてしまう。あまり、気持ち良くない。

男はしばし、ぼんやりとした。向かい側に座っている女が真剣な顔つきをして、何やら本気で語っているのを、BGMにして、青空ブルーシートに覆われているその下で、女の言葉を何一つ理解しようとはしないままに、表情を変えて欲しいなあ、変えてくれと頼めば変えてくれるだろうか、などと脳内で呟いたりするのだった。

だが、そんな風に男の、女を小馬鹿にしたような、適当にあしらっているような、態度をずっと放置していられる程、女は気長でも無ければ鈍感でもない。

女は眉間に、恐ろしいほどにくっきりとした形の皺、を作り出すと、

「あーあ。つまんない」と三回くらい言った。めちゃくちゃつまらなさそうに、三回くらい言った。

そして、手元にあったまだ封のされたままの、おしぼり、をギュッと握りしめ、破裂音でも鳴らそうとしたらしいが、空気が抜けた

ような音しか鳴らなくて空虚だった。

男は、厨房の様子を窺ってみた。いまや学生風ウエイトレスさんは白けたような目で、こちらを眺めていた。客をじっと見つめすぎだ、いい加減にしる、何か仕事を見つけてそれをやっている、と罵倒する気力が男には無かったし、このファミリーレストランにこれ以上いても、空気がどんどん濁って心身までダメになってしまいうだった。

「どっか行こうか。何だかもうちよっとイベントがあるような、そういう、そこにいるだけで楽しくなってくるような場所、探した方がきつと楽しい」

提案すると、女はうんうんと何回か頷いてから、

「いいけど、行く当ては何かあるの？」と男に尋ねたが、もう女はファミリーレストランを出るような体制に移っていて、実に気が早いというか、そんなに現状をつまらなく思っていたのだろうか、という疑念を男に思わせる。

女はもう立ち上がった。そして、「どうする？」と男に尋ねる。

ゆったり立ち上がりながら男は、女に向けて、

「…当てが特にあるわけでもないけど。とりあえず歩くとか」

とぼそぼそとした声で告げる。そんな様子の男から目を背けた女は、

「そのプランは大丈夫じゃないっていう予感がするけどな…」

と言いつつも、何か含んだような微笑みを発するのだった。

二人は、ファミリーレストランを出て行った。

そして、手を繋いだ。

街中を少し外れた場所に、小さな神社がある。何時訪れても人がおらず、たまに建物の陰に隠れて怪しい気配の男女がいたり、喧嘩が生じる寸前の餓鬼たちがいたりする時があるが、大抵は人がいない。二人はこの場所をよく訪れていた。何の行き場所が無い時は、

自然とここに足を運んだ。一つだけある木製のベンチに腰をかけ、近くにある自動販売機で暖かい飲み物を二つ買う。コーンポタージュと、ココア。男はコーンポタージュを飲み、女はココアを飲む。

神社の入り口から入ってすぐの場所にあるベンチ、から境内の奥の方を見れば、一人の神主が何かと思われる人が箒で地面を掃いている。何回もこの場所を訪れてきたというのに、その神主と思われる人物を見かけたのは初めてだった。身長高めで、身体が細い。何だか格好良い風体をしている神主だった。

二人は特に会話を交わすでもなく、寒空の下、暖かい缶を両手で握り締め、そして中に入っている暖かな液体を口に含み、咽喉に流し込んでいく。冷えた体にありがたい暖かみを。

随分と長い間、静かだった。境内は街が鳴らす喧騒から遠ざかっていて、自動車のエンジン音も、どこか遠くから響いてくるだけで、近くから聞こえてくるのはガラスの鳴き声。普段、街中では耳に入ってくることもすらない鳴き声が、うるさいほどに連なっていて、そしてそれ以外には音は無いようなものだった。神主らしき人物の箒で地面を掃く音がハッキリと聞こえて来るほどに、この場所は静寂に包まれていた。

やがてココア飲み終えた女は、立ち上がり、近くにあつたゴミ箱へと歩み寄るとそこに空き缶を落とした。普段は、少し遠目の位置から、投げて、缶をゴミ箱に入れようとするのだが。今日は神主がいるから控えたのかもしれない。なかった。

ゴミ箱の方から戻ってきた女は、「飲むの、遅いね」と言いながら男の隣に座った。

「いいじゃん、別に」男はぼやくように言ってから、一気に缶の残りを飲み込んでみせた。そして立ち上がり、女と同じように、いつもとは違う控えた仕草で、缶をゴミ箱の中に落とす。

それからは二人、木製のベンチに座ったままだった。いつもより長く、そこにいた。

二人にとっての空間だという風に、二人はわかっている。だから

二人にとってこの時間、空間は失いたくないもので、貴重なもので、何かが極端に違っていてはいけない。時間を座ったまま、会話もせずにそこで意味も無さそうに二人は佇んでいるが、意味は間違いないものであつて、むしろ普段の生活よりもこの時間こそが大切に密度の濃いものではあつた。それは、二人とも感じていること。

風が吹く。マフラーを忘れていたら首元がひんやりとしてしまう、とても冷たい風だ。境内は様々なものが古びていて、色褪せている。二人はまだ、この場を立ち去ろうとはしない。

やがて、唐突に、女が口を開いた。

「言いたいことが、あるんだけど」

何か真剣味を帯びていた。男は思わず女の方に顔を向けるが、女は神主のほうを見ていて、ちょうど男にそっぽを向いている形。不安を煽る。

「何…何か嫌な気分になるようなことやったりした？ 俺」

「そういうことじゃ、ないんだけどね」

「じゃ、何」

「……………」

女は男の隣から勢い良く立ち上がり、そして立ち上がった場所できると一回りした後、笑った。笑顔を作つて、そして男の方へと顔を向けた。女はとても緊張していてその緊張を取り繕うために笑顔なのだと男は気が付く。だから男も気を張つて、体を強張らせた。何を言われるのか、と、女の唇を注視した。唇はなめらかに動き、言葉を静寂の中で、踊らせる。

「私、やっぱり、結婚したいな」

男は、その言葉を聞いた途端に、全身に冷や汗が走るのを止めることが出来なかった。女が微笑みながら男のことを見ていたが、物の数秒で男は女から目を反らしてしまった。

「まだ…無理だろ…」

その一言を述べるだけでも精一杯だった。冬だというのに汗を掻いてしまったから、とても寒い。それなのに顔回りだけが、熱い。

「…そつかあ」

男は女が少し残念そうにしているだけでひどくなさけなかったが、悲しいという感情が膨れ上がっているのは女だということはわかっていた。だが、女の顔を直視することも出来ず、足元にある自らの灰色の靴を眺めることしか、出来なかった。

男には自信がなかった。結婚という行為をすれば、お互いが不幸になるような気がしていて、その予感から逃れることがずっと、出来なかった。

男は、一度だけ女の顔を見ると、そこに嬉しいのか悲しいのか判断が付かないような、今にも泣き崩れてもおかしくなさそうな、そんな微笑みを貼り付けている表情があるのに気が付く。

こんな表情を見たくはなかったな。

しかしどうしようもないとも、男は感じている。

だからカラスの鳴き声を聞いていた。神主の箒で地面を掃く音を聞いていた。

自分の灰色の靴をぼんやりと、見下ろしていた。

「ほんの少し勇気を出してくれば、やっていけると思うんだけど。きつと二人で頑張っていけばいろいろと上手くいくと思うし、大変なことも乗り越えていけると思うんだけど」

女はもうそつぽを向いていた。発される言葉が、少し涙含みであることに気が付き、男はもう完全に前を向くことが出来なくなった。前を向くことが出来ないで、下を向いたまま何かを言おうと思っただけど、何も思いつかない。灰色の靴を見下ろしていたって、何も思いつかない。だが、耳を澄ませばカラスが鳴いているのは聞こえてくる。男は、ぼやいた。思いついた言葉を、そのまま口から放った。

「カラスって、うるさいよな…」

女はさすがに、何の返事も、しなかった。

フレディ・マーキュリー似のおっさんは歌う

死者の世界では命が失われることは無いが、しかし、死んでいるとされる状況というのはあって、それが何かというところと全く身動きが取れず自分の意志で行動することが出来なくなってしまった死者のことは『死んでいる』とされる。身動きがとれず意志があるだけの状態などというのは生きてるとも言えないし死んでもとも言えない状況なのだが、死者の世界的にはもうそいつは『死んでいる』とされるのである。「あいつ、死んでるね」と通りすがりに言われたりする。

「あのくるくるされてるの。来たばかりなのに死んだんだぜ。なさないよな…」

地下駐車場に似ているその場所にて、哀れな男に対して嘲りと同情が向けられる。けたけたと笑いながら、嘲りと同情は通り過ぎて姿を消していく。

のっぺりとした暗闇と血の匂いばかりが充満しているその場所は、ひたすらに広く、何が暗がりにも潜んでいるのかも判然としない不気味さを持っている。実際に、気が狂った死者たちは腐ったような粘り気を持った息を吐きながら暗闇に紛れているのだから、その場所は危険だ。

そんな場所にて、朝野隆汰は、ぺらぺらにされた身体をまるでピザの生地を回すかのようにして、フレディ・マーキュリーに似たおっさんに回転させられていた。コックの格好をしているおっさんだが、何ゆえに隆汰のぺらぺら身体を回しているのかは、近くに鍋や釜戸や包丁やまな板が見受けられない所から見ると、料理のためというわけではなさそうだ。おそらく、ただ単におっさんはそれを回したいから回しているだけなのであろう。

俺はフレディに似てると言われるが
べつにゲイでもホモでもないんだぜ
俺はフレディに似てると言われるが
なんてことはないノンケなんだぜ
死んだ俺たちにも人間の習慣と悪癖はこびりつく
その全ての悪を葬り去って地獄を謳歌したい
さあ 手を取り合おうぜ
回せポジティブにシンキング 滅ぼせネガティブなシンキング
回せポジティブにシンキング 滅ぼせネガティブなシンキング
どこまでも肩を組んで笑いあおうぜ

俺はフレディに似てると言われるんだ
マーキュリーだ 顔と体格が似てるって
べつにゲイでもホモでもないんだぜ
ノンケなおっさんだ
死んだ俺たちにも人間の習慣と悪癖はこびりつく
その全ての悪を葬り去って地獄を謳歌しよう
さあ 考えはまとまったな？ 準備は整ったな？
今すぐにこの檻を蹴り飛ばせ力の限りにさ！
回すぜポジティブにシンキング 滅ぼせネガティブなシンキング
回すぜポジティブにシンキング 滅ぼせネガティブにシンキング
世界は明日から（そうだけ世界は） 世界は明日から（檻を蹴り
飛ばせ） 世界は明日から（何時だって俺たちは）
オールオツケー！

フレディ・マーキュリーに似たおっさんは自作と思われる歌をポ
ップなリズムで口ずさんでいる。その歌がどのような理由から作ら
れたのか、おそらくおっさん以外にはその仔細がわからない歌では
あるが何だか全体的にポジティブで良い歌である、なんて通りすが

りの狂人は思いながら通り過ぎて消えて行った。

通りすがりの狂人などは、歌を聞くとっても、しばし立ち止まって旋律に耳を任せるのはおよそ四、五分であり、一回その曲を聴けばまあよかったと言って立ち去る。だが、ぺらぺら状態のせいでされるがままにピザの生地の上は、無量大数といってもいいほどに延々と曲を聞かされる。ただでさえ、血液を抜かれてぺらぺらになっている、という生者の時では決して体験し得ないような摩訶不思議な状態だというのに、わけのわからないおっさんにくるくる回転させられた上でよくわからない歌をエンドレスリピートというのは、悲惨だ。隆汰は溶けているような意識の中で、泣きたいな、という感情になるが、残念ながら、泣くという行為が出来ない。その悲惨が、無残が、隆汰にとつての現在だ。現実だった。唯一マシなのは、意識を失くして夢を見る時くらいのも物だった。

だが先ほど見た、彼女との思い出。それは夢と言うには少し生々しさが濃くて、あまり良いものとも感じられなかったのだが。

世界を悲観しているのか 自分を諦めているのか
苦い過去に締め付けられて身動きが出来ないのか
俺はフレディに似ていると言われるが

つまらないことにノンケなんだぜ
死んでいる俺たちにも昔の記憶は存在してる

悔やんで憎んで世界を血走った眼で見る必要は無い

さあ、俺と回るうぜ
回せポジティブにシンキング 止めるネガティブなシンキング
回せポジティブにシンキング 止めるネガティブなシンキング
どこまでも肩を組んで飛び出そうぜ

さあもうUFOだって見えてきた！

こんな薄暗い地獄でもいつかは虹だって見えるさ！

俺たちを縛り付ける透明な檻はもう折れる寸前さ

愚劣で幼稚な真心だ 全部がもう愉快だ！

回すぜポジティブにシンキング 止めるネガティブなシンキング
回すぜポジティブにシンキング 止めるネガティブにシンキング
世界は今日から（そうだけ俺たちは） 世界は今日から（ほら奇跡が溢れてる） 世界は今日から（何時だって俺たちは）
ワンダフォオオオアンドェット！

フレディ・マーキュリー似のおっさんの歌は何時までもポップなリズムでエンドレスリピート。コック姿で口ひげを得意気に生やしている彼が何ゆえに歌を歌うのかはわからないし、隆汰のぺらぺら身体をピザの生地扱いする理由も謎だ。隆汰が意識を取り戻した時には、既に回転させられていたのだった。

隆汰はため息を吐きたい。はあ、と盛大に吐きたかった。だがため息を吐くという行為をするための能力が無い。故に、それが出来ない。それなのに自分の意識だけがあるという生者の時には決してありえない状況を、受け入れている。そのことが、自分で不思議。ふわふわと不思議。

だけど不思議な感覚が途切れることは無く、微妙な均衡で、意識はそれなりに保たれ続けてしまう。途切れたりしない。不安定さと違和感と、説明できない襲い掛かるような恐怖みたいなものはあったが、自分は狂ってはいないと感じられる程度の正常な状態ではあった。

足りないのは身体を動かす力。血液が、一滴も無い。

（血液さえ取り戻せたなら！）

おっさんにくるくる回転させられるだけの隆汰は死者として死んでいる。死んだ者が甦るといふことは現世ではあり得ない。地獄では、果たしてそれがあり得るのか。死んでいる状態から生きている状態に戻ることは出来るのか。永遠に続いてしまう退屈から抜け出

すことは出来るのか……。

永遠に続く退屈。とても重たい。そのような重荷を背負わされているのに自分の気が狂わないことが、隆汰には不思議だった。

もしかすると、睡眠という、人間の心身を癒す上でとても重要なことを体験できるということ、（それが睡眠と言えるかはわからない。ただ睡眠と類似している体験を血液の無いペラペラ人間の隆汰は経験することが出来ているのは事実。よって隆汰にとってその体験は、間違いなく、睡眠だ）それのおかげで、隆汰の意識は完全な支離滅裂に陥らないのかもしれないかもしれない。なかった。

くるくるくるくる。回り続ける。回され続ける。

回され続けるのが眠気を呼び起こすのだろうか。

やがて隆汰は、睡魔に襲われ、夢の世界へと引きずり込まれていった……。

思い出2

「遊園地に行こう。テーマパークへ！ 券をね、もらったの、知り合いから。あなたも知ってる人。私の友達の。二枚、くれたの。行けなくなつたから代わりに行ってきてくれないかって。期間限定なんだって……」

バスに乗ってその場所に向う途中に会話はあまり弾まなくて、どことなく、楽しむために盛り上がっている他の乗客たちと比べて、比較的重たい空気になってしまっている二人であったが、先日、境内で行き違いをしたからこそ、このような空気になってしまっている部分は確かにあって、ひきずっていた。ひきずらなければいいのに、まだ、ひきずってる。そんな中でのテーマパークへのお誘い。さらに天気も曇りで、雨とか降ってきそうな、鬱屈ぶり。天気予報では晴れだったのに。

だが、雨だろうが晴れだろうが曇りだろうがバスは突き進んでいく。どこに向って？ テーマパークに向って。

「この前の話、あれ、本気じゃなかった。ちょっと、からかってみただけ。正直に言っと、私も、あなたと一緒にやっていけるかどうか、微妙だな、って思ってる。だってあなたは、頼りがいがあまりにも無さすぎるもの。これじゃ、お互い死んでしまふよね」

突然何を言い出すんだ、と思った男は、

「はい？」と少し間の抜けた声で言った。女は含み笑いをしてから、続ける。

「幸せになれないってこと。いろいろと考えた結果、徹夜をして真剣に考えてみた結果、そういう結論にとりあえず達したんだよ。だからもうやめよう。今日でやめよう。テーマパークで目一杯、精一杯、楽しんだ後にお別れのキスでもしてから、別れよう。そのため今日はあなたを遊園地に誘ったの。私たち二人じゃ幸せにはなれない。それにやっと私は、気が付いたの」

「券、貰ったんじゃない」

「私を買ったの。二人分」

「……………」

男は何も、言えなくなる。

女も何も喋らなくなり、二人の重みはさらに増していく。身動きが取れなくなる程に。

周囲の人間たちは皆、期待感を胸に潜ませて、そして漏れてしまう期待感を口から放出している。だというのに、二人には嘆息が良く似合う。ため息が様になる雰囲気垂れ流している。

隣の座席に座っているカップルは、二人のことを密かに伺っていて、少し楽しみながらどのような展開になるのかと思っていたが、時が経てば経つほど、二人のことを深刻に心配したくなった。

「大丈夫かな」「どうだかな」

しかしいくら心配しても、二人は一向に明るくはならず、むしろ沈んでいっているということが、隣のカップルからは手に取るようにしてわかる。

バスはまだ、道の途中だ。気まずい二人の空気は、ますます気まづくなっていく。

随分と昔、バブルが弾ける以前に建設されたというそのテーマパークは、経営者の手腕が凄まじかったのだろうか、バブルが弾けた煽りを受けて経営破綻をすることもなく、平成になっても生き延びている。むしろ訪れるお客の数は過去より増加しており、年々設備も充実するので、経営は誰が見ても上手くいっていると見える。つまりそこは、国内有数の、テーマパークだ。

三連休ということのせいも、大勢の人が肩をぶつけ合うような混雑の中を歩いていて、その多くは家族連れや、カップルや、友達同士であり、一人でこの場所を訪れている者は少ない。

男は、一人で、隅っこの方で立ち尽くしていた。そして流れ行く

人ゴミをぼんやりと見つめている。そんな寂しい背中が目立つたの
だろうか、象のマスコットキャラクターの『パオローン』君が彼に
風船を持ってきた。男はパオローン君の真ん丸な瞳に何か悪意を感
じたが、気にせず風船を受け取ることにして、赤色の風船を選ん
だ。パオローン君は何かそういう訓練を受けているのだろうか、男が
風船を手についた瞬間に、「パオパオパオーン、パオパオパオーン、
パオパオパオーン」とリズムカルに鳴いて、周囲からの視線を釘付
けにしてみせたのだった。

男は群集より、パオローン君のついでに自分も注目されているよ
うな気がして、恥ずかしくなり、パオローン君に対して負の感情を
感じる。ジツ、としばらく男は険しい表情をパオローン君に向ける
と、しばらくパオパオナリズムで気持ち良さそうにしていたパオル
ーン君が、反省したということなのだろう可愛らしくうな垂れるポ
ーズを作って、そのまま何処かへと消えていった。その後姿はどこ
かしよんぼりしていたので、すこし男は申し訳なく思ったが、どう
にもこの時男には余裕が無かった。

そんな彼の背後に、人ゴミをぬって、再び迫り来る者がいた。そ
いつは両手に何かを携えていて、そして男のすぐ後ろにまで近づい
た瞬間に、思いつきり携えていた物を男の両頬に当ててみせた。

「ひえ！」男はあまりの冷たさに跳ね上がり、慌てて後ろに振り向
く。

「へへへ」悪戯を成功させた喜びで楽しそうにしている女の姿が、
目の前にあった。両手に携えているのは、冬だというのに冷たいジ
ュース。片方を受け取りストローで吸い取る。中身は、メロンジュ
ースだった。全然、冷たい。

「何を考えて…」と言いかけた男に被せるようにして女は、

「これからどんどん盛り上げていこー。今日は二人で楽しむ最後の
日です。そのためには飲み物が必要不可欠！ 何故ならば喋りすぎ
ると咽喉が渴くからね。冷たくなる分はテンションでカバーすれば
良いんだよ」

捲くし立てるようにして言うので、男は付いていくことも危うい。「なあ、別れる必要なんてないじゃん。結論出すの早いよ。もうちょつと話し合って決めた方がいいだろこういうの」

十字路に出た。真っ直ぐに進めばSFチックなアトラクションが楽しめるし、右側に行けばショッピンングが楽しめる。左側に行けば、動物たちと戯れることが出来る。男はどの方向に向おうか尋ねようとしたが、その直前に女が、「…何をいまさら話し合い…」とぼやくので口を閉じた。

女からすれば話し合いはいまさらだということを、男はわかっただけでなかった。知らなかった。

気まずい空気のまま、右折も左折も出来ずに、気まずさが理由で真っ直ぐに突き進むことになった。二人、てぼてぼと歩く。

その途中で、男は違和感に気が付いた。体中の関節が軋みはじめて、風邪をひいたような症状だなど感じる。だが男はそれについてはあまり考えないことにした。

男は、女の別れるという考えを改めさせるにはどうすればいいのか、と考えるのに必死だったから。

『さあ、宇宙の遙か向こう側にジャンプするよ！ みんな手伝ってくれよナ！』

爽やかな宇宙飛行士の格好をしているキャラクターが、少しぎこちないまばたきをしながら、乗客たちに話しかけてくる。そしてわずか数秒後、部屋の照明が落とされて、暗闇になる。つまり出発したのである。未知への期待と母星から遠ざかる不安を抱えながら、六十人を『船員』として乗せている宇宙船が、何やら勇敢な行進曲みたいな音楽を流しつつ、宇宙の遙か向こう側とやらに向けて帆を出した。

さて、真っ暗になったので、乗客たちからはキャラクターのまばたきをしている様も見えなくなって、見えるのは前方に取り付けら

れているメインカメラと繋がっている、宇宙空間の景色だけだ。「
亜空間ワープ!」「ホワイトホール!」とか何とか、キャラクター
の爽やかな声は何度も繰り返し、部屋に反響していて、何ゆえか
それが音楽とマッチングしている。

「声、なんだか面白いよね」女が、隣に聞こえる程度の声で呟く。
「それなりに」男の相づちも静か。ぎりぎりお互いに通じ合う程度
の音量。

『みんな、少し飛ばすから気をつけてくれ! 危ないと思ったらす
ぐに危ないと叫んでくれていいんだ! 大切なことはだね、みんな
忘れないでくれ。それはね、僕と君たちで力を合わせればこんな困
難なんて簡単に突破できるってことサ! さあ、みんな、そろそろ
宇宙の遙か向こう側へジャンプするよ! 僕が3、2、1、とカウ
ントダウンした後、こうやって叫ぶんだ……』

宇宙飛行士が言うより先に、二人は小さな音量で、声を揃える。

「miracle jump」

少し子供っぽいその文句の後に、六十人の乗客全員に圧力がかか
る。心臓病を患っている人や調子が悪い人が船員となるのは禁止さ
れているだけあって、中々に強力なGだ。船員の誰かが「うう」と
苦しそうに呻く声が、どこかより聞こえてきたので、大丈夫か?息
できるのか?と男は、心配とも言えぬ妙な気持ちになっていると、
隣で座っている女が、

「心配だね」と男に言う。その心優しい声音は慈愛に満ちていたの
で、男は女を思わず見てしまう。その横顔はとて、良かった。

男は心を女に持っていかれそうになってしまう。そのせいで、
宇宙飛行士キャラクターの爽やかな声が伝えてくる、メインカメラに
映っている様々な色彩の淀みに関する説明、(極彩色だらけの色遣
いが、これから異次元に飛びますよという予兆を醸し出していて、
演出としては単純かもしれないが、色遣いはそれなりに人間の目を
楽しませる。少なくとも男は楽しんだ)の事細かい部分をほとんど
理解出来なかった。宇宙飛行士キャラクターによると、その極彩色

が生じる理由というのがいろいろとあるらしく、つまりそれは科学の進歩なのだそうだった。

男は特に頭が良くもないので、説明されたところで理解はできなかったと自分でも思うのだが、聞き逃したことに多少の勿体無さを感じた。ああ、せこいな自分、と嫌になってしまいそうだったので、宇宙の遙か向こう側の映像を、楽しむことにした。

奇跡の跳躍。Miracle jump。それをするたびに、宇宙船の映像は瞬間移動的なことを行い、様々な場所に到着していく。未開の惑星であったり、果てしなく広がる銀河であったり、ブラックホール周辺であったり、様々に。

楽しもうと思えば楽しめる。そう思えなければ、思えない。

奇跡の跳躍。Miracle jump。

二人にとっては、大切な思い出の一部。

怒

地獄という背景に住まう俺はぺらぺらな身体でハッキリとした意識と絶え間無い退屈を味あわせられているというのは幸福とは決して言えず、むしろ不幸に近い状況であるはずなのに、通り過ぎる周囲の死者たちからは、『雑魚』、『無能』、『阿呆』、『うんこ』、『糟』、『ニートと引き籠もりとアパシー・シンドロームを混ぜたような屑』などと罵られた。馬鹿にされた。屈辱を受けた。嘲笑を浴びせられた。きつと、人間というものは、このようにして他者から冷たい言葉を連続で浴びせかけられなおかつその状況から脱出不可能になった時に想像を絶するような反社会的行為をやってしまうのだろう。だが、視力聴力嗅覚らしきものをなぜか持ち合わせている俺は周囲からの情報を受け取ることは出来るわけだが、しかし、身体を動かしたり言葉を発したりなどの、能動的な行動が何一つできないのはどうしようもない。だから俺は想像を絶する反社会的行為を行うことは出来ない。せいぜい、頭の中でその想像を遊ばせて自己満足に浸るか自己卑下を引き入れるかのどちらかだ。ああやってられない。どうにかになりたい。どうでもなりたい。どうしようもない。どうして?.....模索。 解凍。 解答は一瞬にして電流となつて全身に廻る。

(へてらーだ。あいつが俺を騙してこの場所に導いた結果がこの現在だ。地獄案内人のような雰囲気俺に近づき、親切を装って己の利益を作り出すために俺を利用した。きつとあいつは主従関係にある大家の言いなりになることしか出来ない腰巾着なのだろう。自分の意志で生きずに他者に縋って生きのびることしか出来ないような貧弱者は卑劣なことを平気でやらかすのだね。自分の弱さを言い訳にして他者をひどい目に合わせるんだ。そして将来的にそのことで罪悪感を持ち始めた時にも、自分以外にもそういうことやる奴はたくさんいる、というかそういうことをして生きのびるのが社会で勇敢

って単一的。そんな世界観を築き上げても脳細胞が燃え尽きて灰燼になる可能性が高い。

彼は燃えていた。燃烧していた。消し炭になるように。

だが意識が永久的に失われることは永久に無い。

だから怒りに身を任せる。彼女との思い出すらも燃やしてしまう勢いで、燃え上がる。

目の前に置かれていたバケツを思わず倒してしまうところだった。ひよい、と足を大きく上げて、バケツを避ける。薄明かりのその場所で、歩いている。

自分の頭上で回しているピザ生地がぶつとびはじめたことなど露程も知らないフレディ似のおっさんは、地下駐車場らしきその場所にて、歌を止めることは当然しないままに、さらに、歩きながらぺらぺら身体を回転させるといふ荒業をやり始めた。もちろん、練習をし始めたばかりであるから、何度も失敗してしまう。隆汰のぺらぺらボディは繰り返し地面に転がった。へちゃり、という汚らしい音を鳴らして、何度も地面に墜落させられた。

所々に置かれている大家のバケツを倒さないようにも気をつけるので、精神力が必要とされる行いだ。難易度は高い。

フレディ似のおっさんは、失敗する度に悲しい気持ちになった。なんで上手くいかないのだろうか、俺にはこの技を習得することは出来ないのだろうかとも思った。だが、練習を止める気にはならない。他にすることがあるわけでもないし、一度や二度の失敗で諦めではダメだという意志もあった。フレディ似のおっさんは歩き続けた。何度もぺらぺら身体を落下させたし、通りすがりの他者から「あいつ意味わかんないことやってるな」と言われても、歩きながらぺらぺら身体を回して歌を歌うということを繰り返し続けた。練習と共に時間は過ぎていく。「時間の無駄」と言われることもあったし、自分でも無駄なことをやっている気分はあった。だが、それは今更なことだった。フレディ似のおっさんだって、自分が常々無駄なこ

とに時間を費やしていることはわかっている。だがフレディ似のおっさんはやめない。おっさん自身にもよくわからなくなってきた何かの意志に任せて、おっさんは歩きながら歌いながらぺらぺら身体をピザの生地を回すがごとく回転させるのだ。

時は流れていく。どれくらい彼は練習に励んでいたのか、彼自身にもわからない。時間の感覚など地獄の中では適当だ。営みを真剣に行わなくても生活できるため、時間を意識せずとも構わないというわけだ。とにかく時間の全てを、練習のために。

何時の間にか、どこにバケツが置かれているかも暗記したフレディ似のおっさん。

完全に、習得した。

歌いながらぺらぺら身体を回し、その場所を歩き続ける。たやすくそれが出来るようになった。

おっさんの気持ちは浮ついた。感動した。歌の調子がいつもよりHAPPYな感じだった。

俺は世界で一番さ 別になんだっていいじゃない

俺は世界で頂点さ 俺自身が一番わかってる

ああ光っている（内側から溢れ出る） ああ光っている（身体に力が満ちている）

ああ光っている（何処にでもあるわけじゃない） ああ光っている（見つけ出したぜ希望）

歓声を上げるぜ（オオウ） 響き渡るぜ青空^{オオウ}

オールアイアムチャンピオンオールアイアムチャンピオンオールアイアムチャンピオンオールアイアムチャンピオンオールアイアムチャンピオンオールアイアム

言葉は何もかも自由なんだぜ 宇宙を作り出せ大海より広く

向こう側から昇り始めた太陽よりも言葉は宇宙的に
爆発が生じて世界は歪んでいる その中程で俺たちは長いこと鳴
いている

ああ光りが満ちている 最高じゃないかもしれない だが最高だ
言葉は景色にとろけ込む 液体でどろどろで汚い景色

オールアイアムチャンピオンオールアイアムチャンピオンオールア
イアムチャンピオンオールアイアムチャンピオンオールアイアムチ
ャンピオンオールアイアムチャンピオンオールアイアム

俺は世界でただ一人 誰にも俺はわからない

俺は世界で唯一私 俺にはあなたがわからない

だけど だから しかし けれども

ユーアーチャンピオンユーアーチャンピオンユーアーチャンピオ
ンユーアーチャンピオンユーアーチャンピオンユーアーチャンピオ
ンユーアーチャンピオンユーアーチャンピオン

宇宙的な青空が……

オールアイアムチャンピオンオールユーアーチャンピオンオール
アイアムチャンピオンオールユーアーチャンピオンオールアイアム
チャンピオンオールユーアーチャンピオンオールオール

漕いだ漕いだ漕いだ(ウオオ)

漕いだ漕いだ漕いだ(ウオオ)

漕いだ漕いだ漕いだ(ウオオ)

やつほう(うほほ)やつたあ(うへへ)よっしゃあ(どうぞ)ば

っちこーいふふふ(やつほお)

イツツアンビリイイバボオオウウウウウウウ

フレディ似のおっさんの肉体は抱擁されていた。おっさんの中心
から滾り燃え広がる摩擦力は喜びの振動を巻き起こし、超振動とな
り高エネルギーを発する。エネルギーは歌として一つの集合体に変

化して渦となり、台風のように激しく、空気に痺れを生じさせる。

「そ、そうか！ そういうことだったあ！」

何かを悟ったおっさんの瞳がキラリと妖しく光り輝き心が爆発した。爆発の後に空間は静寂に包まれた。なぜならばおっさんは今まで絶えず行っていた全ての行為を一旦停止させ、そしてわなわなと震えていたからだ。

小刻みに震えるおっさんは今まで頭上で回していたぺらぺら身体を、この時はじめて胸元にまで持ってきて、そしてそれをぎゅっと力強く抱きしめて、次の瞬間には、「ほいさあ！」とぺらぺら身体を放り投げた。

宙を舞う、ぺらぺら身体。狙い定められていたのか、それとも適当か。おっさんの放り投げたぺらぺら身体は、近くに置かれていたバケツに、べつちゃあ、と丁度INした。

おっさんは何か清清しい。瞳がキラキラと輝いている。大きな深呼吸を一度だけした。

「全てが champion。ああ、ぺらぺらな身体よ、ここで君とはお別れだ。私には使命があり、その為にはこの場を全力で離れなくてはならない。短距離走の勢いで今から向かわなければ間に合わないのだ。よっておさらば！ 娘よ待っている！ ……では、ぺらぺら身体君。名前も知らないままだったがこれまで回転させてくれてありがとう。おっさんはここで、失礼するよ」

おっさんは走り去っていった。

どたばたと騒がしく、暗闇に紛れ、何処かへ消えたのだった。

隆汰のぺらぺら身体は、誰の血液が入っているとも知れないバケツに、そのまま放置された。突然のことであった。今まではずっとエンドレスリピートだった歌もここに来て途切れ、耳鳴りだけが唯一隆汰が感知できる音だ。今まではうざったらしいだけだったのに急にそれが消えると侘しさすら感じた。それに加えて血の臭い溢れ

「うん。これは重症ですなえ」悲しそうに呻いた。

「末期症状が出てますよ。こんなに感情の波が激しい状態で肉体を与えてしまったら殺人鬼に変貌する可能性も無きにしもあらず……。うん。でも、緊急事態だしなあ」

てらーは首を、かくん、かくん、と頷かせたり横に曲げたりして考え事をしている。だが、やがて何かを決意した様子になると、すくっ、と立ち上がる。

「面倒くさいけど、仕方ない。時間が無いし」

うんうん、と頷く仕草をしてから、てらーはバケツに人指し指を突っ込んだ。そしてその人差し指に万遍なく血液を付着させると、その血液でコンクリの床に文字らしきものを書き始める。実際、それは特殊ではあるが文字であり、読める者には読める文字。読める者からすると、そこに書かれた文字はこういう風に読むことが出来る。

『対象の一部記憶を、変更させることにより、意のまま、対象を操る。代償に、命の源泉たる真紅の潤いを大地に捧げよう』

死んだ死者は地獄を謳歌する

「本当に大丈夫なんだろうね、てらー？ お前の力を信用してないわけではないが、何せ魔術というものは不安定な代物だからな。何かしらの介入があるだけで効果が失われてしまうものだ。記憶の変更が出来たのはいいが、それが元通りになってしまいう可能性は0%でないと困るんだよ。わかってるだろうね？」

「はい、大家様。彼の本名を知ってるものが現れない限りは、大丈夫です。記憶の変更が元通りになることはありません。問題ないです」

「なぜ、こいつの知り合いが地獄にいないと断言できる？ 本名を知っている者が現れた瞬間にこいつの記憶は元に戻り、私や貴様に復讐をするための炎を滾らせるかもしれない。それでは困るってことはわかってるんだろうな？ え？ わかってなきや、困るんだぞ？ てらー」

「も、も、もちろんです。わかってます大家様。彼はまだ若い年齢の男です。そう考えれば彼より先に死んでいる者の数は少ないと断定できます。病気で早死にした者や自殺した者などは例外ですが、少なくとも、地獄にいる死者の知り合いの数は、友人がみんな先に死んでしまった長生きの老人よりは絶対的に少ないです。そんな老人といえども、この広い地獄の中では知り合いと出くわすことは滅多にございませぬ。ですからこの男が知り合いと出くわす確率は宝くじの一等を当たるような確率のほすです。よって、彼が記憶を修正して私や大家様に牙を剥くということはありえませぬ。この男は、私の魔術によって既に大家様の下僕となったのです」

「宝くじの一等が当たってしまった時には、どうするのだ？」

「それはきつと……」

「我らは土に還れと神に審判を下されたということか。ひどい不運だった、ということか」

「そ、そういうことだと思います。神でなければ、え、閻魔とか……」

「ふん。座敷わらしなどという存在のお前がいるのだから、神や閻魔がいても不思議はないが……」

「大家様。わ、私は座敷わらしなどでは……」

「お前は座敷わらしだよ。それはいい加減に認める。認められはしなくとも受け止める。そうやって自分を何者でもないとするれば気持ち治まるのだろうか、お前はどうみても座敷わらしだよ。他者から見れば間違いなくな」

「……………」

「まあ、いい。こんな何回も繰り返してきた話をこの緊急の事態でする道理は無い。この男は死者として一度『死んだ』。その事實は間違い無いのだからそれでよろしい。牙を剥かれた時には、てらー、お前が身を持ってそいつに殺されるよ？ 人柱になれよ？ そうすればお前は私にとって幸運をもたらしてくれた女神だ。それはお前にとっても本望なことだろうか？」

「はい……」

「元気を出せ。さあ、てらー。干からびている彼に血液を。一滴も無駄にすることなく、満たしてあげなさい。一度死から生に転じる死者は強者となりて地獄を謳歌する。彼には私の下僕になってもらい、そして兵士となって我が身を犠牲にしてもらわなきゃ、私が土に還ることになるんだからねえ……………」

「お、大家様を滅ぼさせるだなんて事態を招くことは絶対にさせません……。わ、私こと、てらーは、大家様の想い人が帰ってくるその時まで、誠心誠意の全力で、お手伝いをさせていただきます」

「……いい子だよ、座敷わらし」

門である鉄柵が最終ライン。それ以上先に敵を侵入させることは主が滅びることに直結する。一度結界の中に踏み入れば敵は自由自

在に床に溶け込んで姿を現すということが出来るようになってしまったからだ。よって鉄柵のすぐ側にて防衛ラインを作る。その館を防衛するのは五人の死者。男が三人と女が二人。その五人は息もしていないかのような静けさで、そこに直立している。そして、鉄柵の内側にいるてらーより細かな情報を教えられる。それは声で伝わるのではなく、脳波のような不可思議なる代物で伝えられるが、声で伝えられるよりも確実に、情報は五人に伝達されている。

鉄柵以外の箇所はてらーの力によって嚴重に保護されている。鉄柵にだけはその力が及ばないのは、そこが普段使用される出入り口であるから保護をしまつては館を出入りすることが不可能になつてしまつたからだ。そういうわけで、鉄柵の箇所だけはてらーの力以外で防衛しなければならぬ。そうしなければ館に敵が侵入するのを許すことになる。敵の侵入を許さない為に、五人の兵士はそれぞれの武器を持ち、構えている。鉄柵の前で。

（いいですか皆さん。これからやってくる奴らには素手で触られないようにしてください。触られた瞬間、OUTです。死者としての身体が腐敗し、滅ぼされます。滅ぼされるという現象はあなたたちが生者だった頃の死のイメージに近い現象で、その先にあるのは虚無だとされています。虚無ということは何も無いということです。

それこそ本当に意識も無いし空間もありません。本当に何もなくなつてしまつたとされています。あなた方が今まで体験していた死者として『死んでいる』状態とは、これは全く違う現象なのです。滅びる、というのは意識の消失を意味するのです）

「なんだかよくわからないんだけど、要は触られる前に武器で殺せばいいってわけ？ その…私たちの敵を？」てらーの説明に対して一人の女性が疑わしげな口調で質問をする。

（現実味を感じることが出来ないかもしれませんが、私の言うことに嘘はありません。とにかく殺せばいいんです。斬つたり打つたり撃つたりすれば、相手が滅びますから。ここにいる皆さんは地獄にて一時期死んでいた者たちです。そして今回、我が主の力によって

皆さんは生き返りました。生きている状態になったのです。その恩に報いてくれればと思います)

「恩を勝手に売つといて恩に報いろつてのは一方的じゃないのかねえ。ていうか、元々死者として死んでた俺らは別に喧嘩が強いわけじゃねえしよ。あんたの言ってる主を守る力なんざ、ここにいる連中には無いんじゃないか？ 敵がどれくらいの奴なんだか知らねえが」皮肉めいた口調は男性の物。

(力なら皆さんには充分備わっています。その皆さんが手にしている武器が何よりもの証拠です。『死者として一度死んだものが甦る時、一つの武器を携える。それすなわち甦った死者、地獄を謳歌する力を手に入れた証なり』。このような言葉が地獄にはあるのですが、これは伝説やマヤカシではなく事実なんです。皆さんには地獄の世界で生きるには充分な力が備わったのです。確かにあなた方にはその恩恵を授けるか授けないかの選択を主はさせませんでした、しかし充分過ぎる恩恵を授かったあなた方は私たちに恩義を返す義務があるではありませんか？ 少なくとも死者として死んでいたあなた方の現実よりかは、今の状態の方が遥かにマシなはずです。……どうか主のお手伝いをしていただきたく思います。あなた方の退屈という闇を打ち払った主に、どうか救いの手を…敵は、もうすぐやってきます…)

「そのような言い方をされれば、断ることはできまい。了解した。私はあなた方を手助けするよ。なんだかこの金鎚も私の手に馴染んでいるしな」丁寧な物腰の男性がテキパキとしている返事をてらーに返す。

「私も、何だかこの銃が生まれつき自分と共にあったような錯覚を覚えるわ。それに何かみなぎって来るような、力が溢れてくるような感覚があるの。私は、さっきの皮肉な彼とは違って恩に報いる気は満々よ。あんな退屈な時間から逃れさせてもらえて自由の身になっただけでも、恩に報いる理由には充分！」落ち着いた男性の後に続くようにして言葉を発した女性も、随分と大人びた雰囲気携え

ている。

「……ちつ。馬鹿ばかりだな。こんなわけのわからない状態を押し付けられてるってのに、もう納得していやがる。はやいんじゃないの？」皮肉な男性は呻いた後、小さく舌打ちをした。そして手に持っている黒鎌をぎゅっと握り締める。手に汗握ってる。

「……」そんな様を横目で見ている隆汰。さっきから何も、喋っていない。

「あのー、大丈夫ですか？」槍を武器として携えている女性が、ぶんぶん隆汰の前で手を振ってみせたが、彼は曖昧な反応しか示さない。

「ああ……。大丈夫」

「そんな武器を持たされて、不運ですよ」彼女は隆汰が手に持っている武器を指差した。

「まあ、そうかもね」そこにあるのは、錆だらけの鉄パイプ。

「放心してるんですか？　あまりにもシヨックで」

「そういうわけじゃないんだが。気になることがあって」

「気になること？」

「いや……気にしないでくれ……たいしたことじゃないから」

「……？」

遙かどこまでも広がっている荒野。鉄柵の前に立つ五人に広がっているのは、草木一つさえも生えていないひび割れた大地である。地平線が見えるほどに果てが無く、その果てから太陽のようなものが昇り上がろうとしていた。それは燈色をしているわけではなく、一見、冷徹にも見える、藍色のような暗い色。言い換えれば、静かな色。

空は夜空で、真っ黒。藍色の太陽が昇り上がっているからといって何か色が付くわけではない。いや、真っ黒という色を付けられている可能性は、あったが。UFOらしき不思議な物体が、チカチカと点滅をしながら、その暗闇の空を漂っていた。

空気はひんやりとしている。冬の気候。ひび割れた大地の隙間か

らいまにもその『敵』は姿を現してもおかしくはなかった。五人の死者は鉄柵という門の前で、それぞれの武器を握りしめ神経を張り詰める。

触れれば滅びるとされる戦いが何時始まるのか、誰にもわからぬまま、時だけが過ぎていく。

藍色の太陽が、やがて真ん丸の形となって地平線を抜け出した。

『敵』

踏みしめているひび割れた大地は立っているだけで靴が少し埋まるふと思いついて片足を持ち上げてみると、足元にハッキリと足跡が残っている。

そして鼻に入り込んでくるかすかな臭いはどこか土臭い。気分が悪くなるほどでも、かといって嗅ぐことで気分が安らぐ臭いでもない。あつても無くても変わらないような、代わりがいくらでも効いてしまいそうな、土臭さ。

だが、やがて毒を持った果実から毒気が漏れ出したかのように、瘴気が漂いはじめる。悪い空気。嫌な空気。藍色の太陽はもはや天高く昇り上がって五人の兵士を見下ろしていて、瘴気はやがて霧となり視界を良好にさせてくれない。

視界が悪くなったことよって、五人の間には言い様の無い不安が募る。

全員の武器を握り締める力は既にすさまじい。その強張りがやがて焦燥に変わり、女の一人が、「これ、大丈夫なの」と疑問をこぼすと「座敷わらしが対処法を教えてくれるだろうよ」と皮肉めいた男が一人言のようにぼやく。それに答えるかのように脳波が五人に届き、

（この空気こそが敵の出没する予兆。みなさん、気を引き締めてください。なお、みなさんの身体は瘴気にやられてしまうような貧弱さではありませんから安心してください）事務的な返答をする。気にするほどの現象では無い、と。

やがて、乾燥したひび割れの大地が盛り上がり、砂山のように膨らんで碎け散った。その衝撃で瘴気の霧が、その周辺だけでもわつと膨れ上がって広がる。そして『敵』がそこから姿を現した。

てらーの事務的な答えに、誰かが返答をした直後のことだった。

「きたようだな」落ち着いている男性が金鎚をぐつと握り締める。

全員が息を呑む気配。

五つの視線は前方に集まる。見たことの無いその存在に向けて。その、『敵』。人の形をしていた。だけど人とは違っている姿。

毛糸。毛糸が肉体や骨の代わりをしているように、あるいはモンブランケーキの上にかかっているあのくやくにゃのよう。瘴気に似合う紫の色をしている毛糸がぐちゃぐちゃに絡まっていて、そしてワラワラと人の形の内部でぐちゃぐちゃが躍動している。『敵』はそれだけだった。人の形をしていて中で紫の毛糸のような線がぐちゃぐちゃに動き回っているだけ。地面を砂山のように盛り上げてグポッと、左右によたよたと身体を揺らしながら、向こう側より歩いてくる。五人の兵士から見ると真つ直ぐの位置に一つ、二つ、それがグポ、グポ、と出て来た後には左右からも後を次ぐ様にして出て来た。グポ、グポ。聞き覚えの無い不快な音を鳴らしながら。荒野に姿を現した。五人の身体は自然と固まった。数が、目でなんとなくに数えればそれらは百は超えていた。

「ひ、一人につき、二十五体くらい退治……と、言った、ところかしら……？」

「『体』って言うのか……？ 匹とかじゃなく？ 人かもしれないぞ……」
「呼び方なんてどうでもいいだろ。と、とにかく触らなけりゃいいんだ……触らなければ」

「で……どう、退治する……」誰もが初めての経験の中で突然、百も相手にしなくてはならなくなったことに震える。心は怯えすくみ、何かの策を暗黙の内に全員が求める。無闇に突っ込むような若々しさを持っている者は『死んだ』状態から甦った彼らの中には誰一人おらず、とにかく、口だけで説明された自らの凄まじい実力という奴を、自分自身で信じれるわけはなく。少なくとも策無しでは。

「てらー。効率の良い戦い方を教えてくれないか？」隆汰は尋ねる。（誰か一人、門を守るようにしてください。残りの四人は、二人一組のペアになることで、孤立しないようにしてください。そして、

気をつけるべきは触れられないことの他に、もう一つあります)

「教えられることは全て教えてくれ」

「頭以外を狙ってはいいけません。身体を斬り付けると、身体の中からあの紫のうじゃうじゃしてるのが飛び出してきて、皆さんに襲い掛かってきます。まるでミミズのようにね。ミミズが這いずり回ってくるのを殺せばOKですが、あのミミズに体内に侵入されれば……」
「てらーが少し言葉を濁らせる。「濁らせれば？」隆汰が促すと、答える。

(あなたたちがあれらのような姿に変わってしまいます。身体を占拠される、ということですよ)

聞いた全員がその言葉に信憑性を持たなかったが、その言葉が嘘だと出来る理由はない。さっきから五人に出来ることと言えばてらーの言葉で戸惑ったり驚愕したり以外には無い。

「身体を斬らなければいいんだな……？ 顔に攻撃すれば、そいつらは死ぬんだな……」

(そうです)

「……や、やるしかないな……」

五人が戸惑っている内にも、『敵』はゆっくりとだが確実に洋館に迫っている。姿勢をまつすぐに保つことが出来ない連中なのか、左右にゆらゆら、まるで幽霊のように歩く彼らはとてもゆつたりとしている。紫のぐちゃぐちゃしているその毛糸に見えていたものが、『敵』が近づくとつれて生物であることがハッキリとわかってくる。たしかにそれは、ミミズだった。糸ミミズが水の中でぐにやぐにや細かく動くような……その大きくなった様、というのが一番近い表現だった。頭部には、確かにその紫ミミズのぐにやぐにやは、無い。編成は決まった。銃の女が門を守る役割として、突破してきた『敵』を排除する役割。槍の女と金鎧の男が一つの組となって左側と真ん中を担当する。隆汰と皮肉めいた男が右側と真ん中を担当する。気をつけなくてはいけないのは、『敵』になるべく突破されないことと、てらーからの脳波を通した連絡に耳を傾けること。頭を狙っ

て仕留めること、身体を壊してしまい紫のミミズが飛び出してきた時には、相方に助けてもらうこと。後、とにかく『敵』に触らないこと。

そしてもっとも重要なのはとにかく、敵に鉄柵の門を突破されないこと……。

「よし、いくぞ」何時の間にか兵士のリーダーになっている金鎚の男の合図をキツカケにして、五人はそれぞれの配置についた。「てらー。スタートは君が脳波でいつせいに伝えてくれ」。

藍色の太陽はまだ頂上のまま。空は真っ黒で星も見えない。時折UFOが通り過ぎ、荒れた地での戦いを見物しているかのごとく、乾燥している風が、兵士の唇や肌を乾燥させる。全員が不気味な動きのままゆっくりと迫ってくる『敵』を睨みつけながら、武器を力強く握り締め、合図を待つ。

(…では、カウントダウンで…)

(…5…)

(…4…)

(…3…)

(…2…)

(…1…)

(…0!)

一斉に、駆け出した。足跡を残しながら、四人が放射状に広がっていき、一人がその場で待機。

鎌、槍、金鎚、鉄パイプ、銃。

『敵』は四人が走り出した後も、まるで相手にもしていないかのよう。

ゆったり、ゆったりと、息耐えそる寸前の屍がオアシスを求めているような不安定な姿勢で。左右にぶれるその様は何時崩れ落ちてもおかしくは無さそうにも見えるが、そのバランスを崩すことはなく、ぶれる。やじるべえのように。

『敵』は確実に洋館へと歩を近づけている。

ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、
ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、
ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、ゆらゆら、
ゆらゆら、ゆらゆら……

走りながら、皮肉めいた男は隆汰の肩を叩き、声をかけた。

「戦いが始まる前にお互いの名前くらい教えあおうぜ。俺の名前は
哉行。お前の名前は？」

「なりいき？……ええ、俺は……」隆汰は自らの名前を答えようと
した。だが、出ない。

「？ 何か変なこと言ったのか、俺が？」

「いや……そういうわけじゃなくて……」

眉根を潜める哉行から目を離して、隆汰は前を向く。違和感。先
ほどからあるそれははじめは何か磁力を感じるようなわずかな違和
感だったが、指先がわなわなする程度だったそれは次第に彼の全身
に落ち着かない奇妙な感覚を築き上げていた。パチリと弾けて静電
気を起こしそうな。静電気はやがて口元に電流となって走って、そ
して唸る。

「藤棚「マルス」隆汰」口走った後に、唇に感覚の無い麻痺が残っ
ている。違和感は消えない。何かがおかしいような気がするのだが、
おかしいのが何なのかは全く判然としない。背筋が震える。

「だけど、まあ、震えてる場合じゃなかった。もう、触れられるの
か斬るのかという、そのお互いの勝ち負けを決める間合いに、二人
と『敵』はその距離を近づけていた。

隆汰はまだある程度、『敵』に勝てる自信が無くてどのよう仕
掛ければいいのか不安だったが、哉行はもうそんな気持ちではない
ようだった。

「そうか隆汰ね。よろしく。じゃ、俺が先に仕掛けてみるからそこ
で見てろよ。こいつらよくみたら気持ち悪いだけで全然強そうじゃ

ないし。隆汰は鉄パイプだから俺の援護をしてくれればいいよ。多分、俺一人で充分いけるから、俺が身体斬っちゃった時の援護だけよろしく頼むってことで」彼はもう『敵』が弱そうだという目算を付けたようなのだった。

「いいだろ、それで」

なめられた感じで見下されている気がしたがそれを拒否する気力が朝野隆汰にはあんまり無く、むしろ何をしてくるかわからない連中に先立って仕掛けようとする哉行の積極性に感謝しようと思った。だから隆汰は、「わかった。じゃあそういうことで」と簡単に了承した後に、哉行のすぐ背後辺りに回った。哉行を背後から見ると、その黒鎌の巨大さに少し圧倒された。哉行の身体と同じくらいの大ささを持っているようだった。それを自然と持ち歩くことが出来るのは何だか奇妙だな、と隆汰は感じる。そして自分の握っている鉄パイプを見た。それはひどくみずぼらしい。だが不思議なことに、自らの手には良く馴染んでいた。錆びた鉄パイプが馴染んでもな、と苦笑したくなる。

周囲を見回すと、右にも左にも、さらには前方にも『敵』は既に行った。計、十くらいの数。全員がゆらゆらしていて、紫でぐちゃぐちゃした糸ミミズを身体中で蠢かせながら、二人には目もくれず、洋館を目指している。相手にはされていないようだった。

それが気に食わなかったかどうかはわからないが、哉行はやけに興奮していて、

「右側から行くぜ。真ん中は向こうのお二人さんもやってくれるわけだしな。どんどん仕留めてやる！」と意気揚々、「隆汰。巻き込まれないように離れとけよ！」と叫び、そして隆汰が離れる間も待たないような勢いで、彼は巨大な鎌を振った。大払いのそれは空気さえも薙ぐような爽快感。そして見事、はじめてそれを扱っているとは思えない正確さで、哉行は、『敵』の首を、ざしゅ、と刈り取ってみせた。しかも同時に二体。呆気ないものだった。ところてんみたいな感じの透明な液体を斬られた首元からだらだらと流しながら

ら、首を失くした『敵』は荒れ果てた地面に崩れ落ち、そしてすぐに腐敗し、湯気を出しながら蒸発していった。身体の中で蠢いていた紫の糸ミミズらしき線、それを困っていた透明な身体、そのどちらもが荒廃の地で、跡形も無くなり、朽ち果てた。

「一気に二丁あがりだぜ！ 八八、見てたか、隆汰！ すごい気持ちがいいんだぜ、これ！ 鎌、貸してあげたいくらいだ！」興奮がさらに強まっている。

「もう少し落ち着いてくれよ。今、危なかった」冷や汗を流しながら呻く隆汰。鎌から離れるのが一歩遅かったら隆汰は巻き添えを食らっていた。彼の目の前の空間は鎌に横薙ぎにされていたのだ。

哉行は特に悪びれる様子を見せない。

「わりいわりい！ でも、八八八八八八！ 楽しいんだ、これ！」ざしゅ。嬉しそうに笑っている哉行は、すでに調子に乗っているようだった。振り切れた笑顔で、容赦無く『敵』の首を次々にちよんぱしていく。哉行の鎌の扱いの上手さも見事だったが、『敵』の弱さも見事といたくなるほどのもので、ほとんど無抵抗で『敵』は滅びていた。隆汰から見ても哉行から見ても、『敵』は、雑魚だった。

ゆらゆらの数はあつと言つ間に減少し、百はいたその大所帯が、十分かそこらでほとんどいなくなつた。その『敵』のあまりの弱さから口笛を吹きながら戦いだした哉行が、バツサリと『敵』の体を真つ二つに斬つてしまった時は、ぐちゃぐちゃの糸ミミズたちが抛り所を探すが如く、地面を恐ろしいスピードで這いずり出した時には、そのあまりの速さに哉行はビビってしまい、「ひいい」と言いながら逃げた時は実に格好悪い感じになっていたが（その時が唯一の隆汰の出番だった。鉄パイプを正確に糸ミミズに向けて振り下ろして、それを殺した。蒸発して糸ミミズは消えた）、それ以外では哉行は随分と格好良かった。大きな鎌を大きく振って『敵』の首を次々に宙に舞い上げていく様は、見てる側としても何か爽快さを感じるものだった。実際にそれを動かしている者からすれば爽快さは

更に素晴らしいのは間違いない。隆汰はとにかく、門のことに気を配る必要も無かったし、援護のことに気を配る必要もほとんどなかった。ただとにかく、その大鎌の派手な薙ぎ払いを眺めていれば自然と事は進んでいて、門に残っている銃の女の人は退屈だろうな、とか、てらーは特に脳波で連絡をしてこないけど全然問題ないな、とかいう風に他者に対する想像を働かせることが出来るくらいに簡単だった。余裕だった。

結局、てらーのカウントダウンからわずか十五分後には、百もいた『敵』は全て土に還って滅んだ。実に呆気ないもので、触られる心配など無いようなものだった。時たま、『敵』が身体の一部を伸ばしてこちらに触れようとしたことはあったが、それは実にとろとろと呑気な遅さで少し後ろに下がれば逃げられるほどの遅さだった。よって、追いつかれたりする心配は全く無くて、軽くお遊びの気持ちで追いかけている内に、哉行の鎌が『敵』をちょんばするのだった。

こうして突然の滅ぼすか滅ぼされるかの命賭けの戦いは、二十分の内に終了した。

四人が門のところに戻ると、銃の女の人は、気だるそうな顔つきのままに、

「あ、終わったの？ おつかれさまー」

と、言うさまは実に気だるそうで風邪をひいている人みたいだなー、と隆汰は思った。

実に良い待遇

待遇は実によろしくて、不満をもらす理由は粗を探せばあるが、普通に考えたらまったたく不満など考えられもしない、という具合だった。一人一人に個室が与えられ、食事も当然のごとくというわけだから不満が出るわけはなかった。

テレビでしか見たことの無かった純白のテーブルクロスのみかためつちや縦長のテーブルだとか、暖炉だとか、豪華な装飾のなされた座椅子や絨緞だとか。なんてことは無いすまし顔で無駄に広い部屋でそれらは平然とすまし顔だが、招かれた五人全員は、表情を強張らせ固まっていた。

「どうぞお座りください。どこへでもご自由に」美人のメイドさんに招かれて、思い思いの場所に五人は座る。間隔を広げて座らなければ滑稽な雰囲気になるので、間隔を広げて座った。

皆、しばらく居心地が悪そうに、なにかムズムズとした空気の中何を喋ろうかと企んでいたが、誰かが最初に口を開く前に、料理が次々に運ばれてきた。

そこに並べられる食事はこれもまた豪勢で、地下で退屈をしていた時には感じることもなかった食欲が自然とそそり立つような贅沢で新鮮な食べ物ばかりが、次々にコックより運ばれてくる。コックは少し痩せ気味だが至って普通の人であり、少し長身なのが目立つ程度のものだ。だが彼が作ったのであるう贅沢かつ新鮮な食事たちは、例えばそれはフカヒレだとかステーキだとかイベリコ豚だとか北京ダックだとか名前も知らない奴だとか名前は知ってるけど見たことしかない奴だとかいろいろなのだけれども外れは一つも無い。「すごいな……。すごいという一言しか出てこないくらいにすごいよ……。うまいし……。香ばしいし……」金鎚の男が貪りながら感想を漏らすと、コックはニコリと満面の微笑みをたたえながら、

「当たり前よー！　ワタシが何年間このお館で料理を作り続けて来

たと思ってるんですかー。もうワタシ自身も覚えてないくらいの年月をここで過ごしてきたよー。ノホホ」

と呑気に、痩せ気味の割には非常に陽気で、不機嫌な時に見ればうっとおしくも感じるであろう明るい性格だった。五人は緊張や戸惑いこそしていたが、陽気なコツクの笑い声につられるようにして緊張を解いていき、槍の女などは声をあげて笑い出して、

「ほんと、おいしい、おいしい」

と言ってからハハハハ、ヘヘヘヘ、と口に手を当てながら大声で嬉しさを表現しているのは気が狂ったようにも見えたが、気が狂ったように料理を貪っていたのは全員同じことだった。陽気な笑い声をBGMにして箸は止まらずに突き進んで行き、端正な顔立ちのメイドさんはコツクの隣でお盆を抱えながら、気が狂ったような五人の兵士の食欲の旺盛を、母性ある母親が少年少女に向けてするような穏やかな表情で見つめていた。

やがて全ての料理が平らげられて五人の胃におさまった頃、暖炉のすぐ側にあった古ぼけた柱時計が長針を八に合わせて、ぼーんと味気ない音を鳴らした。一度しか鳴らなかつたその音に反応した素振りを見せた人はあまりいなくて、綺麗な美人さんと陽気なコツクなどは、そもそも音が聞こえていないのかと疑うほどに反応していなかつた。嫌な感じも少し纏ったにこやかさを浮かべて、五人の食休みを見つめていた。時々、会話も挟んだりしながら。

まだ名乗っていない者同士、自己紹介をした。金鎚の男がリーダーの役割としてそうしなければならぬと思ったのか、彼から切り出したのだった。「自己紹介をしておこうか」

「私の名前はジャック。『敵』とあと何回戦うことになるのかはわからないが、その間、みんなで力を合わせて頑張っていければそれに越したことは無いと思っっている。みんな、よろしく」

金鎚の男ジャックは、言い終えた後にわざとらしく、ごほん、と咳みtainなものを鳴らしてから着席した。その流れに乗るかのようにして椅子から次に立ち上がったのは槍の女。

「私の名前はマリーよ。結構ドン臭いところが昔からあって、それを馬鹿にされるばかりのなさけない女だったけれど、今日の戦いは私の人生の中でなによりもエキサイティングだったわ。人の役に立てるような気もしたし、みんなで一つのことを成し遂げるのって気持ちいいことだわ、って気がつかされたの。これから頑張っていくつもりだから、みんなよろしくね！」

元気なマリーはにこにここと振り切れている微笑みを絶やさないうちに、また動きもどこか落ち着いていないが、どうにか席についた。その後立ち上がったのは、隆汰はすでに名前を知っていたが、皆知っていないであろう哉行だった。「えーと」と呟いてから、

「哉行って言います。苗字とかは別にいいですよ。金鎚が武器だったリーダーのジャックも、騒がしい女のマリーも、名前しか名乗らなかつたもんな。って、余計な言い方だったかな。：すみませんね天邪鬼な感じで。みなさんよろしく。役に立てるように頑張るつもりです」

哉行は、さつき鎌を振るっていた時よりは随分と落ち着いた様子になっていて、マリーと比べれば実に静かな様子で席に着いた。残るは銃の女の人と隆汰だけだった。二人してひっそりと様子を窺い合っていたが、銃の女の方が先に立ち上がった。

「私の名前は優希。みなさん、よろしくお願いします。お互い頑張らしましょうね」

槍の女優希は礼儀正しくぺこりとお辞儀をすると、音もたてずに椅子に座った。最後に残っているのは隆汰だけなので、彼が立つ前に、みんなの視線が集まる。それを確認しながら隆汰は椅子から立ち上がり、こほん、と咳払いをした。最後だから何か気の効いたことを言った方がいいのかと思っただが、何を言っても苦しかったらしい沈黙を被るような予兆があつたので、簡潔に済ました。

「隆汰と言います。鉄パイプなのであまり役に立たないかもしれませんが、頑張っていくつもりです。どうぞよろしく」途中、むずむずとした違和感があつたが、舌を噛むことも無く紹介を終えた。軽

くお辞儀をしてから、座った。場が静まる前に、

「いやいや、お前のおかげで今日は助かったぜ。危うく土に還るところだったんだからよ」哉行がニヤニヤしながらフォローを入れてきた。それに次いでマリーが口を開いた。

「鉄パイプと言ってもただの鉄パイプではないんでしょ？ 私の槍だつてすごく切れ味が良くてただの槍じゃなかったし。ジャックの金鎚だつて、すごい破壊力を持っているのよ。『敵』の首は見事にぺっちゃんこになっていたわ！ 隆汰の鉄パイプもきつと、今回は実力を発揮しなかっただけで、実はものすごい鉄パイプなんじゃないかしら！ そういうこともあるわよ！」

マリーのテンションは高すぎる。だが彼女の言葉にみんなが、うんうん、と頷いてくれているのを見ると、このメンバーとなら何と上手く『敵』退治をやっていけるかな、と感じた。だから隆汰は口元に走る静電気の違和感がまだありながらも、どちらかと言えば心は穏やかになったから、軽い調子で「ものすごい鉄パイプだったら最高なんですけどね」。いろいろ試してみれば隠れた凄さに気が付いたり出来るかもしれない。そう考えると、次の『敵』が待ち遠しくなってきたなあ」と返事をして、少しへらへらした。残りの四人も、それに合わせたような、苦笑に近くもあつたが、へらへらしてくれた。悪くない空気が、漂いはじめた。全体的にへらへらとした食事となつた。

しばらく談笑は続いた。ジャックの武勇伝の数々は少し鼻が付くところも無いではなかったが、そういう気になつた所はすべて哉行がつつこんでいってくれたので、結果、鼻が付く部分でさえ会話のスパイスとなつた。マリーの快活さに対比するかのようにして優希は落ち着いている対照的な部分もバランスが良かった。隆汰はもっぱら聞き役で、時たま話が浮かんた時にはそれを話したりするといふニュートラルな感じを続けて、彼自身としてその感じで雑談を続けられるのは楽しかったので気分は上々だ。柔らかな微笑みを浮かべたままの美人メイドさんがお茶を入れてくれたり、コックがデザー

トを振舞ったりなどしました。

古ぼけた柱時計の長針が十を刺した頃になって、ぼーん、となつた後に、

「みなさま。そろそろお時間的に、個室への案内をしたいと思ひますので…」

メイドさんのついすぱーな調子を合図にして、和やかな食事の時間は終了した。「ありがたい待遇だ。何か裏があるのかと疑いたくなってくるくらいに。これだけお世話になったら『敵』を倒すことに努力の限りを尽くせるといふものだよ」ジャックがそんなことを言い終えたか終えないかの内に、大きな扉がガタン、と開き、また別のメイドさんが五人現れた。

全員が同じような雰囲気、同じような顔つき、同じような身長、の五人のメイドはそれぞれが五人の兵士のところに向かつていき、「では個室へと案内させていただきます」と述べる。全員、声の抑揚さえ似通っていた。

「一体、今までどこに隠れてたんだこいつら。メイドじゃなくて忍者だよな、どっちかっていうと…」

哉行がそんなことをぼやきながら椅子から立ち上がり、一人のメイドに部屋から連れ出されていく。マリー、ジャック、優希、隆汰、もそれに続いた。

隆汰が部屋から出て行く前に一度だけ振り返ると、美人のメイドさんとコックが無駄の無い動きで食器類を片付けている。

無機質だな、と思ひながらそこを出た。

そしてそれぞれが個室に案内されて、各々が適当にその部屋で過ごしたり、暇つぶしにランプやチェスや将棋などを広間でやったりなどした。隆汰はジャックと将棋をさしながら、宙にぶらさがっていた皮膚の塊がいなくなっていることに気が付いた。今ここにいる誰かが、あそこでぶらさがっていたのだろうか、と思つてそこにきて何かがハツとしそうになり将棋に対する意識が飛んだ。手が止まり、ジャックがしばらくしてから不思議そうな表情になり、「な

にどうかした？」と隆汰に尋ねる。

「い、いえ。なんでもないです」

「時々ぼーっとしてるよな隆汰は。気をつけないと『敵』に触られちゃうぞ。そんなの格好悪すぎるだろう？ あんなとろとろとしたやつら……」

「さすがに戦う時はぼーっとしないですよ」苦笑するように言うから、わざとハハハと音をたてて笑った。笑った後には、将棋のほうに集中することが出来た。駒をどのように動かせば相手に勝利できるか。盤上に意識は傾く。さっき何にハツとしたのか、そのことさえもつ忘れていた。ぱちん、と駒を置き、

「王手ッ！」

と叫んだ。

「ひゃあ！」

静まり返っている広間にジャックの嘆きは隅々まで響いて、やがて霧散した。

土に還るといつごと

鐘のような音が耳内に響き、鼓膜があることを実感させられたのは、その音が間近で聞かされたかと錯覚するほどに大きかったという訳だが、目を覚ましてベットから上半身を起こして欠伸をして、何か歪んだ世界を表現しているような気がするアンティークばかり立ち並んでいる個室を見渡して、数秒後。何故、あれほどに鐘の音が大きく聞こえたのか、その原因がよくわからないなあ、と思った。そんなに良く響く鐘なのだろうか、ともう一度その音を聞いてみたいと感じたが再びそれが聞こえてくることは無かった。鐘などこの洋館に入ってから見た覚えも無い。

起き上がってから、着替え、洗顔、などの仕度を一通りこなし、俯いていると、トン、トン、とドアがノックされたのでドアに近づくと、近づいている途中に向こうから開いた。そしてメイドの一人、三日前に個室に案内してくれたその人が、事務的に、笑顔を浮かべながら開いたドアの先で立っていた。

「隆汰さま。鐘の音が鳴らされたのをお聞きになられましたか？」よく通る、透き通りのある声。眠気がまだ完全には冷めていない中で、やけに頭に響く。さっきの鐘よりは響かなかったが。

「あれを聞き逃す人はいないと思うんですがね」そんなつもりはあまりなかったが、哉行みたいな皮肉さが出た。メイドは機械的に苦笑を混じらせてから「そうですか」と述べて、続けた。

「前回の襲撃から三日目の本日、藍色の陽が昇り上がる時刻。再び『敵』の襲撃が始まります。どうぞ準備を忘れずに。隆汰さま、どうぞ我が主の為に、お力をお貸しください。よろしく願いします」一度も囁むことも無く言い切ってみせたので、恐縮してしまっ

た。
「いえ、いえ」と曖昧な返事を返しているうちに、そのメイドはお辞儀をして立ち去った。決められている行いを間違いもなしにスケ

ジュール通りに颯爽とこなす。表情の作り方からお辞儀の角度まで全てが緻密な技。単純に、すごいなあ、と感心してから、個室の奥に無造作に置かれている鉄パイプに目をやった。それを見た瞬間に浮かぶ感想は、錆びている、の一言。

準備も何も、しておくことは特になかった。手に錆びた鉄パイプを持って、素振りなんてしてみても気分が空疎になるだけで、何にも楽しくもなければ辛くもない。

外側から見た時には漆黒に塗りつぶれていた窓は、内側から見れば外の景色を平然と映していた。まるでスモークガラスのようだな、と思いながら窓に近寄り、開けた。

雲がいくつか漂っていて、太陽は出ていない。空の色は鬱屈とした藍色で、風が生ぬるいのがどこか不気味。荒野が広がっていて、地平線まで見える。向こう側から藍色の太陽が昇りあがった時、再び『敵』が現れるということだ。ぐにやぐにや糸ミミズの、左右に揺れている雑魚。

特に緊張はしなかった。不安もなかった。適当な気持ちでいてもやり過ごせると感じられた。

鉄パイプを、ぶん、と縦に振ると、中身が何も入っていないな、なんて漠然としたことを思ったりして、別にそれだけのことだった。個室から出てみると、階段のところで優希が座っていたので、声を掛けてみた。

「どうしたの？」と尋ねると、

「悪い夢を見たの…声が…」

と彼女は答えた。蝋燭の灯火に片側だけ照らされている優希の縦に細長い輪郭が、もう片側は漆黒に染まっていた。白黒の仮面をつけている人のようだと言いが付いて、隆汰は己の頬を、つられるようにして触っていた。

「今日、がんばろう」

それだけ述べると優希は頷いて、そこから先は特に何も言わなかった。

隆汰は階段を降りて、哉行とトランプをして暇つぶしをした。

「いやートランプ楽しいね」

「そうでもないだろ」

そんなことをやっている内に、広間に全員が集まって、なんとなくのうちに外に出た。

赤い振袖のてらーが、庭に赤の手跡と足跡をつけながら、蛙飛びで跳ね回っていて、

「ああ。みなさん、よろしくお願ひしますね」と言っていた。

「ええ」「はい」「うん」「ええ」「はい」

五人は適当な返事をしてから鉄柵を開けて、荒野の前に立ち尽くした。

「誰がここに残る？」ジャックの言葉に隆汰が答える。「今日は、俺残りますよ」

誰も異論は唱えなかった。銃をぶらんぶらんさせている優希が、「上手く首にあたるかな…」と言っていた。ジャックが、「大丈夫さ」と頼もしく答える。

藍色の太陽が昇りはじめた。

「昇ってきたな。いくか」哉行。

「いきましよう。軽く退治してやるわ」マリー。

四人が放射状に散っていた。隆汰は、その後姿を見送った。

グポ、グポ、と土を盛り上がらせて出て来た『敵』の数は百を超えていた。

脅威にも何にも見えなかった。隆汰は、ぶんぶん、と鉄パイプを縦に振った。なんだか気持ち良くなってきたなこれ、と思いつながら、適当に、ぶんぶん、と振っていた。

痺れ、ながら戦いの光景を遠目に見ていて、鉄パイプを振るのは飽きた頃だったのだが、今回は前回よりも『敵』が強いという訳な

のか、戦いは二十分が経過しても終わりを告げることはなく、隆汰の勘違いでなければむしろ四人は苦戦していて、次第に防衛ラインが下がってきている。「敵」側がこちら側を押しているように見え、鉄パイプを呑気に振っている場合ではないかもしれないと察した。藍色の太陽は地平線を抜け出てぐんぐんと漆黒の空へと伸び上がっていて、荒涼の地は霧が浮かびあがり視界が悪く、何か殺伐としたもの或いは不安の塊であるかのような絶望感を持っている。それに気持ちを持っていかれそうになったということなのか、隆汰は何度も唾を飲み込み、そして鉄パイプをギュツと握り締め、何時「敵」がこちらに突破してきても大丈夫なように、と思おうとするがそれを意識すればする程、足元の地盤が揺らぐような浮遊感が全身に回り、心臓の音が鼓膜の内側でうるさい。どくん、どくん、鳴り止まないそれは今まで気持ちを持たせられていた分、毒として全身に廻るのも実に早いものだった。ああ。大丈夫か。と独り言のようにぼやいてから前方の戦いに注目しているが、途中、言葉が響いた。脳波。

（皆さん、落ち着いてください。下がりながらも、的確に首を狙えば相手は死にます。お、落ち着いてくださいってば。落ち着いてください！）落ち着いてくださいと言っている本人自体があまり落ち着いていなくて、声は焦りを含んでいる。背後、鉄柵の方を窺うと、何か念仏を唱えているような姿勢で目を閉じているてらーの表情が、苦悶に満ちている。

どんどん状況は悪化していく。

隆汰は前方に向き直ると、濃度を増している霧によって視界が悪くなっていることに気が付く。瘴気のようなそれは色を持っていて、空間を孤立させるのに一役を買っているので、隆汰には目を凝らす必要があった。徹底的に目を凝らし、仲間たちが無事かどうかくらいは確認をしたかった。もう、仲間が戦っているのか全滅したのかどうか、目視では確認できない。もちろん、脳波によればてらーは全員に向けてメッセージを送っているのだから、生きているのだ

とはわかる。だが、戦いの場が現在どのようになっているのかはわからなくなってしまう。何体の『敵』が防衛ラインを突破して鉄柵に近づいてきているのか。霧のせいで視界が悪いが、もう間近に迫ってきている可能性があった。霧は時間が経過することに濃度を増していて、すでにそれは濃霧と呼べた。

発汗が止まらず、喉奥になにかが詰まっているような感覚がして気持ち悪くて、うが、が、と咽喉を鳴らす但不快な感覚は変わらない。鉄パイプを握っていないほうの手が、次第に震えを発しはじめて、やばいと思い始めるが止まらず、全身がガクガクと震え始めた。鉄パイプを右手で持っているということだけが、何だか、安心できる唯一だった。何時の間にか隆汰は、鉄パイプを両手で構え、武士が刀を構える時にするような姿勢に変わった。そして眼球を右往左往させて、何時『敵』が濃霧から姿を現しても対処できるように、と、意識を集中させようと努める。

しかし、てらーから伝わってくる脳波によれば、状況が悪いことを伝えるばかりで、戦況が覆ったとでも言うような嬉しい報告は何時になっても届かない。

「来るならこいよさつさと、化け物どもが！……………どわっ！」それはそう。まるで、叫んだタイミングを見計らっていたかのようだった。彼の脅えの感情が極限まで高まった後に発せられた咆哮が全て霧散した後に、現れた。

濃霧を切り裂いて、計十はあると思われる手の形をした透明なるものが、彼の前方より出現。ゆったりとしていながらも、しかし隆汰に向けて、追い継るようにして向かってくる…。それこそ黄泉からの誘いであるように、滅びた世界に引き込もうとする亡霊の手であるように。

触れられれば、滅びる。土に還る。

鉄パイプで周囲を一薙ぎにしようかと思っただが、糸ミミズを発生させてしまうという恐れがあるせいで控える他ない。一旦、下がる。そして十の数を始末する方法があるかと模索する。『敵』はのろの

るとしてゐるから、もしかするといけるかもしれないという希望は多少は、あった。だが、数秒しただけで、希望はプレス機で完全に押しつぶされて消え去った。数は十どころではなく、二十は、あった。どう考えても、鉄柵の前で一人でこなせる量の相手ではなかった。勝てるわけがない。やれるわけがない。絶望だけが、広がり、逃げなければおしまいだ、と悟り、後方に振り向き鉄柵に手をかけて、隆汰はてらーを呼んだ。

「おい！ 聞こえるか！？ やばい、もしかすると俺以外全員やられたかもしれない！ みんなが……てらー！ どうなんだ、生きるか、みんなは！」

てらーは鉄柵の向こう側で、もう目を開いていて、なぜだか焦っている様子もみせず呆然と立ち尽くしている。黒目ばかりの両眼で隆汰の方をじーっと見ていた。隆汰はてらーのその態度に苛立ちを感じ、「なにやってんだ！」と叫ぶが、てらーはその場を動こうとしない。鉄柵の内側に入ろうかと隆汰は思案するが、鍵がかかっていて入れない。『敵』の透明な触手は、背後よりゆったりと迫ってきている。

「策は！ 策は無いのか！ 何かこの状況を覆せるような何かぐらい、座敷わらしのお前だったら持ち合わせていてもおかしくはないんじゃないのか！？ なあ、みんなは……」

（あなたをのぞいた皆さん。一人残らず、死にました）隆汰の言葉を遮るようにして、脳波で返事は返された。それも、絶望的な返事が。

鉄柵の間に、沈黙が漂う。

「……何を冷静に、そんなことを言っているんだ？ とにかく、策を考えなければダメだ。落ち着かせてくれ。ここを開けるんだ！」だが隆汰の言葉にてらーは頷くことをしなかった。左右に二回、首を横に、振った。隆汰にはそれが信じられなかった。次の言葉が出なくなつた。

（策はもう講じてあります。あなた方五人の存在自体が、私と大家

様にとって貴重な策でした。もう四人が滅びて土に還りましたね)

脳波で伝えられるその言葉はとても冷静で、落ち着いていた。それがやけに不気味に感じられて、どうしようもなく、隆汰は鉄柵を両手で必死に揺すった。だが、鍵がかかっているそれは扉を開かない。鉄パイプで殴りつけても、まったく効果は無かった。てらーの落ち着いた様子から見て、隆汰は悟るしかなかった。信じられなかったが、認めるほかなかった。

「ありえないぞ…。お前、そんなの、あり得ないだろ…味方じゃないのか……」

空虚な思いが隆汰の身体を、すう、と通り過ぎた。まったく平然とした様子でそれは通り抜けていくが、通り抜けられた隆汰の身体自身は、とても冷えた。冷たいあまりに、握っていた鉄パイプを、ぼとり、右手から手放しても自分でそのことに気が付くことは、無かった。

鉄柵の向こう側で、てらーが、白々しく頭を下げた。

(ごめんなさい。朝野隆太さん。でももう遅いです。あなたは残念ながら私と大家様が命を長らえる為に利用されて、今までは『死んでいた』だけでしたが、今度は『滅びて』しまいます。そこから先の世界は本当に虚無の、真っ黒の世界だと言いついています。そこから先)

隆汰の全身に電流が走った。名前を伝えられた途端に足元から頭为天辺にまで行き届いたそれは、頭为天辺で集束されて、一つの形となった。

形となって現れたものは真紅の色をしていた。脳味噌中全てを覆い尽くすほどに、濃密な蜜のように、駆け巡ってへばりついて感情となって脳味噌から出発して、全身に伝達されたのだった。

落としていた鉄パイプを、右手でもう一度握り締めた。そして、することはただ一つだった。叫びながら、魂の慟哭をひたすらに放りながら、鉄柵にひたすらに鉄パイプをぶつけた。怒りをぶつけた。二度も無下に扱われ無残に利用されたことの憤怒を、鉄パイプを媒介にして、ひたすらに放った。出来るだけの力で。出来るだけの時

間で。

「貴様アアアアアアアアアア！ 絶対に、絶対にいつか、絶対にいつかお前を殺してやるからなア！ 例え真つ黒の世界の虚無だとしてもお前や大家に対する怒りを糧にして何時だってお前らを憎むことを忘れない！ 忘れないからな！ 俺は例え土に還ったとしても、この地獄での体験を、屈辱を、絶対に俺は忘れない！ いいかよく覚えとけよー！ 赤い座敷わらしのてらー！ 土の中から何時でも俺はお前を殺すための準備を整えてやる！ 何度貴様の足で踏みにじられ蹴飛ばされ思うがままに利用されたとしても、貴様を絶対に殺しつくすその時まで俺は恨み続けてやる！ わかったか！ 絶対に、忘れるなアアアアアアアア！」

鬼気迫る絶叫だった。痛々しいばかりの憎悪だった。平然と聞き流すことが出来ない怨嗟の言葉だった。だが、てらーは、微笑んでみせ、お辞儀をした。うやうやしく、お辞儀をしてみせた。

（あなたは人柱です。生贄と言い換えてもいいです。その『敵』はね。ある程度の死者を平らげればそれで満足なんですよ。五人も食べれば、彼らは大満足で立ち去っていくんですよ。……所詮、一度『死んだ』人間であつたあなた方など私と大家さまに利用されるためにあつたんです。さようなら、隆汰さん。最後に自分の記憶を取り戻すことが出来て、よかったですね。勝者は、私たちです。敗者は、あなた方、です）

脳波に響く言葉などほとんど聞き流していた。隆汰はひたすらに血眼になって、鉄パイプを振るっていた。だが、それだけだった。

鉄柵は鉄パイプに何度打ち貫かれても、へこまない、壊れない。

滅びる時間がやがて、やってきた。

肩を、掴まれた。腕を、掴まれた。そして頭を掴まれた。

「やめるよ……くそ……馬鹿……ああ……ああ……ああ……」

隆汰の身体にトリツイタ透明の触手たちは、その透明な部分の中にどんどん隆汰の身体の各部分を取り入れていった。一体は左腕。また違う一体は頭部。それまた違う一体は右足。という風にまるで

分担しているかのようになり、食事を分け合っているかのようになり、隆汰の各部分を分断させて、『敵』は彼の身体を捕食した。ゆっくり、ゆっくりと。その間、ずっと叫び続けていた隆汰の、それこそ地の底から呻いていたような声も、透明なる中に取り入れられてからは、水の中で泡を吹くような音にしかない。

こうして、地獄にて一度『死に』ながらも再び身体を与えられた死者たちは、他者が生存するための道具として利用されて土に還った。食べられた彼らは『敵』だった者の内部で溶かされ、栄養にされ、その後には糞として土に流される。

そういうことだった。それが滅びるということだった。

真っ黒な空の中を、UFOが飛び回り、点滅しながら消えていく。藍色の太陽が頂上にまで昇り上がり、霧はやがて消え去り、地平線まで見える荒涼の地が再び洋館の前に広がる。数多くいた『敵』はその姿をやがて消し、その消えた跡の荒れた大地には死者は誰一人として残っていない。

共に戦っていた中で唯一、土に還らなかつたてらーが、蛙飛びで跳ね回り、洋館の中へと入って、ボタン、と扉は閉められ、てらーは庭からいなくなった。

一つの騒動が終わり、地獄は静寂を取り戻して、音が一つも鳴らなくなり空しい。

せめて和やかな笛の音でもあれば、また違つたかもしれないが、

黒黒黒

闇。暗闇。漆黒。暗黒。闇、闇、闇。暗い視界。閉じられた視界。覆い隠す色。塗り潰す色。世界を塗り潰して一色。闇が牢獄となり息苦しさを造り、何かを蝕む。侵食し、染み込み溜まっていき他を許さない。息。闇。

許されていない。何が許されていないのだろうかも定かでは無い暗黒が、墨の付いた筆で真っ黒に押しつぶされて白紙は、湿り、濡れ、迂闊に扱えば真ん中から千切れてしまう。無情。蛆が腐臭に紛れて肉を貪っている黒のプールで、黒黒黒、埋め尽くされてもアア消失されず黒く沈殿して底に引きずり込まれようとしている。蛆が、目玉にへばりついて噛み付いている。ぷち、ぷち。音が聞こえる。ヨお、サイキンハゲンキかア？声が黒を通り過ぎていく。誰の声なのか、誰に伝えられた声なのか、それもわからない。返事をする声も無く、引っ張られて消えた。滅。滅びた。アア、無情。塗り潰されて漆黒の箱に詰め込まれては息も詰まり答えは黒の底へ沈んで行くだけで、何時までも何時までも黒黒黒黒黒と瞬間が連鎖して進展も無い。刹那に黒が連なり一度も光が差し込まれなければ刹那は無限となり時の感覚も墮とす。アア、と滅びた集合体が箱に詰められたまま窒息の嘆きを何処かより漏らす。聞き取ってもらえない嘆きは音では無く、何でも無い。虚。何時までもプールは全てを墮落…墜落させて…黒へと還していく。蓋が開けられれば。誰かの手が墨の漆黒に入り込んでくれるなら。光は沈殿している千切れた血肉を陽の下に再び持ち上げることも、或いは、あったかもしれない。蓋は閉じたまま、中身を確認されることもなく、次々に形を虚圧の中に投じて行く。蓋上から染み込み、雨漏りのように蓋下に垂れていく真紅の色は、黒黒黒とした虚圧に押しつぶされて自らも虚ろに墮ち入り真紅を忘れる。残骸から発される嘆きだけが何でもない形

に囚われないモノがひたすらに箱の牢獄で呻いている。吠えている。ひたすらに。ただいくら吠えても形にならないのは0だからなのだろうか。虚ろな0は時が動かない暗黒に塗れ、何も出来ない。何も出来ない。何も出来ない。何も出来ない？何もしないまま、牢獄で形を失ったままに沈殿して、アア、と静まった。

真紅が蛆に食い尽くされながら、四つ、落ちて、イタイ、イヤダ、クルシイ。感情を表して血を垂らしても、黒に垂れば血は吸い込まれて黒と一緒にになった。ぷち、ぷちい……音もやがて吸引されてプールの水面から引っ張り込まれて虚に押し潰されていく。血肉が後に続いて、四つ、もう形もほとんど失われかけていた形骸が、虚の表面に触れた瞬間に、とろけて形を無くした。抵抗する間は一切与えられずに、形は虚ろに堕ち込んで骨まで貪り尽くされ、イヤダ、クルシイ。そんな空しさもただの嘆息に変貌して、アア、と無情な息となった。黒黒黒のプールの窒息はさらに進み何か求められて0からの次を求めて吠える。だが形は作られず全ては闇の中で蓋を閉じられたままの暗闇を沈殿していき、底へ向う。底は無いから何処までも沈んで………

瞬間が繰り返されるだけだ。黒が続くだけだ。虚無が続くだけだ。楽しくも辛くもない虚圧の中で息が詰まるだけだ。色が一つだけだからわかりやすい。全てが一つだから争いもない。底のない空間だから何処までも沈んでいられる。時を気にせずまどろみに浸っていられる。少し暇なだけだ。少し退屈なだけだ。少し息が苦しいだけで、黒がうつとおしいだけで。底に引っ張られていくだけのことだ。底が無いのなら、よくわからないものに引っ張られているということとでいいじゃないか。何も無い、形無いものが形の無いものに引っ張られていく。わかりやすく面倒がなくて苦しみも極端に存在せず、沈んでいけばいい。黒として混ざり込んだまま、溶けた黒として……

しかし。

『本当にそれしかないか？』

声が、はつきりと、聞こえた。

ソレしか無い場所だ。黒は返事をした。声をふるわした。そのこと自体に黒は驚いて、沈殿していた自らが言葉を発する能力をまだ持ち合わせていたことに咽喉がふるえてしまった。黒は一つではなくたくさんの黒から成り立ち失われていく形、0の漆黒として形を成していない。黒はだから驚くしかなかった。自らが今、沈みながら声を発していた。沈んだらもう形を成していないはずなのに。沈殿していくだけのはずなのに。いま、言葉に反応して言葉が発された。そしてはつきりと聞こえた何者かの声が、再び黒の中に響いた。『忘れるな。お前にはまだ残っている。その残っているものが何であるかをお前はまだ思い出すことができる。思い出せ。力の限りに、思い出そうとするんだ』

そんなモノがアるはずがない。黒は応えた。ハッキリと聞こえて来るその声に言葉で応えることが黒には出来た。そのことに驚いた。そして黒は今、ハッキリと自分が黒だと、今認識した。自分は黒の一部で、黒の全体だ。黒という一色として何処かへ向けて沈没している一つの塊……

黒の中で何かが弾けた。膨れ上がった。それは膨張するだけ膨張して縮むことをせずに黒を逆に締め付けた。そのあまりの突然さに、黒の一部は耐えることが出来なかった。それによって生じたのは黒による嘔吐だった。吐く、という行為だった。これもまた黒には驚きだった。沈んでいく以外の行為を黒という存在が行ったことを信じる事が出来なかった。不思議に感じることにしか出来なかった。膨張は止まらない。さらに何かが膨れ上がり、様々な黒たちが嘔吐をはじめ。げぼ、げぼ、吐き出される色は白だった。真っ白の嘔吐が黒より発されて、黒たちは驚きを隠せなかった。侵食される、

と誰かが叫んでいた。黒から黒に伝わり、黒から黒に意識が飛んでいく。全部の黒が思っていたのは恐れだった。今までのまどろみが、たった一つのハッキリした声のせいで大きく変貌しようとしていることに、全ての黒が戸惑いを隠せなかった。何故その声でそんなに戸惑ってしまうのか、まるで、わかりはしない。ただただとにかく気持ち悪かったし、吐き気はとまらないし膨張も止まない。ひたすらに黒は白を吐き出して、今までの漆黒を改めていってもうぐちゃぐちゃに変わった。混乱、としか言い様が無かった。黒たちは自らの嘔吐によって発される白で、今にも自らの存在を消してしまいうだった。白に塗り潰されるような、様だった。黒の誰かが叫ぶ。ヤメろ、と。苦しい、と。それは紛れも無く嫌悪だった。感情だった。黒はハツと気が付く他なかった。たったこれだけのことでこんなことになるだなんて、まるで思っていなかったけど、事実だった。黒は形を持ち始めていた。0じゃなくなっていた。黒はハツキリとした一つの声だけで、自分が形を持ったのだと気が付かされる。驚きのあまり声が出せなかった黒に、声は平然とした口調で告げる。

『元々、ここにも形はあったんだ。だってここはプールだ。プールは一つのモノだ。0なんかじゃなく、たしかにそこに存在している。黒という色だつてそれだけでもう無いじゃない。虚無じゃない。黒という色が一つあるだけでもう既に0じゃないんだよ。だからお前たちは白を生み出したんだ。今、自分たちの不快の感情を利用して、お前たちは白を嘔吐として吐き出して、自らを変化させているんだ。それだけのことだったんだ』

そんな馬鹿な。単純な感想が黒の何処から湧き上がって、次々にそれが伝播した。あり得ない、信じられない、考えられない。だが、黒たちはもう気が付いていた。このように声に対して反抗する意志を持っている時点で、自らは確かに変化しているのだ、ということ。そして今までは一つのモノとして確固たる一つのものであった黒が、今様々な、濃度の違う黒になっていることで、個、になり始めているということ。自らの吐いた白が自らに纏い付き、自ら

の色を変えさせていく。黒はもう様々な黒としてそのプールの中で、意志を、感情を、それぞれが持ち合わせようとしていた。それは元々黒が持ち合わせていた感情だったが、忘れられていたもので、失われていたと錯覚されていたものだった。黒たちはそれぞれが喚く何デだ。オカしい。フシギだ、と。自らの変化、周囲の変化、それに戸惑うことで生じていたのは、自らたちを変化させた声に対する反感だった。これからどうすればいいのだから、わからない。その戸惑いが不機嫌の原因となり、その感情の矛先が声に向けられている。すさまじい数の黒たち。その全てが、ほとんどが、やかましく喚く。だが声の応えは簡潔だった。

『五月蠅いッ!』

怒声だった。戸惑いに対して発せられたのは何の答えにもなっていないただの怒りだった。黒たちの感情はさらに揺さぶられる。不機嫌さが嫌悪に変わり、死ネ、クソ、キエろ、ウセロ、殺ス、という罵倒が発されるようになる。ほとんど全員の黒が、もはや上を見上げていた。声は上から聞こえてくるから上を向いていた彼らは、口々に罵倒を轟かせた。そこにはもう確かなる感情の暴発があった。国に反旗を翻した民衆であるかのような怒りを、たしかにそこで膨れ上がらせている。

俺たちに何ヲしろってイウんだ、今すぐに道ヲ示せ、黒じゃなくなったオレタチは何ナんだ、ドウシタラいいの力教え口、もう沈ミたくはナクナった、ココニ降りテ来イ。黒たちはより具体的に感情を示すようになってきた。時間が経つにつれて、各々の黒が単純な言葉ではなく複雑な言葉を投げつけるようになっていた。それだけ黒は新たな存在に変わり始めたということであり、形を持ち始めていたということだった。だが、黒たちはそのどれもが落ちておらず、興奮していた。声に対して口調を和らげることはなく、ひたすらに、何かの導きを求めている。形の次に黒が欲したのは、それは道だった。光、と言い換えてもいいかもしれない。

『ならば、あれを見よ』

声は人指し指を突き出した。つまり、それは黒に光を示してみせた、ということ。そう感じた黒たちは、一斉に視線をその先に向けた。真剣な眼差しで。

『見えるだろう。あそこにあるものはお前たちに新たな方角を指し示す。さあ受け止める。上から落ちてくるあれを受け止めて、黒と白だけのお前たちは新たな段階に進み出す。さあ向え。そして迎える。もうお前たちはあれを塗り潰したりはしない。受け入れる器、自らの形を手にしたお前たちは忘れていたものを思い出し、姿を転じさせていくことが、きつと出来るさ』

そこにあつたモノ。蓋の上から染み込み、この暗闇の中に落ちてきたもの。それは、真紅だった。たった一つの真紅。いわゆつ、血肉、だった。蛆に蝕まれつつある、かつて黒が持ち合わせていた色のうちの一つで間違いはなかった。今まで全て塗り潰し、失わせていたそれだった。

黒の一部が叫ぶ。俺に八あしが宝石二見える、と。その言葉に対して頷くモノがいた。イヤ違ウので八ない力、と否定するモノもいた。だが全ての黒がほぼ同時に、一つの真紅を目指し始めた。プールの中でどよめき、蠢き、喚き、ゆつくりと上から落ちてくるたった一つの、今までは全て塗り潰して虚の一部分として同化させていたそれを受け止めようとしていた。黒には、真紅が今までとまるで違ったモノに見えていた。かつて虚無だった時、真紅はわずらわしいだけの存在であり、塗り潰さなければならぬ対象だった。そう判断して、間違いがなかった。

だが今は違った。たしかに違った。黒たちはその真紅を、求めた。欲した。己の中に取り入れるのではなく、受け止めたいと願った。もう、意見は固まっていた。黒たちは手を、挙げた。歓声を上げた。オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、と声を合わせて叫びあげ、そして手の平を大きく広げた。プールの中に落として見失うようなことを防ぐために、手の平を薄伸ばしにして、その時を待った。ひたすらに、待った。宝石、と表現された真紅を。

そして、ついに真紅が、ひた、と手の平に着地をした時。その瞬間だった。黒たち全員の内側から外側まで全てに対して恐ろしいほどの痺れが、震えが、巻き起こった。歓声はさらに激しさを増した。お、オ、オ、オ、お、オ、お、オ、お、オ、お。轟きながら黒たちは、己らが個でありながらも、心が繋がるのを確かに気付いた。心が一つになった、と誰かが叫び、そうか！、と誰かが悟った。黒たちは螺旋状にぐるぐるぐるぐると台風のように回転をはじめ、胸内に真紅の宝石を大事に抱えたまま、渦となって昇り上がった。目指すは上。駆け抜けた先に光がある。

真紅を原動力に、黒の形が新たな形を造りだし、新たな展開を産み落とす。

闇を塞いでいた蓋が弾け飛んでいき、闇闇黒黒黒の一边倒だった世界には光が満ちた。光を浴びた黒たちはそのまま昇り上がっていき、やがて何処かへと、消えていった。

大家

「何時になつたらあなたは私を迎えに来てくれるというのか。かつて運命が私たちの関係を切り裂いたあの時から、ずっと待っている。こんな姿になつてまでも私はあなたを待つているというのに……。私が探しに行かなければいけないのか？ 私があなたを見つけ出すべきなのか？ でも、私がここからいなくなつてしまえば、あなたは私を見つけ出すことは、きつと出来ないじゃないか……」

地下駐車場のようなその場所にて、全身を血まみれにしている気狂いの女は、フォトフレームに収められた写真にうつる、背の高い、意志の強そうな雰囲気を纏った男。木製の椅子に座っていて、冷えた手を暖めるようにしてコーヒークップを持ち、写真を見ている女の方に向けてうつすらとした微笑を浮かべている。を、じつと見つめていた。それを見つめる女の瞳はわずかに潤い、時折、涙の粒を零す。フォトフレームに血が付かないように手袋をはめて、両手で力強く握り締めている。

暗がりの、むせるような血の臭いばかりが充滿している空間で、女は写真にうつっている男を待ち続けていた。地獄の中で、その人が現れて自らを抱きしめてくれるその時を、いまかいまか、と待ち望み続けてきた。それが彼女にとって『生きていく』ということだった。その理由がある限り、彼女はこの地獄という世界で死者として生き続けることが出来た。他者を利用して己を生かすこともできるようになった。全ては男に再び出会うその瞬間のためだった。男が自分を見つけてくれるまで、生き延びるためだった。

己が他者から見くびられることのないように、頭から血を浴びた。自分の住まう場所に血液の臭いを充滿させることで、自分が他者より強い者だと示していた。てらーによって運ばれてきた新たな獲物の血を吸い取ることで、己の強さに対する確信をさらに強めた。血を頭から浴びればもう何も心配することはなくなった。男が現れる

その時まで自分は生きていられる、と安心することが出来た。

もちろん、容姿は禍々しいものに変わっていく。人間とは思えないような姿になっていると、自分でもそれは理解していた。だが彼女は、そんなことは問題ではないと感じていた。男のことを信じていた。このような容姿に変わってしまった自分を見ても、想い続けてきたその意志を汲み取って自分のことを男は抱きしめてくれるに間違い無いと、彼女は信じている。

だから彼女は毎日夢を見る。自分を見つけてくれた男が、駆け寄ってきてくれて、自分の血まみれの身体を抱きしめる。その瞬間に瘡蓋のように固まっていた血みどろたちが溶けて床に落ち、自分の本当の姿が現れる。それはさも、灰かぶりのシンデレラがキラキラと光輝くように。その本当の姿こそが本当の自分であり、そしてその自分の姿を浮かび上がらせてくれるのは、この世でその男一人だけ。夢の中に現れるその男は何時だつて、夢の中とは言え、自分に本当の姿を表させてくれる。現実ではまだ彼は現れないが、いつか、きつと…再び…。

毎日、毎日。止むことなく。止めることなく。彼女は想像を止めない。夢想を止めない。必ず男が、肖像画に描かれているかつての自分に気が付き、地下へと下り、この暗がりによつてきてくれると、それだけを彼女は信じて、バケツに注がれた鉄臭い血液を浴び、そして飲む。ペロリ、と舌を出して味を味わう。誰の血液だろうが、あまり気にしない。大切なのは血を浴び、そして飲み、自分が強者だと実感して安心を得ることと、そしてこれは彼女自身が奇妙に感じていることなのだが、血を浴びることによつて彼女は温もりを感じた。どういう理由なのかはわからない。血の色が目映いせいかもしれないし、人間にとって血液は生命としての源泉であるということなのかもしれないし、或いは、別の理由かもしれない。どういう理由かはわからないが、とにかく、彼女は血液を浴びることは止められない。すでに癖として、日常の中にその行為は欠かせない。周りの狂人たちから訝しい目で見られても、配下のてらーから時折恐

るしいものをみたような目で見られても、決して、欠かすことは出来ない。彼女にとつてそれは儀式のようなものであり、また麻薬のように甘味なる味わいも含んでいた。暗がりの奥で今日も彼女は二つのことを待っている。男と血。そのどちらかが現れば、彼女の一日はそれで完璧だった。待ち詫びている彼が現れる時は、まだ訪れないが。

足音が、暗がりの中で、騒がしく鳴り響きはじめた。

この空間に慣れていない者がやってきた、と女は気が付く。周囲を気にしない音量で足音を鳴らすのはこの空間の危うさを知っていない者に限られる。この部屋が狂人の溜まり場だと知っている者ならば、存在感を薄くするために音は鳴らさない。つまり、その無警戒の足音を鳴らす者はこの暗がりのことを知らない者であるということと同義。それは二つの可能性を示している。一つの可能性は、てらーによつて騙され案内されている哀れな死者が、自分に血を吸われることになる未来のことも気が付くことが出来ずに、足音を無遠慮に鳴らしているという、可能性。

もう一つの可能性は、彼女が待ち詫びている彼が、満を持して現れる、ということ。

女は耳を澄ます。どちらだろうか、と。どちらが目の前に現れるだろうか、と。

息を呑む。彼女は緊張をする。何回でも彼女は緊張する。何時になつても慣れることはない。汗が腋などから噴出、心臓が高鳴る。どくん、どくん、と。

(はやく、こい……)

手に持っていたフォトフレームを脇に置いた。姿勢を少し正した女の準備は、整った。あとは向こう側が姿を現すのを、待つだけだった。そして、やがて暗がりからの足音は、その大きさを増し、次第にその正体を明らかにする…。

だがそれが姿を遂に現した瞬間に、彼女は座っていた椅子を後ろに倒してしまふほどの勢いで立ち上がり、両腕をわなわなとヒステ

リックに動かし、そして激怒した。憤怒した。声を荒げた。

「下手に勘違いをさせて！ たかが下僕が！」

血を撒き散らしながら、数歩前進して、目の前にいる下僕の、小さく細い首元をギョツと握り締めて、女と同じ高さの視界までそれを持ち上げる。持ち上げられた下僕は、苦悶の表情を浮かべながら、宙に浮いた自らの手足をばたばたと動かし、そして搾り出すようにして、呻いた。

「……………く……………く……………お……………」

何が言いたいのかまるでわからなかった。首の絞めすぎで泡を吹き始めてしまったので、それを見てようやく気持ちを落ち着け、女は、自らの下僕であるてらーを、解放した。どさっ、と石床に。真っ赤な座敷わらしのてらーの、首元さえも、真っ赤に染まった。ぷにぷにした丸い顔にも、血の斑点がいくつもこびり付いてしまっていた。だが女は弁解をするでもなく、はあ、と大きなため息をついてから後ろに下がり、椅子に腰を下ろした。べちゃり、という水音を鳴らしながら。

「そんなに急いで何の用があるというんだ。『敵』ならばもう血肉を五人も平らげて満足し、いなくなっただばかりであろうが。せつかく私は緊張していたというのに！ 汗を掻いたというのに！ 全てが無駄にされた気分だ！ てらー、下僕が主を不快な思いにさせるというのは、下僕としてやってはいけない行為だな？ そうだろ？」

サディステイックに容赦無く言葉を放る。だが不自然だとは感じていた。暗がりに住み慣れたてらーがこれ程までに騒がしく音を鳴らすのは、かなり珍しいことだった。もしかしたら初めてかもしれない。だから不思議だった。自分で首を散々絞めたせいなのだが、むせるだけで何の返事もしないでてらーに苛立ちを感じて、ヒステリーが再発しそうになる。

「何か言え。それとも何も無いのか。何も無いのに、あんなにはしやぎ回ったような音を鳴らしながらここにきたのか？ 気でも狂ったのか、てらー……………」

それからしばらく、てらーのむせる音だけとなり、女もその様子に何か声を掛ける気にはならなかった。面倒臭さが湧き上がって、言葉を掛ける気分さえ湧かないのだった。それほどに力強く首を絞めていたようだった。

だがやがて時間が経てば、てらーもよたつきながらも立ち上がり、そして下僕らしく「申し訳ありませんでした」と謝罪してみせた。しわがれていたが、伝わった。女は、顎で催促をした。次に何か言うことはあるんだろうな、まさか、という思いを表現しながらの、催促。

だが催促して返って来た言葉のせいで女は混乱した。というのも、下僕のとらー自体も非常に混乱していたらしく、それに加えて首を絞められたので疲れも混じったため返事も、簡潔で、考えられていないものになったのだろう。

「怨念です……！ 怨念の塊の……真っ黒が……！」
理解不能。おもわず女は、首を傾げた。

洋館の屋根に取り付けられている鐘。鼓膜を突き抜けると表現しなくなる程の、煩さで鳴る。それを鳴らしたのが誰なのかは、大家にはわからないし、てらーにもわからない。だがそれは二人の心を焦らせる作用を何処かに含んでいて、足を速くさせる。地下から出て、広間を渡り、扉を開いて外に出る。赤い足跡を付けながら門まで駆け抜けて、その鉄柵を開き、地平線まで見える荒野に臨む。そして大家は、血をばたばたと垂らしながら、その血の中でかすかに光を放っている両眼を、うるわせた。ふるふると、うるわせた。

彼女は一瞬で悟ってしまった。その巨大なる存在を見上げながら、無力感と挫折感を心底から味わい、膝をがくがくと震わせて、「なんとということだ」と口を開いた。下僕のとらーは、「こ、こんなものは私、見た覚えがありません！」と泣き顔で大家を見やるが、それを見たことが無いのは大家とて同じだった。このように巨大な、

生物、いや、生物なのかはまだわからなかったが、とにかくその巨大さは圧倒的で、二人など蟻のようなものだった。洋館でさえ、その巨大なる存在からすればミニチュアの模型と変わらないであろう。「人では、ないよな……巨人……違う……か……?……」

何であるかなどわかりはしない。未知として、黒く佇む。

それは黒い液体が密集することによって一つの形を成しているように見え、黒の液体は身体の内部で絶えず流動をしているのが、透けていることで外からでもわかり、墨を注入し尽くした水風船のようでもある。圧倒的なのはその規模、スケールであり、天を衝くかと思われるほどの高さで、荒涼の地に、二本の足で直立して立ってみせているのが恐ろしい。人間で言う顔にあたると思われる箇所にも、らしき真紅の輝きが一つ。ぎらぎらと点滅していて、二匹の蟻の子を見下している。

「ひ、一つ目の巨人……キュ……キュクロープスというやつでしょうか！ お、大家様、逃げましょう。でかすぎます、あ、あ、あまりにも……」

「怯えてどうする臆病なヤツ！ 立ち向かう他にあるか？ 無い！」
「あ、ありますよ！ 一度あれから離れて体勢を整えなければ、つ、潰されます！」

「どうせ背を向けて逃げ出したところで、すぐに追いつかれておしまいだ！ これ程の巨体だ。私らの千歩がこやつの一歩だとしても何ら不思議じゃない！ 貴様の便利な魔術で、逃げ出す手段があるのならそれを使うがな！ 提案しないところを見ると、ないのだからが！」

「……は、はい……」

「ならば逃げ出すなどという臆病なことを言うな！ 私はこの洋館を守るためにこの巨人を殺す！ メイドとコックと狂人どもで戦えるやつ全員を総動員にしてあいつを殺す！ あの人が見れるまで、私はこの洋館を潰すわけにはいかないんだよ！ わかるか、下僕！ わかるならさっさと全員を呼び出して来い！ そしてお前も戦え

！ 命を賭して、こやつに立ち向かえ」

「……う……う……」

全身を小刻みに震わせながら、頭を両手で抑えて何か悩ましいポーズを、しばらくしていたてらーだったが、大家の繰り返し返される怒声に突き動かされて、洋館の中に駆け込んでいった。

その小さな後姿を見送ってから、大家は再び上を見上げて、息を呑んだ。圧倒的な巨大さを誇る怪物が、空を覆い尽くすようにして立つ。その怪物が一つ動いただけでも洋館は潰れるだろうし、また大家も頭から爪先までプレスされてしまうことは間違い無かった。荒涼の地で、自らの死体が真っ赤な薔薇のように咲くイメージが簡単によぎっていき、絶望感が頭を支配する。

おおおおおおおおおおおおおおお……

黒の巨人は口も無いというのに雄たけびは津波を引き起こすがごとくの力を含んでいた。黒の巨人のその全身から発されるエネルギーであるかのように、空間を歪ませる。

雄たけびは大家に対して恐ろしいほどの効果を発した。彼女の戦意を、先ほどまで滾っていた溢れんばかりの闘いの意志を、一瞬にして奪い取り消滅させてみせた。彼女は、がくがくと芯から震え、そして震えを自らで諫めることも出来ずに、地面に膝をついた。両膝を、あまりにも呆気なく。

メイドやコックやてらー等の下僕たちが大家の下に駆けつけた時、血まみれの彼女は透明な涙を幾重にも地に垂らしながら、拳を地面に叩きつけていた。悔しそうに、無念そうに。

彼女はひたすらに待ち詫びている人の名を、呼んでいた。それは黒の巨人の雄たけびに簡単に掻き消されてはいたが、それとは関係無しに、大家は一つの名前を繰り返し叫ぶ。

その哀れな後姿を、下僕たちは呆然と立ち尽くし、眺めていた。下僕たちは命令あるいは怒声を欲していたが、その哀れな後姿にそのような体力、意志、が残されているとは思えない。終焉が近づいているようだ、と一人のコックは想像し、また一人のメイド

は諦めの微笑みを浮かべては、すた、すた、と大家に近づく。その後が続くようにして、下僕たちは大家の周辺に集まり、一つの輪のような形になって、そして誰が最初にやり出したのかもわからぬうちに、全員が目を瞑った。手を握り締め、顔を俯かせ、呼吸を静まらせる。てらーがささやくように呟く。「い、いいのですかね、こ、これで」

「いいんですよ」

メイドの誰かがやんわりと微笑む。無機質に。整った微笑みで。

「もうだめなのですよね。大家さま」

「ならば、仕方の無いことです」

「私たちはあなたに付き従いました。あなたが諦めたのなら、私たちはそれに付き添うまでです」

「さあ、祈りましょう」その後には、誰も喋らなくなった。黒の巨人の雄たけびだけが、荒野に轟く。

何に祈っているのかは、わからない。そもそも祈っているのかどうかも危うい。ただ自然と下僕たちはそういう態度に変わっていて、それは意識的な行為ではなく、ほぼ無意識的なものだった。

諦観からやってくる安らぎが、輪の中で漂い、暖かみとなりて終わりの時を待つ。潰されれば『死ぬ』ことになるのか、それとも『滅びる』ことになるのか。そんなことさえも未知なる存在の前では、わからない。

怒りおさまった後の静まり

燃え上がっていた怒りはもう無くなっていた。むかむかとするだけだった心は足を大きく持ち上げて振り下ろして、怨念の対象を殺した瞬間に、無くなった。しばらくの間は荒れていた呼吸を整えることしか出来ず、振り下ろした足を持ち上げて相手がどうなったかを確認したのは、呼吸の音が自分に聞こえなくなった頃。巨体になったせいか、火山が胎動しているかのように荒々しい鼻息をしていて、それが恥ずかしいような気分になった。荒れていた気分は静まる一方で、自分が何故怒りを感じていたのかも忘れてしまいそうになる。だが、踏み潰した箇所を真紅の目でみゃれば、怒りの理由は思い出される。自らと哉行とジャックと優希とマリーを裏切ったてらーと大家。それが先ほどまで立っていた場所は、今やもう、ひどい有様だ。

踏みにじった。というのはつまり、光り輝く未来に向けて血塗れになることも厭わず日々生活し目標に向けて一身を捧げていた者を墜落させて全て台無しにしたということだ、芸能界デビューさせてあげるよという餌に噛み付いて嬉しそうな顔をしているその人を絶望に叩き付けたということだ、何て言う風に言うと相手が無垢な存在であったかのように感じられるからこちらが罪悪感をぶわーぶわーと感じてしまいそうになるが、それはただの錯覚であり、人間というものは生者であった時も死者であった時も、基本的には自己中心的なものであり、子どもの時などは自らの保身のために平気で嘘を付き、それがばれた時には子どもという立場を利用するのも厭わなかったりするわけなのだが、それは人間として別におかしいと感じられることではなく、むしろ子供ってそんなもんだるとか納得してしまうのは俺の性格が歪んでいるからだろうか。まあ、そんなことはどうでも良くて、とにかく、今踏みにじった相手が大地にペッチャンコになってしまった様はとてグロテスクで哀れなものなの

だが、その状況を作り出したのは俺の溢れんばかりの怒りが原因であつたのだが、これは悪いことだつただろうかそれとも良いことだつただろうか、と誰かに判断して欲しい気持ちになつている。でも俺の周囲を囲つてくれている、黒黒黒の密集体たちに意見を聞いてみても、何だかみんな適当で、まあいいんじゃない、とか、悪くないよね、とか、ていうかこいつら屑だつたよね、とか、足で踏みにじる感覚は微妙な心地悪さだけどそれが良かったよ、とか、暇になつたな、とかいう本当に適当な答えばかりだ。あーあ、と露骨にため息を俺はついてみた。そうすればみんなもうちよつとは俺の気持ちについて意識を傾けてくれるんじゃないかと思つたからだ。だが、嫌らしくてム力つくなあため息とか止めるよ、という風にそっぽを向かれて屁をこかれる始末。実に悲しくなつてきたので、もう何だか考えるのが面倒になつたので塞ぎ込んでいた所、お前自身で良いか悪いか判断してくれていいよそれでOK、と言われた。踏みにじつたことによつてぺつちゃんこになつた多くの死骸を見下ろしながら、てらーの策略の小汚さや憎たらしい嘲笑いなどを思い出してみながら良い判断だつたか悪い判断だつたか自分なりに考察してみると、あらま、結論、良い判断だつた、ということに落ち着く。むごい仕打ちをしてきた相手を踏みにじることの何が悪いのか、悪い所なんて全く無くて、普通に考えれば良いことに間違いないじゃないか、と。

だけれど何かむずむずとする。それは、くしゃみをしたいのだけれどくしゃみが出ない時、程ではないが、それに近い感じだ。今、そういう感覚がある。違和感だ。ひっかかりだ。痺れ、だ。

見過ごすわけにはいかない。以前は、この痺れを無視していたせいで、てらーの陰謀に気が付くことも出来ずにはめられたのだから今回は、無視しない。むしろ積極的にこの痺れが何であるかを分析し、説明するのが吉と見る。

用心深くなつたねえ、と黒の誰かに揶揄されたが、聞き流す。

(この巨体のままでは踏み潰したヤツらの姿がハッキリと見えない。

皆、人間の大きさにまで圧縮するけど、異論とかはない？）返事は特に返らなかつた。だが、黒の密集体たちは、行いでその言葉に答えてみせた。風船の空気が抜けるがごとく、黒の巨人はその全身をみるみる小さくしていき、あつという間に人間と同じ程度の大きさに変わつてみせた。ただ風船とは違つのは、中に入つていたものが抜け出たのではなく、ぎゅうぎゅう詰めになつてみせることで小さくなつた、ということだ。だから黒の密度は凄まじいモノになり、それこそ真つ黒で、光を一切通さないような濃度の黒となつた。

荒涼の地から、洋館とその住人を踏み潰してみせた巨人は消え、その代わりに黒い人が、真紅のツ目はそのままに立つ。そして自らがぺつちゃんこに踏み潰したばかりの場所へと、てく、てく、と歩いて行き、そして数多くの亡骸がある場所に辿り着いてから、足を止めた。

どれもこれもが、恐ろしいほどに損傷している。

身体の幾箇所から臓器がはみ出し、手足がちぎれていたり、骨が飛び出していたり、筋繊維がぐちゃぐちゃになっていたり、顔面を見てもそれが誰なのか判別が付かなかつたり。策略の座敷わらしがどれだったのかもわかりはしないし、大家の目立つ外見ですら、今となつてはどれがどれなのか判別が付かない。それほどに、損傷はひどいものだつた。

それを何ともないように見下ろしていた黒の人の全身から、白い液体が流れるまで、それ程の時間はかからない。真紅の部分も、真つ赤な液体を、つー、と垂らす。そのどちらも、不快感から来る嘔吐だ。自らが作り出した光景によって、嘔吐、してしまつている。慣れていない状況に心を大きく動揺させられていた。

真つ白の水溜りが、黒の人の足元からどんどん周囲に広がつていく。ひび割れた大地のそこかしこにそれが流れ込んで行き、そこで広がりや途絶える。しばらく黒の人は徒労している人のように頂垂れてしまつていた。だが、何時までもそうしているわけにはいかなかつた。透明なるよくわからない存在、『敵』が出て来たら面倒だ、

という思いもあるからこの場にずっと留まっていたくはなかった。だが、隆汰は自分の中にある違和感を何とか処理したいという願いもある。

（取り込むんだこいつらを）。黒の中の誰かがそれを提案して、他の黒大勢から反論が巻き起こる。

何を言っているんだ、潰した奴を何故取り入れる必要がある、と。だが賛同する意見もあった。黒の中に一度取り込んでしまえばもうこいつらも同じ黒となるのだから、構わないじゃないか。むしろ惨たらしい亡骸を目の前から消すことが出来るのだし、真紅の感じている違和感の正体も突き止めることが出来るのだから、非常に良い提案だと思うが、という意見である。だが、何故わざわざ取り込む必要がある、取り込まなくても違和感は何であるかは亡骸を良く観察すればわかるかもしれないのだから、取り込むことは無い、このまま放置しておけばいいじゃないか、という否定的意見が黒の中では多数だった。意見を述べた黒は、（まあ判断を決定するのは真紅に任せよう）と判断を委ね、そこから先は黙りこくった。否定した黒たちも、真紅に任せるということで異存はなかった。だがしばらくの間真紅が何も言わないで立ち尽くしているの、（どうするんだ？）と黒の誰かが促した。催促された真紅の隆汰は、ゆっくりと瞼を閉じ、しばらく瞑想をするようにして目を開かなかったが、どうするか決めたとしたことなのだろう、やがて瞼を開いた。

「この亡骸を直視し続けるというのは精神に堪える。かといって違和感を放っておきたくも無い。てらーや大家を取り入れるということに多少抵抗は感じるけど、取り入れれば黒に変えてしまえばいいだけのことだ。こいつらを、取り入れよう」

黒の多数がどよめきを隠さなかった。否定的意見を携えていた連中は、真紅がまさか取り入れることを選択するとは考えていなかった為に動揺した。わらわらと言葉が黒の内部で駆けずり回り、それが広がっていく。本当に大丈夫なのか、怖くないのか、やばいんじゃないのか、もっと慎重に動いた方がいいのではないか。そういつ

た意見の中でも特に内容を持っていた意見は、説得力のあるものだった。

（今、我々の目の前には洋館が消えてなくなっている。我々の足でこれを踏み砕いたわけだが、砕いた瞬間に、私には洋館の『心』のようなモノが踏み入ってきた感覚があったのだ。洋館は物であるが、踏み砕いた瞬間に、洋館の踏み砕かれたことによる喪失感、絶望感、そして洋館が建設された頃から今までこの場所に佇んできていた経緯が、映像となって、入り込んできたのだ。洋館の意志はおそらく長らくそこに住んでいた者たちの意志を統合したものだと思われる。そして映像が映していたのは、願っていたのは、一人の男だった。

洋館と洋館に住まう者たちはどうやら、一人の人物だけをひたすらに待っていたのだ。我々に踏み潰される瞬間までそのことを思っていた意志の塊の断片を、私は感じた。おそらく踏み潰した時に洋館の一部分を取り込んだことにより、それを感じたのだろう。私は不快だった。実に不快だった。物を一部分取り込んだだけだということに、踏みじったモノを自らの中に取り入れるということは、多少でありながらも、実に不愉快であった。モノでさえそのように不愉快な気分をこちらに与えてくるのだ。おそらく、人を取り込めば、それよりも遥かに凄まじい衝撃をこちらは感じてしまうことだろう。自らが踏みじったばかりの人間を自らの中に取り入れるということとの危うさを、考えるべきだ。罰を受けるようなことと同じではないだろうかと私は推測する）

その言葉に次いで、俺もそれを感じたんだ、などと追隨するような意見が現れはじめた。言葉で表してくれた先ほどの意見は、多分俺の中でくすぶっていた気持ち悪さのことだ、という意見であった。真紅の部分である隆汰が感じている違和感も、おそらくそういうことから生じていた違和感ではないのか、と確信めいた言い方をする者も現れはじめた。もしそういうことならば、この人間を取り入れることは自殺行為に等しいのではないか。違和感そのものを身体に取り入れたら、内部で痺れは電流と為り変わり、我々を滅ぼすの

ではないか、と。

乾いた風が吹いた。黒たちは沈黙した。何かを言いたそうにして
いる黒はまだいたが、全体として漂っている空気が、真紅の意見を
求めていたので、誰も喋らなくなったのだ。

真紅は洋館があつた方をジツ、と見つめていたが、やがて再び瞼
を閉じた。今度は目を開く前に、答えを述べた。真紅の考えはあま
り変わっていないかった。

（違和感は失くしたい。失くさなければおそらく、どうにしろそれ
は後々に膨れ上がって俺たちの邪魔をする電流になる。確かに目の
前の人間を取り入れることは、黒の意見を参考にするならばかなり
危険なことなのかもしれない。自殺行為なのかもしれない。だけど、
本当にそうだろうか。取り入れて罰を受けてそれによって滅ぶかも
しれない。だけど、おそらく、これは取り入れなくてはいけないこ
とだ。違和感に気が付いているのなら尚更だ。逆に言えば、違和
感を取り除くチャンスはこれが最初で最後なんじゃないかとも感じ
る。亡骸が無くなったら、もうこいつらを取り入れることは出来な
いんだ。違和感の正体を明らかにしてくれるのはこいつらの亡骸の
中にしかない。だから俺はこいつらを取り入れたい。そして正体を
暴いて、違和感を失くしてしまいたい。むずむずしながら死者とし
て生きてたつて、きつとむずむずするだけだ。だつたら、すつきり
した方がいいじゃないか。少し危険だとしても、きつと、すつきり
した方が良くないか。俺たちは死者だ。もうこんな姿じゃ死者かどう
かなのかも危ういけど、俺たちは地獄で生きている。だつたら、思
い切ったこともやれる。だつて、地獄で生きている訳のわかんない
真つ黒な存在なんて、異常極まりないじゃないか。異常な存在が異
常なことをやるのは、きつと、普通なことなんだ。だから、取り入
れる。こいつらを取り入れて、違和感を失くす）

真紅が自らの意見を述べた直後、黒のほぼ全員が黙りこくつた。
一部、白の嘔吐を吐き出す者もいた。だが、真紅の考えがほとんど
固まっていることから、黒の誰にもはや反論の意見はなかった。

皆、沈黙をすることで、言いたいことを封じ込めた。はじめに取り込むという意見を出した黒は、静かにほくそえんでいることだろう。(じゃあ、やるからな)

黒の右手を前に突き出し、その体勢のまま亡骸が潰れている空間の真ん中まで、進んだ。そこまで進むと腰を下ろし、そして右手をゆっくりと地面に置いた。血が溜まっているその箇所、右手は沈みこみ、手の平は完全に血によって見えなくなる。そしてしばらくした後、右手が亡骸たちを吸い込みはじめた。ずるずるずる、ずるずる、と汚らしくもある生々しい音を発しながら、右手が滞りなく、なめらかに、それらを吸い取る。全てを吸い取るまでにかかった時間は、一分もなかった。

全てを吸い取った後に、黒の人はゆっくりと腰を上げ、直立すると、全てを吸い取った右手をジツと見つめた。その間、誰かが嘔吐をすることもなかった。何の問題もなかったのだらうかと、周囲からは見えた。そして黒のほぼ全員も、特に不快が競り上がった。りなどはしなかった。大丈夫だった、成功した、と感じた。だが、それは、勘違いであり、つまり、違った。

びちゃあ。何か堰を切るように次々に嘔吐が発生した。白の嘔吐が、先ほどまで血溜りがあった荒涼の地にミルクのような水たまりを形作っていく。ひどい勢いで、蛇口を捻ったような勢いで、次々に黒の全身から白が噴出し、そして真紅の部分からも激しく赤い液体が流れ落ちた。

(…だめだ……！……滅びる……！)

黒の誰か、まだ余裕のあったものがそれを言った。ほとんど全員が、だめだ、ということは嘔吐をはじめた瞬間にすでに悟っていた。びちゃり。黒の人は膝を付き、崩れ落ちるようにして倒れた。白の中で埋もれて、そのまま沈んでいってしまいそうなほどに、脱力していた。

しばらく痙攣したように、ぴく、ぴく、とした後に、黒の人は動かなくなった…。

『夢の世界に招待しよう。そしてその後にはきつと奇跡を垣間見ること出来るだろう。人には常に可能性がある。ならば真つ黒になつたとしても形がある限りは大丈夫だと言うことだ。貴様の大切なもの、本当にダメになりそうになっているお前に聞こえて来る夢に耳を傾けてみればいい。活路は何時だつて開くさ。それを少なくとも私はわかつている。だからお前にもいずれ、わかるのさ』

ミスページ（編集の都合）

申し訳ありませんがここは空白のページです。編集の都合で、ちょっとミスつてしまいました。

200文字の空白は全て『あ』で埋めたいと思いますので、見苦しいとは思いますがご了承のほどよろしくお願いいたします。

ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああ

人と人の天国と地獄

テーマパークでは現在イベントが開催されている最中だということに気が付いていなかった男だが、目玉である様々なキャラクターの顔形を表現している花火が、夜空に次々に打ち上げられるのを眺めることになってようやく、今日がテーマパークにとって特別な日であったと知る。何でも、七十周年なのだそう。バブルが弾ける以前に経営が始まったというのだから、その程度の年月にはなるのだろう。七十年前など男などまだ生まれる気配すらなかった。隣に座っている彼女だって生まれているはずは無いし、親ですらこの世にまだ生を受けていなかった頃かもしれない。男や女の祖父や祖母にあたる年代の人間たちが、若い人間として扱われていた時期。男にはそれがどのような時代であったかなどわからず、その過去に関しては、学校で得られるような知識を持っている程度だ。だから、その年代からこれまでの間に経営者がどのような苦労し続けてきたのかの想像も全く出来ない。なんとなく、大変だったのだろうな、と感じる程度。

だが、『七十年間の不断の努力によって築き上げたテーマパークの上空に打ち上げられる個性的な花火』は間違い無く、見る者を喜ばせる華やかさ豪快さを持っているし、それに七十年という重みが加わることで感動すら巻き起こさせようとする。少なくとも男は、なにやら訳のわからない力のせいで気持ち、ぐらつ、と妙な感じになる。隣を見てみると、女の頬を涙の一筋が伝っていた。

「泣くんだね。優しいね」

そういう言葉が何故かついて出た。花火に心を奪われて涙する女性に対して優しいねと述べるのは少しおかしいよな、と男は自分で自嘲したい思いに駆られそうになり、そして、その直後に胸が奇妙な音を経てるのに気が付く。そして思い出す、そうだ彼女とは今日でお別れとなるかもしれないのだ…と。

実に迂闊なことで、それを脳内から忘れさせていたことは、男にとってはナサケナイの一言に尽きる。女の別れたいという気持ちを忘れさせる言葉を用意しておく程度のこととはしていて当然のはずなのに、その用意さえも無い。何時の瞬間からだったのだろう、男はほとんど無邪気にテーマパーク内を駆けずり回っていて、つまり上手く行っているような気分になっていた。

女を口説くための文句を考えてなんていなくて、モッキーやモニ―ときらきらとした気持ちで握手をしたりしていたというわけだ。

男は、今からでも遅くない、と勘違いをした。今から何かを考えようと頭を捻った。だが、もはやそれは手遅れかもしれなかった。

「うええ、え……」はじめは呻きのようなものだったのに、やがて喚くような声に。

女の、大泣きが始まったのだ。あまりの突然ぶりに、男は狼狽した。

「おい、何で泣くんだ！ 泣く事はないじゃないか。そんな風な姿になる必要は全然無いし、そんな風な泣き方は少し、ずるいっていうか、何とも言えなくなっちゃうじゃないか……ああ、ああ、すまない、少し黙る……泣いてくれ、思う存分泣いてくれよ……」

何かうんざりするような気持ちと、別れの事を考えて泣き出してしまった彼女を労わってあげたくなる気持ち。二つの気持ちは混ざり合うこともせず、かといって反発もしないので男は何とも言えない心境に陥って、黙る他なくなる。

女もやがて、泣き喚くのを止め、そしてその後は、泣き喚いた後の気恥ずかさのせいだろうか俯いてしまい辛そうな様子になる。

だから二人は沈黙に包まれて、花火が打ち上がって行く賑やかなテーマパークの広間で、ひたすらに二人のための静寂を守る。周りの騒音など、あつてないようなものだ。

上空で光となって二人の顔に斑模様の色彩を貼り付ける花火。あまり眩しい光ではないが、二人の顔が、どちらも物悲しそうであり、そして複雑なもどかしさを抱えていることは明るみに出す。そんな

二人の内の片方が、小さな箱を取り出して、勿体つけるようにしながら、相手の膝元に置く。置かれた側は、驚きを隠せずにはまばたきを何度もした後に、しわがれた声で言う。

「別れ際のプレゼントなんて、やめてくれ」

だが女は無表情のままに、男に慰めの言葉を掛けることもしなかった。

膝元に贈り物を置いたことで吹っ切れたかのように、大きく息をついた彼女は、花火が打ち上がっている側の頬だけを照らされながら、男に別れの言葉を告げた。

「さようなら」

女の唇が閉じられた。彼女は唇を閉じたそのほぼ同時に、彼女の微笑みを浮かべた。男はそれに見とれた。数秒後に、世界の豹変が奏でられ始めた。地面が、水の波紋が広がるようにして揺れる。花火が、色鮮やかだったのに真っ白になり味気ない。人々が全て社交ダンスを踊り出して、月が真っ赤となって満ちる。

世界の終焉。そんなものが連想されてしまい、男は動揺する。そんな彼に微笑みを向けたまま、彼女は「箱を開けて」と消え入りそうな程に小さな声で言った。

男はそれが何を意味しているのかは理解出来なかったが、成り行き気持ちに任せて、渡されたばかりの小さな箱を開けた。パカッと開けたその中に入っていたのは、『地獄』という二文字が輝いている腕時計。

「これで世界は大丈夫なんだな」

男は訳もなくに考えずにそれを装着する。手首にピッタリと腕時計が嵌った。そのことがやけに嬉しかったので、男はそのことを女に報告しようと思った。だから、俯かせていた顔を持ち上げて、彼

女のように笑顔を浮かべてよう、と。

女の姿は消えていた。元々はじめからそこにいなかったと錯覚を起こさせる程の突拍子さで、女は男の前からいなくなっていた。

しばらく、男は一人、立ち尽くした。ひどく空虚で、ひどくやるせなかつた。何かに裏切られたような気がしたし、全てがどうしようもない物のように見える。世界の終焉は腕時計のおかげでなんとか治まったようだったが、こんな世界は滅んでしまえば良かったのに、と思いなおした。

男は泣きたくなる。その場でうずくまって、泣きたくなる。こんな場所にいたくはなかつた。一人で花火の光に照らされたって、空しさが募るばかりで、やるせなくなる。

しばらくぼーっとした表情で立ち尽くしていた男。その彼の脳味噌に、言葉が響く。

『夢は楽しかったか？ 現実が彼女を奪っていったぞ』

両手を前に伸ばしてみても、空気があるだけで、何かを引き寄せようとしても、空気があるだけで、思いついた言葉を掛けようと思っても、聞かせる相手がいなくちゃ意味がない。

たしかに奪われてしまったようだな、と男は悟る。

「現実だと彼女は帰りのバスでも明るそうに笑っていたよ。それに、わざわざ俺に、さようなら、って言葉だって告げたりはしなかつた。彼女は静かに死んだものな。俺と一緒にいない時に、違う場所で、死んだ。夢はとても素晴らしいものだよ。現実の時とは違う光景が産み落とされるとは言え、こうしてテーマパークにもこれだし、彼女にも会えたさ。一緒に笑えたさ。一度失ったものを再び見せてくれるだなんて、ケチな現実には到底出来ない技だよ。なあ、教えてくれ。お前は一体何なんだ。これまで死者の世界で生きている俺に何度も語りかけてきたお前は、一体何者なのかいい加減に教えてくれよ」

男はテーマパークの象徴でもある、クリスタルキャッスルという名前の造形物の元へと歩いていくと、その大きな扉の前に立ち、動

物の毛を撫でるようにして扉をさすった。別に深い意味はなく、ただ気を紛らわせるための行い。

『教える必要は無い。また、知る必要も無い』

男の脳内でつぶやく、男性らしき洪みのある声は、容赦の無い言い方をする。

『ほら、もう夢から醒めるよ。ただし、お前の』

「俺の？」

意味がわからないなあ、とと思っている男の目の前の扉が、予告も無しに開いた。クリスタルキャッスルの内部は関係者以外立ち入り禁止のはずだから、離れなければ従業員に叱られる。

だがここは、夢の世界だ。この先に広がっているのが従業員専用の用具入れだとか休憩室だとかである訳が無い。そんなロマン皆無な場所であるはずが無い。

『多くの人間の意志が詰まった夢を見る。そこにある願いを眺めてみる。そこにあるものは何だと思う？ そこにきつと置かれているものは、何だろうな？ 目を閉じてみる。そして苦痛を感じて、やがて幸せを得るための原動力にしろ。お前にとっての奇跡を掴め。

誰にだってある、ほんの一握りの奇跡を掴むための夢が、本当に一握りの確率で、そこに点滅をしているはずだ。さあ、宇宙の遙か向こう側にいくんだ。ゆっくりでもいい。座り込んでもいい。後ろに振り向いてもいい。さあ、扉の中に踏み入れ。合言葉は、わかっているな？』

男はまだ混乱している。何が何だかわからなくて、全てを把握することはできていない。目の前の扉の先は暗闇に包まれているのだから、進むのにも勇気がある。だが男は、行こう、と決意したのには理由があり、それは己の脳内に響く声の言うことを信じてみることにした、ということだった。

『地獄』に踏み入ってから何度も頭の中に響いてきたこの、やけに格好良い言葉を放つ正体を明かさな存在は、怪しいことこの上無くて何時裏切られてもおかしくはないはずなのに、しかし男は信

じてみようと思った。己の中で何度も言葉を繰り返してきたその存在を、信じてみることにしたのだ。

だから男は、少し気恥ずかしくもあったが、しかし叫ぼうと思ったのだ。二人の思い出の一部にある合言葉を叫んでから、彼は扉の中へと進む。

そう、合言葉は

「Miracle jumper」

合言葉に呼応するかのようにして、男の前方に広がっていた暗闇の中に、うつすらと薄い、道らしきものが浮かび上がった。

『進め』『ああ』

ずつ と鳴り 止むことのなかった 花火の 音はもう聞こえない。一度だけ 手首に装着 している腕 時計

計 の『地獄』 を眺めて から、男は一歩を踏み出 して みる。

歩け ば歩くほど 崩壊 していき、唐突に終わる うと する夢の 中をひ たすらに、向って いく。

本 当に 声を信じて 良いものか？ どこにむかっているのか？ 奇跡 など、 その道に あるものなのか。

男 の 信じる 気持ち は 歩いていく 途中でゆったりと崩壊をはじめている。 危ない かも しれない、 やばい かもつしめない。 そう 感じた が、 道はとにかく 伸び 続けている。 だから、 歩き 続けるし

か ない もう とつくに 男の現実 も 夢も 崩壊 をはじめ ている のだから。 もう生きている のかも 死んでいるのか も 曖昧 な のだから。 ただ 行くしかない。ただ 行く かな い ので あ る。

少年と少女

その少女は世間一般の中でキモチワルイと評される人間で、ろくな生活を送れておらず、自分の好き勝手に振舞うことなど一人の時にしか出来なくて、それ以外の時にはそのキモチワルイという他者からの評価が常に付きまとうせいか、俯いて生きていた。時には、いじめを受けた。

そんな少女の隣には幼い頃から知り合っている一人の少年がいて、つまり二人は幼馴染に近い存在であるから、お互いのことを良く知っていた。じゃあ少年が少女の良き理解者だったかと言えばそういうことは決してなく、少年も少女のことをキモチワルイと思うことはあつたし、また本人の目の前でキモチワルイと言い放つことも度々。だから少女は幼い頃から、自らがキモチワルイ存在であると知っていた。

「君を見ているといつも、不快な気持ちになつてどうしようもなくなる」

公園で少年と遊んでいる途中にそんなことを言われた少女は、ふと悟る。そうか、不快なことを感じさせてしまう素質を持っている人間が私なのだ、と。滑り台から滑り落ちながら少女は、絶望の海に放り込まれて足元から頭頂部まで冷え切つて滅亡するような気持ちになつたので、滑り台から降りた時にはもはや放心していた。

そして滑稽な走り方で、公園を後にして、家に帰った。しばらくは布団の中で、毛布にかぶさつたまま彼女は静まり返り、鳥のカーカーうるさい声や焼き芋販売の声を耳に入れ込んでいた。だがやがて堰を切るようにして泣き出し、うわああん、うわああん、と全力で彼女は泣いてティッシュが一箱無くなるくらいの勢いだったので、そのせいで疲労した彼女はやがて眠りに落ちていき、その日は夕飯を食べることさえしなかったのだ。で、その日以来彼女は決意をして、何を決意したかというと他人を不快な気持ちにさせないよう

に努力しようと決意したのであった。

ただ彼女がいくら努力しようとも、どうにもキモチワルイ部分は良くならないらしかった。彼女の挙動や風貌、性格、どれに至っても圧倒的にキモチワルイらしいので、ある程度の努力などほとんど効果無しと同様ということで、結局、彼女の努力は水の泡に等しかった。だから彼女はすぐに努力するのをやめた。少年に「キモチワルイ」と言われても、「それは仕方が無いことだよ」という言葉を返すだけになったのだった。

小学生まではその生き方でも充分、少女は毎日を過ごしていった。少年は何だかんだいって一緒にいてくれたから一人ぼっちじゃなかったし、みんなからキモチワルイと言われても、何度も言われれば慣れが感覚が強まるので問題はほとんど無かった。「仕方が無いことだよ」という便利な文句も覚えたことも、少女にとっては一つのプラス要因だったのだろう。

しかし中学生ともなると人間というのは小学生の時よりも複雑化するものであり、つまりどういうことかということ、男根が大きくなり乳房が大きくなり身長が大きくなり体重が大きくなり態度が大きくなり悩みが大きくなり人間らしさが大きくなり、という風に様々なことが巨大化していく。子供という繭から脱却して大人という存在により近づくのである。

よってそこで形成される社会は小学生の時よりもシビアであることが多い。大人というのはシビアなものであるから、それに近づくということはすなわち、シビア成分が増えるに等しい。そんな小学生の時と相対的に見てシビア空間となっている中学生ライフにて、少女は一体どんな目に遭ってしまうというのか。勿論、そう、「キモチワルイ」という理由で、他者が己の身を守るための道具として利用されたのである。弱肉強食ということで、強い者が弱い者を食らうというのは社会でしばしば見受けられることだが、そういう社会の一片として少女の存在は強い者に虐げられ、見下されたのである。

それに加わって彼女の生活に大きな変化が生じる。家庭が崩壊し、両親が離婚を決意。母が家から出て行ってしまい、少女は家事を担当することになったのだ。今までは食事も洗濯も掃除も大概は母がやっていたことを、少女は早起きしてやらなければならなかったし、学校から帰ってきてからも、自分のやりたいことに時間を割くことはあまりできず、勉強だつて小学校の時より難しくなっている。

そして少女にとってショックだったのは、また同時に決定的だったのは、中学生になってから少年が自分のことを明らかに避けるようになったことだ。自分のことを「キモチワルイ」と平然と言つてのける少年という存在だったが、不思議なことに彼女にとって少年は必要な存在だった。その理由が彼女自身にはよく判然としていないくて、それが友情なのか、それとも恋なのか、その判断さえも付かなかった。が、とにかく少女には少年が必要だったのだ。それなのに少年は少女から身を遠ざけたということは少女に決定的な消耗を与えた。疲労の中に癒しが無ければ疲労は深まって頭痛や眩暈を引き起こさせるだろう。精神を不調にさせるだろう。だから彼女には自らの精神を自らのやり方によつて防衛する必要がある。そしてその手法は、自己愛的な。

(もしかすると…私のキモチワルサは……)

疲れと鬱屈が入り混じっている夜の、入り込んでいる布団の中でふと閃いた発想が、じわじわと胸内から競り上がり、膨張し、パンパンに膨れ上がった後に弾け飛んで、キラキラとした粒子を彼女の心の中に撒き散らした。鈍さを抱えていた脳味噌の中に、美味なる液体が流し込まれるような心地よさが満ち満ちて、彼女はその感動のままに布団から上半身を起こすと、ニヤニヤと奇妙に頬を引きつらせる。そして、

「才能だつたんだ」

自分に言い聞かせるようにして、或いは、何かを確信するかのようにして、才能という言葉を何度も口にする。私は特別だつたんだ、とも言つた。朝日が、昇り上がる。

次の日から彼女は凄まじかった。踊りながら学校に向かい、授業中にはぶつぶつと独り言を言い、友達と話す時にはしきりに自分の考えていることを話し、他人の言うことにも積極的に耳を傾けるが、必ず、「それわかるよ」という風に述べてから自らの見解を話すと、いうよくわからないことを行い、その大体は彼女の独断と偏見から成り立つ意見だった。彼女を見下していた連中、利用していた連中は、そのあまりの凄まじいエネルギーに恐怖した。頭が逝っていると気が付く。よって連中は彼女周辺にはなるべく近寄らないようになり、テレビに出ているタレントであるように近くであるように遠くにいるような存在として彼女を認知し、少なくとも身近な距離から彼女を利用することは避けた。彼女のような危険人物と身近に接していたら、想像を絶する被害をどこかで受けるのではないかと誰もが悟ったからである。学校に来なくなってくれればいいのになんな危なそうな奴、と考える者すらいた。もともと、中学生の面々は皆、思春期の感性を持つているので、一人でいることはしんどいことだろう、と理解しているので、一人で皆からの好奇の視線を浴びている彼女はいずれ学校に来なくなるのではなかるうかと勘繰っていた。じゃあ彼女自身はどう考えていたのか。

彼女は孤立化したことよって、やっぱり私は特別でスペシャルつまり世界の中心だったんだ、と確信した。生まれついた瞬間から何をやってみてもキモチワルイと思われる才能を携えている自分は、とつても特別な存在であり、そんな自分が孤立化して好奇なる注目を浴びることはすなわち当然のことだ、と認識したのである。だから彼女は辛いどころか幸福だった。疲れが溜まることなどほとんど皆無で、日々、充実した心でイカレテイル。それが良いことなのか悪いことなのかなんて考えるまでも無く、彼女は自分自身という存在に酔いしれ、その世界で酩酊する。

「……わたし、しあわせ……」教室の隅っこで、曇り空を見上げながら呟かれる彼女の言葉は本当に幸せそうに響いてもいるが、また同時に一種の空しさ、狂いということの恐ろしさも周囲に感じさせ

るものであり、中学生たちは薄ら寒いものをそこに見出す。

ああ、小さな中学校の中でその薄ら寒いものを引き起こそうとする行きすぎた自己愛を抱えた彼女の目立つこと！だからそれに関係のあるもの達は、その自己愛の塊が引き起こそうとする渦に巻き込まれてぐるぐると回転し、その身を貶められる。それは理不尽なことであり、子供がまだ幼稚な精神性を携えている部分があるからこそ、回転させられるモノは身を貶められる。小さなことから始まる亀裂は、やがて二つの生命が血を地に撒き散らす結果になる！

気のおかしくなっている少女を傍目で眺めてからククと苦笑し、少年と少女が幼馴染であることを知っている一人の中学生はふと思いついたようにして、隣に座っている少年に向けて言葉を放る。

「ひどいよなお前。見捨てたよね。お前がアレを見捨てたからアレはああなつたよね。お前、最低だよね」

少年はひどく驚いた。急にそんなことを言われるとは夢にも思っていない。だから言葉に詰まって何も言うことは出来ない。教室は沈黙している。

だが少年の驚きはそれに留まらない。教室の沈黙を破るために、一人の中学生から何かが伝播したのだろうか違う中学生が立ち上がり、少年を非難した。

「可哀想だよ！ あなたが悪いんだよ！ あなたはあまりにも冷酷だ」

「死ねよお前。死んで報いるよ」

「そうだ死ね。死んじまえよ！ 死んじまえばいいんだ」

その非難に中身は無いが負の感情の滾り具合は凄まじく、教室全体を一瞬にして覆いつくしていく。恐怖感、不安感、圧迫感、退屈？ 教室内で密かに沈殿していた汚泥物が浮上して、一人の少年に対する全力の非難に変わっていき、先生ですら彼を非難した。「死ね！」

行き場を探していた何かが標的を見つけたと言わんばかりに、一斉に三十人程が詰め込まれている教室内は尋常ならざる熱気を発し

て、一人の少年という対象に向うことで、集束した悪意と化した。それが少年にグサツ、と音をたてて突き刺さる。グサツと突き刺さったのだ。

「死：死にたくない……いやだ……」少年は教室中から向ってくる悪意から逃れたく思い、教室を飛び出して廊下に出た。すると、赤い振袖を身に纏っている、髪型がおかつぱの女の子が、廊下の端の方に佇んでいるのに気が付いた。少年はそれを錯覚かと思ったが、目を凝らせばその女の子がにっこりと微笑んでいることすらわかる。教室内からは悪意の罵倒が止む気配が無い。少年は導かれるようにして廊下を走り、その女の子の方へと向う。あれは何だろうか、と考え、思い当たるのは座敷わらし。「待てよ！」走っている途中で座敷わらしは階段の方へと消えてしまった。少年が廊下を渡り終えて階段のところに辿り着いた時には、もう影も形も見当たらないために、上に行ったのか下に行ったのかわからない。だが少年は迷わずに上を選んだ。そちらに座敷わらしが向ったに違いないという確信に近いひらめきみたいなのがあつて、それは揺らくことが無いので、少年は登っていく。ぐるぐるぐるぐるすると登っていく。

なぜか螺旋状になっている階段を最上まで登り詰めると屋上へと続く扉があつて、南京錠は取り外されていた。普段は足を踏み入れることの出来ない屋上に入ることが出来ると考えると、どきどきして、やってはいけないことをやる引け目があつたが、しかし少年は踏み入った。教室から突然自分に向ってきた罵倒から逃れたかつただけだというのに何故屋上に来てしまったのか、少年にはもうわからなかつたが、彼は曇り空の下へと飛び出た。そして、鉄筋コンクリートの屋上を踏みしめながら、先ほど消えた、赤い振袖の座敷わらしの姿を探す。そして見つけた。

座敷わらしは、一步後ろに下がれば三階立ての校舎から落下できしてしまうような危険な位置で、両手を広げて、十字架に張りつけられているような体勢を作り、少年に向つて微笑んでいる。

「危ないんじゃないか」言いながら、少年は座敷わらしの方へとゆ

つくり近づく。が、

「危ないのはあなたの方です」と無関心な声で告げられた。そしてその瞬間に少年の視界のほぼ真下に広がったのは少年の視界から一望することの出来るほどに小さく見える校庭。「ひっ」さっきまで座敷わらしが立っていたはずの場所に少年は立っていた。彼はすぐ後ろにある柵に手探りで捕まると、今日一日に突然生じた様々な不幸と現在の状況を嘆き、大声で喚いた。

「ふざけんなよ、まじなんなんだよ、考えらんねえからこれ本気で！　なんで俺がこんな目にあわなきゃいけないの！？　本当にわけわかんないからこれえ！」足をがくがく震わせながら怯える少年に、背後から声が掛けられる。

「赤い童子は凶事の前触れ。私を見た人は不幸になるんです。あなたが特別悪いとか、そういうことじゃなくて、私がああなたの側にいたからあなたは悪意を浴びてしまったんだと思います。ごめんなさい、ごめんなさい」抑揚の無い声で、坦々と述べられた。

だが少年はそれを聞いている場合ではなかった。信じられないことだったが、百人くらいの生徒たち全員が、何時の間にか集まっていて、遥か下方から少年を見上げて指をさしたり嘲笑ったりしていたから。少年に聞こえる声たちは、無慈悲。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・跳べよ、お前」

少年は狂氣的に頬を引きつらせる他なかったので、それを浮かべた。校庭で自分を見上げている人間たち全員に己の死を願われることがこんなにも恐ろしいこととは、わからなかったし、もう二度と再起は不能だとしか思えない。なんでこんなことになったのかわからない。だけど取り返しが付かないことだけわかる。座敷わらしのせいらしいけど、だったら尚更。

「しょうがないな。一回だけだよ」

頬を引きつらせたまま、少年は柵から手を離して、「ほっ」という掛け声みたいなものを出しながら飛び降りた。ひゅう、と落ちて、

ぐしゃと潰れる。潰れた彼は校庭に真つ赤な花を咲かした。そんな花の周囲に集まった中学生たちは、持っていた鉛筆とボールペンの先を、少年の痙攣している身体に何度も突き刺した。突き刺されすぎるとあまりに、何度も飛び跳ねる彼の身体は、もう血が全て出尽くしてしまい、ふにゃふにゃになって皺くちゃの皮膚の塊。骨も内臓も抜き取られて、校庭の隅っこに捨てられた。中学生たちはひたすらに突き刺していた。ボールペンと鉛筆で。

陽が落ちるまでずっと。

少女はその光景をずっと後ろから眺めていた。少年が少年としての身体を失いもみくちゃにされて少年としての姿を失っていく姿と、今まで普通に過ごしていた皆が何かを爆発させたかのように豹変して筆記用具で死体をいじめる姿。あり得ない、あり得ない、と繰り返しながら彼女は頭を抱えて、その場でうずくまった。少女は自己愛の世界に引き籠もったが、まだ少女にとって少年は大切な存在なのは変わっていない。それが今屋上から飛び降りて、ぐちゃぐちゃに。

少女は自らの幸せな世界が音を経て崩れ始める音を、間近で耳にしている、その音はカーン、カーンというトンカチが打ち付けられるような音。少女は、「あ、あ、あ」とカーン、カーンという音が鳴る度に呻き、秒読みで、自分がせつかく作り上げることに成功した自己愛の世界が消失されてしまうことを、わかった。そしてそれはほぼ同時に、自分が再び他者によって利用されてしまう以前の日々を復活させることでもあると気が付く。

少女はパニックになった。その場で、発狂したかのように、「うわああ！」と叫ぶと曇り空を見上げた。もう陽は落ちていて、月が三日月となって彼女を嘲笑っている。彼女は憎々しげに夜空を見上げ続けて、血走った眼で、少年が殺されたことを憎む。何を憎めばいいのかよくわからない。「跳べよ」と集団で暴言を吐いた連中が

悪いのか、飛び降りた少年が悪いのか、人間という存在があるのが悪いのか、そもそも宇宙があるのが悪いのか。だけど、少女はそのどれもが悪くはないのだろうとわかっている。彼女は崩壊寸前の築き上げてきた世界の、カーン、カーンという音が聞こえる世界の中で、何が少年を殺したのか理解するのは簡単だ。だから彼女はもう夜空を見上げるのはやめて、校舎に入ると、明かりがついていないせいで薄気味の悪い廊下を、非常灯を頼りにして走り抜けていき、螺旋階段をぐるぐるすると登りあがる。そして屋上に飛び出すと、少年が飛び降りた位置と同じとこまで向かい、十字架に張りつけられているような姿勢をわざと作ってみたりしてから、「落ちなくちゃ！」と叫び、屋上から飛び降りた。ひゅう、と落ちて、ぐしやと潰れない。何故か、彼女は少年と同じように落ちたはずなのに、校庭に真つ赤な花を咲かすこともなかったし内臓が潰れることもなかった。だから彼女は、ドン引きしたような空気になっている周囲の視線に気まずさを感じながらも、泣くしかなかった。涙腺が緩むのを堪えることが出来なかった。「死にたかったのに！ 私が悪いのに！」彼女は泣きながら立ち上がると、中学生の群れを掻き分けて校庭を縦に横断すると学校の門をくぐった。そして一度も立ち止まることなく、会社帰りのせいだろうか車が多い街中をひた走り、明かりのついていない自宅に舞い戻って、台所に駆け寄ると包丁を握り締めて、そして風呂場に向ってから躊躇無く自らの首筋を切ってみせた。首筋から血がぷしゅーと噴水のように飛び出て、浴槽や風呂場の壁があつという間に血に染まっていくのを綺麗だと思いつつ、少女は「キモチワルいなあ」と呟く。そして倒れた。

薄れて、消えてしまいそうな意識の中で、少女は真つ赤な振袖を着た座敷わらしが自分の隣に立っていることに気が付く。にっこりと微笑んでいる座敷わらし。

「あなたが悪いんじゃない。悪いのはね、私なんだよ。だからあなたが死ぬことはなかったのに」

そんなことを言われても、とも思ったが、ふと彼女は昔、祖父か

祖母だかに聞いた話の中に赤い座敷わらしを見た奴はひどい目に会うんだというものがあつたのを思い出す。だから彼女は納得した。なるほど、少年が死んだのも、私がキモチワルイと言われ続けたのも、きつと全てこの座敷わらしがいたからなのだ、と。

「……じゃ、あ、あなた、が悪いん、だったら、私に、あなたを殺させて……。そして、その後にあな、たは私、の息の根を、止めてよ。……悪い座敷わらし……し……だ……つ……た……ら……で……き……る……で……し……よ……人……間……じゃ、ない……んだもの……。」

赤い座敷わらしは、「いいですよ」と何てことは無いことであるかのように、簡単に了承してみせると、タイルの床に転がってしまっていた包丁を少女に握らせてみせた。そして座敷わらしは、彼女の身体の上に細い身体を横たわせるといふ奇妙な格好になると、

「ほら、これで包丁を上から私の背中に突き刺せば、それが貫通してあなたにも突き刺さります。私、頭いいですよ。そう思いませんか？ とても役に立っていると、思いませんか？」

と述べてから、笑うのだった。面白そうに笑うのだった。

少女は包丁を両手で握り締めると向きを逆にして、座敷わらしと自らの方角に刃を向けた。そして躊躇無く、それでいて力を込めて、包丁をまずは座敷わらしの背中に突き刺し、そしてやつこいその身体を貫通させて、自らの腹部にも包丁を突き立てた。

「……死………ぬ………」少女はほとんどかすれてしまっているその一言だけ述べてから数分後には息を絶やした。

息絶えた後に少女は幽霊になり、足は無かったが、それのおかげで地球の空を踊りまわるようにして飛び回ることが出来て嬉しかった。彼女は自分の身体から抜け出て魂になったから、もう自分がキモチワルイ存在ではなくなったのではないかと考えてみると舞い上がるような気分がして、雲の上を滑空しながら歌を歌ったりした。

これ　で少　年と　出　会　えたら　一　緒　に手

繋い　で踊りま　わる　ことも出　来るか　もしれないのに、と
期　待をしなが　ら海を渡　り大地　を超え街　を行き

過ぎる。彼女は自由だった。そして少年
と出会えるその瞬間がどれだけ素晴らし
いものになるかを想像して、その時をひ
たすらに待った。
いつまでも少年は、見つからない。

石像

隆汰は大きな樹の下で果実に噛み付く。おいしい真つ赤な林檎。噛み付いた所だけ黄色になる。果実の中で貯まっていた蜜が露わになり、とろけるように果実の皮をつたう。

「甘いな、とても」食べ終わると、真横に置いてあるゴミ箱に、右手で林檎の芯を捨てた。

光が葉と葉の隙間からこぼれ落ちていて、隆汰やゴミ箱に明と暗を斑に作っているその場所にて、彼はやりきれない気持ちで二つの生命が散った理由を見つけようと思いついたが、すぐに諦めた。主観的に見る正しい理由ならあっても、完璧にこれだと言い切れる理由などありはしないのだと、もうそんなことは言うまでもないじゃないか、と。

「大人とはなんぞや、なんて答えは大人になってもわからない。わからないっていうこと自体が大人ってことなのかな、なんて餓鬼な結論。ああ、ああ、なさけない。大人がシビアなんて誰が言った。シビアなのは子供も変わらないじゃない。人間自体がシビアなんだ。生物自体が、シビアなんだ、なあそうだろう。なんつってね、考えてみたりしても、頭が疲れてしまっし辛気臭くなるばかりなんだよねえ。どう思う？」

だがしばらく無言のまま返事を待っても、脳内から言葉が発せられることはなかった。クリスタルキャッスルの前にいた時には意気揚々と喋っていたというのに。

「おい。暇だから、話相手にでもなっってくれよ。あんな夢見せられて落ち込んでんの。ってなわけで答えてくれよー、何でもいいからさ」返事は無い。

太陽が出ている春の陽気の下で世界は無音に近い静けさで、樹の、風を頼りに葉をざわめかせる音が騒がしく感じられるほどで。そして、耳を澄ませば遠くから、ハーモニカを吹いている音。

隆汰は樹の下で座ったまま、葉のざわめきとホルモンカが混ざり合いはしない空気の中でむずむずと落ち着かず、だから、目を閉じて落ち着こうとする。

まぶたの裏側にゆっくりと浮かび上がってくるのは、さっき見たばかりの鮮血の光景。ボールペンと鉛筆が繰り返し振り下ろされ、血が周囲に撒き散らされていた映像。だから、まぶたを閉じていても、落ち着くことは出来なかった。

まぶたを開いて、ホルモンカの音を聞くために耳を澄ます。俺は何がしたいのだろう、と思う。何も思いつかない。だから、降り注ぐ陽光に頭のとっぺんを暖められることでとろけてしまいたい。

声に導かれていた時、彼女に会いに行こうと思った。彼女との思出を夢の中で思い起こされて会いに行こうと思った。そこに全てが、結論が、在るのだと感じたから。たしかに彼女が必要なのだと心底から思っている、あの時に思ったのは、結局ただの錯覚だったのかもしれない。人は脳味噌に支配されているのだから脳味噌が誤作動を起こせば何かの勘違いを生じさせるのは当たり前だ。つまりそういうこと。今はもうとろけてしまいたい。ここで何時までも体育座りのままに日向ぼっこをして、ゆっくりと溶けていけば、もう終わりだけど、何も出来ないでくの坊になってしまっただけから、溶けて形を失わせれば、ナサケナクは無くなるかもしれない。でもナサケナイのこの何がそんなに屈辱だろうか。別に、いいじゃないか。もう俺はとっくの昔に、ダメになっている。阿呆じゃないの、何が *Miracle jump* だ。頭悪いんじゃないのか。頭ぼーっとしてんじゃないのか。脳味噌検査してもらった方がいいんじゃないのか。ナサケナイ。本当にナサケナイか？俺はもう愛想笑いを浮かべて現状維持するのも、目標のためにひた向きにがむしゃらに突っ込むのも、かといって自暴自棄になつて死へとわざと向っていくのも、他者を憎むことを原動力にして前を向くことも、思い出に浸って今の辛さを薄れさせて生きていくのも、みんなに見下されて利用されて楽しんでもらう道化のようなことをするのも、

もう、全部嫌だ。最悪だろうが何だろうが奇跡を掴めなからうが、汚かるうがなさけなからうが涎をだらだら垂らそうが孤独になろうが嫌われようが、もう全部嫌だ。嫌になるのも嫌だ。からっぽになりたい。生きてるんだか生きてないんだかわからない最低最悪な形骸と成り果てて他者に何らの影響も与えることのないような無に近い、抜け殻のようなぺらっぺらになって、日向ぼつこの達人として体育座りを極めたい。この日陰で半永久的のような長さでゆったりととろけて、まずは上半身を無くして、最終的に足の爪先まで、太陽に溶かしてもらおうというわけだ。ナサケナイと言ってもいいよ。もう。

「おい、話し相手になってくれよ。からっぽな会話をしよう。ほとんど何も感じないような、無のような、そんな会話をしよう。聞いてるだろ？ 何度でも語りかけてくれたじゃないか。地獄の世界でずっと話しかけてくれたじゃないか。俺は、本当はお前の正体が何だったかほとんどわかってるんだ。お前は、俺だ。お前は俺の中で最後の砦だ。そうだろう？ お前の声に導かれて、歩いていたら」

答えは無い。風が吹き、雲が流れる。何の変哲も無い、ただ見えるだけの雲が通り過ぎる。見えているのに別の世界。

隆汰は思う。俺はあの世界に行きたい。なんら影響の与えないよくな、見えるだけのよくな、あの雲たちが呑気に散歩をしているだけの世界に行きたい、と。声はもう聞こえてこない。ならばきつとこれが正しいのだろうとを感じる。彼女のところに行こうとは思われない。瞼を閉じると浮かんでくる殺戮のシーンも見えてられない。

「無為だ。無意味だ。価値が無い。価値が無いという存在なんて無いはずだけど、無いんだ。声が聞こえてこないということは、これが正しいということだ。日向ぼつこをして溶けていくことが俺という人間の生き方の、答えだ。ほかに何も思いつかない。生物というのは生きていくから常に死なくちゃいけないんだね。だから死が怖いから怯えてしまうんだ。自分が怖いことを他人にすることは安心だから。人間はその生物の中でのトップクラス繁栄だから、生死

をそこまで考えずに生きていけるようになって安泰だ。無だ。無価値だ。無意味だ。なんだかしらんけど、少なくとも、こんな存在はさっさと食われてしまつに違いないはずなのに、日向ぼっこだけしてて生きられるのは人間の繁栄のおかげだね。だから逆に言えば、人間が繁栄しているからこんな有様になつてしまふ俺がいるということなんじゃないのかなあ。そういうわけだから、そういうわけだね。明日も明後日も溶けていこう。雲を眺めてハーマニカの音を聞こう。時には落ち葉に塗れ、時には毛虫を身体に這わせてもいい。ここで、石像。石像じゃないか。さあ、石像。いくぞう。俺は石像となつて独り言をぶつぶつと言いつける。もう何も思いつかない。声無くなつてしまった」

ぐちゃぐちゃなのに何も無い。隆汰は石像となつて時間をやり過ぎし春の太陽が沈んでいくのを無為なる肉体より眺める。誰のせいであんなことになつたのか。自分のせいでこんなことなのか。

ただ言えることは、人間としては無能力になつていてという実感もあるということ。己でわかつているから石像となつている。隆太は、夜になつても、再び昼になつても、樹の下。途中、鳩の糞が頭にかかつたけど、拭い取る気分でもなかつた。そんな日々がずっと続いてきた。ハーマニカの音も、葉のざわめきも、止む事はない。

だけどある日、ハーマニカの音がどんどん大きくなつて来た。葉のざわめきよりも耳障りになり、その音がどんどん間近に迫つて来ているのに、気付かざるを得ない。

そして草原。隆太から見える景色は全部、地面は草原だつたのだけれども、はたして、そこに草原以外のものが地平線より浮かび上がつてきて、近づいている。隆太から見てまだ米粒のように小さいというのに、それがハーマニカを吹いているのだとわかるのは、米粒が豆粒くらいの大きさになるに合わせて音も大きく、耳障りに、変わつていくからであった。その奏でられている旋律は不協和音の組み合わせか何かなのだろうか、不安を煽ろうとしているようだと思ふ。

隆太はその時石像だったので、あまり不安を煽られたりはしなかったが、その向こう側からやってくる豆粒に注目はする。

だが、途中から、石像だった隆太は、石像になるのもう止めて逃げ出そうかな、と気分を変えなくなつた。豆粒からボールくらい大ききになつてきている時に、向こう側からハーモニカを吹いている存在が何であつたか気が付いたので、逃げ出した方がいい気がしたのである。

ボールは真つ赤である。真つ赤なボールはやがて人の形になるのである。

隆太は嫌だなあと感じるのである。嫌だなあと感じてしまう自分にも少し嫌になるのである。

そんなことを考えているから、真つ赤な人が彼の目の前に立つた時にも、体育座りをしているだけで、逃げ出すこともしなかつたのである。

「オホホホホ」

真つ赤な人は吹いていたハーモニカを草原に落とすと、口元から血を垂らすのである。

そして体育座りの隆太を無理矢理にひきずり始めた。

「私の夢を見て、どんな気持ちだった？ 弱者の癖に調子に乗つた朝野隆汰。気分が悪くなつてきているか？ それとも私がひどい目にあつているのを見て喜んだか？」

すこつ、すこつ、と空気入れマシンを動かしながら皮肉な声つきをしているのは大家。そしてその隣には青い振袖を身にまとつてご機嫌な様子のでらー。不機嫌なのは、不機嫌というか最悪な気持ちにされているのは、隆汰。何ゆえに最悪なのか。尻に空気を次々に注入されて妊婦さんのような体にされてしまつては、誰でも最悪な気分になるだろう。

拷問ということだ。そして腹をぶくぶくにされながら隆汰は、手

に持たされた鉄パイプで、十字架に貼り付けられているイエス・キリスト風の男性をばこばこに殴りつけなくてはいけなかった。上半身裸で腰に布切れ一枚だけを纏い、髭は生やし放題で、黒髪は脂ぎっていて天然パーマ気味。まるで浮浪者のような見た目でもあるが、何処か風格があつて魅力がないでもない。そんな人物の剥き出しの上半身を鉄パイプで繰り返し殴りつけて身体をぶくぶくと腫れ上がらせるのは実に痛々しい光景で、惨たらしい。しかしやめられないのは、どうやらてらーの魔術のせいだった。下腹部も妊婦みたいになってぶくぶくではちきれそうな程で、身体を動かすたびにしんどいのに、自らの意志で身体が動かないから鉄パイプを勝手に振り上げ、そして振り下ろしてしまう。しかも生々しく皮を剥いたばかりの鶏肉とか牛肉のように新鮮な赤みという具合の、見事に腫れ上がっている箇所ピンポイントで振り下ろされてしまう。イエス・キリスト風見た目の男は叩かれるたびに苦しそうに呻き、全身から汗のようなものを垂れ流し、時折、血反吐を足元にこぼす。

苦しいのはその男だけではない。隆汰とて苦しい。腹はもう裂けてしまうかと己が勘違いするほどのぶくぶくで、パンパンだ。上着はとうに破れていて、パンツもびちびち。最悪な有様。すこつ、すこつ、と小気味良い音で空気はまだ注入されている。

「ははっ。マジでいい気味。こんなことになるなんて思ってもみなかった？ わけがわからなくなってる？ はは、馬鹿だよね本当。」

結局私とてらーにひどい目に遭わされてんだもんね。ははっ、潰された恨み、お前を風船みたいに膨らませて破裂させることで晴らす。恍惚とした表情を浮かべながら、空気入れマシンのハンドルを上下に動かし、隆汰の苦しみをより深める。ハンドルを押しした時も引いた時も空気が発されるダブルアクションポンプ。

ついに、履いていたパンツも弾け飛び、下着も破れ落ちた。隆汰はもはや風船。まるーい形となつてしまい、鉄パイプも地面に落ち、空気入れマシーンとホースを通して接続していなかったら空中にぶかぶかと浮かんでいつて破裂してしまうだろう姿となつた。あ

あ、ああ、ああ、と自然ともれ出てしまうようなりズミカルな、わけのわからなくなっている声を発している彼の有様を眺めている大家は、「さあこのホースをちぎり取れば空気の漏れるような音と共に、あなたはぶしゅーという激しい音を発して空に消えていきますよお！」と述べてから自分の身体を自分で抱きしめるような仕草をして地団駄のようなものを踏んだ。大家のテンションは恐ろしく上昇している。

地団駄を踏み終わると、大家の隣で地面にお絵描きみたいなのをしているてらーの方へ身体を向けて、「いいよねえ。こいつ飛ばしちゃっていいよねえ」と狂ったような抑揚で言ってみせる。てらーは戸惑ったような表情を一瞬見せたが、笑顔を作る。「もちろんです。大家さまは幸せですよね！とても！」大家はホースを切るための缺を地面から拾い取り、笑顔でチヨキチヨキと音を鳴らすことで返事とすると、武者震い。そして咆哮。

「私の希望を踏みにじった罪を汚らしい屁の音を撒き散らしながら心で懺悔しろ！」

大家の左手に力が込められて、開いていた二枚の刃が閉じ交錯する。ホースは途中で断絶されるとほぼ同時に空気を放出させた。汚らしい、ぶうううううという音は確かに屁に近いものであり臭いさえ持っていた。風船隆汰はそれをすごい勢いで発することによってその場から弾けるようにして飛び出し、山のように放物線を描いたり渦のようにぐるぐると回転したりしながら、宙へ舞い上がっていき、やがて蠅のように小さな黒点になり、最終的には、どこにも見当たらなくなった。宙の果てに消えた。

空を横切る飛行機を見送るような格好でその様を見ていた大家とてらーは、やがて顔を見合わせると、二人で示し合わせるようにして笑った。決めポーズを作ってから、

「「やったね」「」

とはしゃぐ。幸せそうに。

花びらの山

やがて落ち着いた大家は、冷静な口調。

「次はこいつか。何だか面倒臭くなってきたが、まあいい。……しかし驚くな。内側に潜むもう一人の自分というものが人間の中にいるというのは奇妙だ。しかもこの男、朝野隆太とはまるで別人に見えるがね」相変わらずの血塗れな身体の大家は、あるような無いようなわからない眼を何回かしばたかせながら、十字架に貼り付けられている男を見る。

『殺せ。こうなってしまうては仕方が無い。どうにでもしてくれたい』

彼は血を吐いて、それが大家に降りかかる。大家は嬉しそうに両手を広げて、血を浴びる。

彼が血を吐かなくなると、腫れ上がっている部分を殴りつける。再び吐かれる血を大家は浴びては、またも恍惚となる。

「ああそうさせてもらうよ……。八つ裂きにしてから尻にポンプを突っ込んで、お前は十字架にはりつけられたまま宙にぶっ飛んでいけばいい。とつても滑稽でいいじゃないか！」

ダブルアクションポンプが火を噴くことによって、イエス・キリスト風の男はすぐさま膨らみはじめた。下腹部からはじまり、手足も、胴、首元、顔面すらも、フグのように膨張する。

『うああ、ああ、ああ』地面に埋まっていた十字架が、風船になった男の浮かび上がる力に引っ張られて宙に抜け出る。血が口元から溢れるように飛び出ていって、空気だけが詰まっているような有様になる。先ほど飛んだ隆太と同じく、空気入れマシーンと繋がっているからまだ飛んで行かないものの、今や大家は鉄の音をちよきちよきと鳴らしているので、彼が飛んでいくのも時間の問題だ。

「哀れな様。人間の中に潜んでいるもう一人の自分なんて、格好良くも聞こえるが、こんなザマになったら格好良くもなんともないな。

消え去れよ。あの人に会えないならもう全部消えちまえばいいんだ！　こんな世界なんてはじめから無かったことにしちまえばいいんだ！　この世から消えろ！」

大家が思い出したのは昔の記憶。いつもキモチワルイと言われた。言われなくても心のどこかで思われていた。だけど構わなかった。自分の世界にいればある程度心を落ち着かせることが出来るようになっていたから。だけど少年のことが大切だったから、結局そういうことだったから、少年がいなくなったあの日から自暴自棄の日々を送るしかなかった。だから少年を殺した現実が、他の者どもが、憎い。憎くて憎くて仕方が無くて、そいつらの血をいくら奪い取っても憎しみは絶えることはなかった。

今、大家の怒りは、目の前に貼り付けられている存在に集束している。細かい理由など考えるまでもなく、目の前の他者が憎い。ダブルアクションポンプで空気を入れれば入れるほどそれが増幅し、やがて溢れるように感情に変わって、何が何だかわからない混乱になりそうになる。泣いてどうする、と大家は自分自身に訴えるが、しかし涙が流れてしまうのだった。

大家は泣きながら。泣きながら、ホースに鋏をあてがい、そしてちぎろうとした。

だが、ちぎらない。切らない。

「なんだこれは」

いや、切らないでは無い。切れない。大家は手をこんにやくのように小刻みに振動させるだけで、刃を交錯させることが、出来ない。彼女は自分でも何か意を得ていないような、困惑しているような表情で、自らが手にしている鋏をじっと見つめている。彼女は鋏の刃を動かそうとしている。だが、動かなかった。

「なぜだ」

「あれだ」

ぶくぶくに膨らんでいたはずの男が口を開いた。ちっとも苦しくなさそうに。膨らみが元通りになっていて、イエス・キリスト風の

「何をやったんだ、大家の下僕。……まさかこんな展開になるとはな。俺の膨らみを元通りにして見せたのもお前か？」

男はせせら笑いながらてらーに尋ねる。このような状況で自らの主を裏切るとは何たる外道か、と感じたのである。

てらーは男の言葉をシカトする。相づちすらも打たずに、何やら次の魔方陣を描き始めた。無視をされたことであまり良い気持ちはしなかった男だったが、そんなことは気にせず、とりあえず十字架から剥がしてもらおうと思った。だからてらーに様々、声を掛けた。だが、どんなに言葉を掛けてみても、例えば挑発的な言葉や、世間話的なことや、哲学的なこと。様々な種類でアプローチをかけたみたが、てらーは魔方陣から一時も目を離さないのだった。男はしばらくすると諦める他無いと気が付かされたので、ため息をついてから、目を閉じて口も閉じた。

そしてもう一度、青白い光が走った。てらーの魔方陣が完成したのでろう。

数秒後に、男の手足を十字架に貼り付けておくためにあつた縄がほどけて、結果、男を解放した。自由にしてみせた。男はうつ伏せの姿勢、顔面直撃コースで地面に倒れてしまつて、鼻先を強打。しばらく悶絶していたが、ふらつきながら立ち上がる。

立ち上がった彼は、大家と同じように目がどこか遠くへと泳いでいた。姿勢が見るからにだらけていて、しかも腰布もはだけてしまつているから、みつともない姿。布一枚も装着していないのでは、変態だと思われるても仕方が無い。

だが、大家は男の目の前にまで近づいた。虚ろな瞳で。光が入っていない、目力の無い、無気力の瞳で男を見上げる。

男も同様。虚無の瞳で、暗闇に抱擁されているような瞳で、目力が無いままに、無気力の瞳で大家を見下ろす。

そんな二人の周囲三百六十度を、青い振袖のてらーが花びらを撒き散らしながら駆け回っている。蛙飛びではなく、人間の子供らしい走り方で、色鮮やかな様々な花片を籠から取り出しては賑やかに

放り投げ、二人の周囲を華やかにする。うふふ、はは、と笑っている。

「何も考えないで幸せになれば！ 何もわからなくても幸せであれば！ 私は幸せを運ぶおせっかいな座敷わらし！ 大家様よ螺旋階段のように天へぐるぐると回れ！ 或いはDNAの形と同じように！ 幸福の舞を踊りながら私は、あなたが飛んでいくのを見送りましょう！ さようなら、大家様！ お元気でいてください。何時までもお元気でいてください」

花びらがどんどん埋め尽くされていく。山になっていく。籠からは何時になっても花が消えることはなくて、ずっと色とりどりが投げ出されていき、積もっていく。

男と大家はやがて花びらに包まれて、一つの彩り鮮やかな山となった。二人の姿はもう影も形も見えなくなる程に、花びらが積もり、てらーが快活に何かを叫ぶごとに、花びらの山は宙に浮かび上がっていく。軌跡を描きながら、花びらの山は大空へと舞った！

「ああ、花びらの山よ！ そしてその軌跡よ！ 飛行機が雲を作るがごとく、美しい風景を描き出したまえ！ 人にふんわりとした心地よさを与えるために、今、大空に弧を描き、幸せとしての一片となれ！ おお、花びらの山よ！ どこまでも、どこまでも！」

まるで花びらの山はロケットのように飛翔していく。てらーはそれが飛び立った後も、籠から花びらを撒き散らし、そして踊っていた。門出を祝うように。幸せを願うように！

彼女は青い振袖を身に纏った！だから何がもつとも幸せを作り出すのか、彼女はもう知っている！だから彼女は自分が座敷わらしだと認めることが出来ているのだろう！だから彼女はこんなにも楽しそうに、嬉しそうに、踊りまわっているのだろう！

やがて弧を描きながら旅立ったロケットの、その軌跡には、花びらがきらきらと残っている。てらーはそれを眺めては満足をして、また嬉しそうに笑う！

花びらの虹！花びらの山はもう見えなくなってしまったが、花び

らの虹は何時までもそこに残っているかのようになり、きらきらと太陽の光を浴びて、乱反射している。様々な色で！七色と表現したくなる鮮やかさを！

やがて踊り終えたてらーは、地に落ちている花びらが風に吹かれていくのを眺めながら、しばし感涙のような、悲しんでいるかのようない、判別のつかない様相。でも彼女は自分が座敷わらしだとわかつているから、次に何をするのか、彼女自身がよくわかっている。

彼女はとても幸せだ。人間に幸せを与えられることが！だから大家に幸せになつてもらつたために、無理矢理な幸せを与えた。それはもしかしたら歪んだ幸せだったかもしれない。彼女がしたことはイエス・キリスト風見た目の男を、大家の待ち人であると、大家に錯覚させたというだけだから。その錯覚がやがて消えてなくなつてしまふことを考えれば、所詮は気休めのようなもの。

だけれど、せめて一時のまどろみを。少しだけの幸福を。てらーは、大家に与えたかった。

大家が大家の待ち人に出会うことは無いと知ってしまったから。『地獄』には大家の待ち人はいないとわかつたから。

だからせめてもの幸福を。わずかだとしても、大家が花びらの山の中で安眠を得られるために。

完全な幸せを与えることが出来なかつたことが心残りではあつたが、大家の待ち人が『地獄』にいないのだからどうしようもない。

てらーは青い振袖を身に纏つた瞬間に、そのことをわかつた。「全て上手くいけばなあ」

ぼやきながら草原を歩き始めた。籠から花びらを取り出し、それを風に乗らせることを楽しんだりしながら。青い振袖を身に纏つていられることを心から喜びながら。

最終的には、彼女自身も風に乗つた。自らの小さな身体を花びらと一緒に大気中で踊らせ、何処に行くのか当てもないようにふわふわと。時には、追い風に急かされながら。或いは、向かい風にいく手を阻まれながら。

ふたたび

空気中に空気を吐き出しながら、霧に近い大気を切り抜ける。臭いを撒き散らし、無関心な気分でやる気もなさに。すでに空気はほとんど無くなっていて、萎みはじめている。

皺くちな皮に成り果てる。薄っぺらく。

紙っぺらのように風に乗って大空を永遠に飛び続けるなんてことはなくて、水気を含んでいて湿っているから、空気が全て抜けた後にはそのまま地上へと落っこちていき、草原の草むらに囲われる様となった。皮になったそれを住処にしようとする、小さな虫たち、毛嫌いしている虫、構わず住み着こうとするので、困る。ああ、嫌だ嫌だ、嫌だなあ、とずっと思い続けて不快な気持ちに狂いに変わるのを皮はおさえこんでいた。

風に吹かれてそよびいてくる草の先っぽが、時折、皮のことを、くすぐってくる。皮だけの自分だから、直接神経に触られてるみたいで刺激が強い。それが四方八方から風が吹くたびにやってくるのは、少し容赦が無い。

しかし景色が草原なのも一時的なものであり、気が付くとそこは荒野と変わった。ブウン、と映像が別の映像に切り替えられたかのように一瞬で、草原は荒野に。命絶えた、命を続かせようとしない地球の、生物に対する拒否姿勢を表しているような、無情な。

洋館の前に広がっていたような、不毛の大地。ヒビがそこかしこに入っていて、雑草など一つも生えていない。水気が無く、生物も植物も一日で枯れ果ててしまっただろう想像が簡単に出来てしまうほどの、惨たらしさ。

藍色の太陽が地平線より昇り上がり、ひよっこりと顔を出す。かまぼこの形として出現したそれは時間が経つと真ん丸の形となって空へと自立して浮かんだ。その瞬間に空は真っ暗闇となり、光は失

われた。星がきらめき、満月がひっそりと佇み、UFOが点滅しながら瞬間移動をしたりしている。荒野のヒビの中から、何か透明なのだがそこに存在しているものが、溢れ出てくる。粘着質に、ゆつたりと。『敵』が、次々に現れはじめたのだ。彼らは相変わらずぐにやぐにやとした紫の糸ミミズを携えたままに、荒野をゆらゆらと歩き始める。洋館はもう見当たらないのに。ならば何を目指しているのか。隆太の皮となった身体を指しているのだった。

隆太は、もう散々だ、と思う。くたびれた身体で考えられることはもうそれくらいのものだ。どうにでもしてくれ、どうにでもなるから、声も聞こえなくなってしまった、と、絶望する。

そんな彼に聞こえてきたのは、何か聞き覚えの無い、初めて聞く声だった。『敵』が近づくとつれてその音量は大きくなり、隆太の耳に響いた。血が欲しい、とそれは言っていた。血を分けてくれ、血が欲しい、身体が欲しい。

ああ、なるほど、と隆太は思う。そんなものが欲しかったのか、と。馬鹿だなこいつらとも思う。俺にそれを縫っても手に入るわけではないじゃないか、と。皮なのだから。

『敵』も隆太が血を含んでいないことにやがて気が付き、彼の皮を周囲三百六十度囲みながら、『敵』同士できよきよと目配せしているような仕草をすると、チガウカ？、チガウカ？、チガウカ？、と抑揚の無い声で連呼するようになった。隆太はその間抜けさに吹きだしそうになったが、次には物悲しさを感じられなくもなかった。

お前たちも、哀れな奴だね。

そんなことを隆太は脳内で呟き、それには自嘲が含まれてもいるのだと知る。

『地獄』に踏み入ってからろくなことも出来ず血を奪い取られ、その自分の血を奪い取った相手のために戦ってみせるといふ馬鹿なことをし、結局、使い捨ての道具として扱われただけだった。何か奮起して立ち上がってみても、やることは怒りに身を任せたような暴走だけで、今ではまた皮となってしまうた。そして今、もう自分が

現実を生きているのかも、夢の中を生きているのかも、わからなくなっている。何がしたいのかもハッキリせず、彼女を見つけ出すという決意さえもすぐに薄れ、結局、またうずくまってぶつぶつと落ち込む。一人の世界に閉じこもる。

なさけなくともなく世の中のためにならず社会のためにならず自らのためにも生きず誰かのためにも生きず目標にも向っていかず日向ぼっこだけしたいなどと怠けた口を利き再び他者に使い捨てる道具として扱われるくらいしか価値が無い。

そんな人間だから、『地獄』に来てから聞こえていた声を頼りにするしかなかったのだ。こうやって考え込んでくずくずしている時に声は新たな道を示してくれた。他に道が無かったから声を信じることにしたに過ぎず、所詮自らでしつかりと物事を考えることが出来ない人間は、声が聞こえなくなった途端に意志も意地も無くし、何もかもを維持できなくなつて、こうやって皮にされて御終い。そして今、『敵』に囲まれて、おそらく今度こそ完全に滅ぼされてしまふのだろう。

(少なくともこいつらは、血肉を求めていて、そのために行動している。何もしないでべつちよりしているだけの俺は、せめて皮だけでも、食われた方がいいんだ)

諦め。皮は、食われることを覚悟した。勿論、諦める諦めないに関わらず、どうしようもないのだが。手足が無ければ抵抗の仕様が無い。鉄パイプだつて持つていないのだから。

どの部分から食べられるのだろうと想像してしまふ。足の方の皮からなのか、手の方からの皮なのか。どちらからでもあまり変わらないが、できれば痛みを少なめに食して欲しいとは思ふ。ああ、自由に意識を失くしたりということが出来るなら、今すぐにでもそれをするのに！そう思いながら皮は泣きたくなつた。自分の人生とは一体なんだつたのだろう。そう考えてみても、答えが出なくて、空しくて嫌になる。嫌だ嫌だ。ああ、またこんなことを考えてしまつた、ああさつさと食べてくれ栄養にしてくれ塵芥にしてくれ消化し

てくれ溶かしてくれ無様な嫌な存在の俺を平らげてしまつてくれ！もうどうしようもないんだ！

皮は心の内側で絶叫した。それは痛みを感じる時になるべくその気を紛らわすために叫んでいるのだ。

しかし、何ということだろう、なんと、なさけないことだろう。

皮は食われることにすら必要とされなかった。

『敵』の一匹が皮に対して、ぷい、とそっぽを向くと、違う『敵』も、ぷい、とそっぽを向いた。一匹二匹ではなかった。皮の三百六十度を囲っていた『敵』全員が、急に皮に対する興味を失くして立ち去っていくのだ。ゆらゆらと。

（おい、さてよ、どうしたの）と心の内部で叫んでいる皮に、『敵』の声が聞こえて来る。彼らは揃いも揃ってイラナイ、チガッタ、バイバイ、マタネ、ウセロ、などと好き勝手なことを一言残して、荒れ果てた地の遙か彼方、何処か遠くへとゆらゆらゆらゆら、消えていってしまったのだった。

皮は呆然とした。さっきの覚悟は何のためにしたのか。これでは道化だ、これでは阿呆だ、食べられるものとすらされない害虫だ、生物としての最下等だ。いや、違う、もうそんな風に自嘲して自分を陥れる権利すらも持っていない存在だ。無だ。無になるのだ。思考をすることも自ら封印して皮としてごみくずとして糞として荒地で眠りこけているのが義務だ。

皮は沈黙した。心の内側でばやいたり叫んだりすることさえも自重した。もちろんそれは難しかった。何も考えないようにするといふのは思っているよりも至難な技であり、どうしても何時の間にか何事かを考えてしまっていたりする。『地獄』に来る前のことだが、『地獄』で経験したこととか、宙で飛んでいるUFOは一体なんなのだろうとか、あのイエス・キリスト風の男は何だったのだろうか、とか。皮はついつい考えてしまう。そしてまた自嘲をはじめてしまいそうになる。だがそれさえも自重しなければごみくずにも糞にもならない。生物の最下等ではない。

彼は沈黙することに集中した。己を無にすることに熱中した。何時しか、本当に無になった。何も考えず、荒地にべたつとしている皮となった。

現実なのか夢なのか、生きているのか死んでいるのか、完全にわからない、完全にどうしようもない存在として、沈黙したのだ。やがて、宙に浮かんでいた藍色の太陽が、かまぼこの形に戻りながら、地平線の下へと隠れた。空を飛んでいるUFOは皮を小馬鹿にするがごとく自由に飛び回り、突然パツ、と消えたり、また逆に突然パツと現れたりしていた。星たちは時折流れ星となり、月は満ち欠けの変化するスピードが激しい。

それが何回満ち欠けを繰り返したかわからなくなった頃。ちょうど、満月になった時のことだ。

地平線を藍色の太陽が昇るのに合わせるようにして、一つの影が、歩いていた。

無になっている皮はそのことに気が付かない。ぼーっとしている。影はずんずんと歩き、その歩いている方角は確かに、皮の方へと向いている。確かに皮の方へと足が向っているのだ。UFOがパツ、パツ、パツ、と驚きを表現しているように激しく点滅している。星々が激しく流れ星になる。月が早いスピードで満ちたり欠けたりしている。

藍色の太陽が天の頂点にまでのぼりあがった頃、その影は皮の目の前にまで到着した。ずんずんと進んでいた歩を止め、皮をジツと見下ろしている。そして、べちゃりとしているそれを躊躇無く拾い上げてから抱擁した。

皮は吃驚した。さすがに驚いた。今まで沈黙を保っていた皮は沈黙を破らざるを得なく、（何だ！）と心の中で全力で吠える。長い眠りから覚めた皮全体が、麻痺していた感覚を取り戻し、抱擁されていることに震える。なんだ、急に。なんということなんだ、いきなり、と。

だが抱擁されていたのは束の間だった。皮が少し落ち着いた頃に

は、高く持ち上げられた。
そして、くぐるくぐるくぐる。ざん地のちんちん回轉せられたの
である。

可能性

フレディ・マーキュリー似のおっさん。彼は旅をしていた。目的のある旅である。

それはもう三十代はとうに超えているだろう娘を探すこと。探し出して、謝るということ。謝罪するということ。それがその人の目的であった。元々、『地獄』に来る以前から仲があまり良くは無かったのだが、身寄りと言える関係がお互い二人だけであったことから共に生きていた。だが『地獄』にて、ちよつとした行き違いからおっさんと娘は別々に生きることとなり、娘の行方はわからなくなり、おっさん自身は狂人として洋館の地下にひっそりと暮らしていた。だがある時おっさんは気が付く。そうか、そういうことだったのか、と。

生きていても靄がかかった何かのせいでイマイチ歌に勢いが足りないと感じていて、さらに、時折どうしようもない程に鬱々としてしまい、塞ぎこんで団子虫みたいなことになる。そもそもすることが無いために暇つぶししかすることが無い。次第に、何かが違うと思いはじめめる。

そしてやがて、謝りにいこう、と思いついた。

単純な発想。しかし確かな発想。おっさんは全力で毎日走った。時には歩いたが、『地獄』内を走り回って娘を探した。広大なる『地獄』では一人の人間を見つけ出すなど至難だったが、探すという行為そのものが大切だったのかもしれない。

ある日、おっさんは『敵』に食われた。突然に藍色の太陽が昇りあがった荒野にて、血肉を求めてあふれ出した『敵』に捕食されたのである。やるせない気持ちと共におっさんは滅びた。

だが滅びたはずのおっさんの意識は草原の中で目を覚ました。『地獄』内で草原を見る機会など無いし、そもそもあるはずがない。そう考えたおっさんはここはもしかすると天国なのかもしれないと

考え、そして冷や汗を流した。天国には娘はいない。だとしたら自分は今後娘に会うことはないではないか。更に言えば、自分だけこのような晴れやかな場所やってきてしまうなど、申し訳なくて娘に合わせる顔が無いではないか、と。

おっさんは燃え尽き症候群となつて歩く。広いだけで樹と草しかない、人も見当たらない、晴れやかな草原を進む。だがその場で足踏みしているのと同じ。景色はるくに変わらないし、目的である娘もここにはいないように思えた。

おっさんは座り込む。あぐらを掻いて座る。
そして彼は歌った。

我 地獄の底より来た愚かなる者

草のざわめきよ 空の青さよ 見守るように 優しくするように

そのようなことを そのようなことを

そのようなことを そのようなことを

炎の大海はいずこ 骨で積み上げられた根城はいずこ

我滅びた後に安らぎを得るなどという真似を

悲哀なる空気よ 腐臭を撒き散らす花びらよ

我を呼びたまえ 我を呼びたまえ

雷鳴は鳴り止んだ 痛みは今も増し

頭を垂れるべき者が 安息の息を吐く愚かさを 嘲笑うように

そのようなことを そのようなことを

そのようなことを そのようなことを

暗闇の底はいずこ 人皮が織り込まれた衣服はいずこ

我なにゆえにここにいる このようなザマを

悲哀なる空気よ 腐臭を撒き散らす花びらよ

我を呼びたまえ 我を呼びたまえ

暗黒に満ちる日々よ 景色は移り変わり

彩りは地獄の色 苦しみを増すための鮮やかさ

呻きよさようなら また会う日まで

呻きよさようなら また会う日まで

呻きよさようなら また会う日まで

呻きよさようなら また会う日まで

ララララ！(HIP!) ラララ(HOP!) ララララララ(JU

MP!)

ララララ！(HEY!) ラララ(HHEY!) ララララララ(HE

Y!)

我 地獄の底より来た愚かなる者

悲哀なる空気よ 腐臭を撒き散らす花びらよ

我を呼びたまえ 地獄の底より何度でも！

快樂に溺れ感情を込めて歌い続けるおっさんは、雑草をむしり出した。ぶち、ぶちと手当たり次第に根っこからちぎるうともせず中途よりちぎる。二本の腕から伸びている手の五指で、ぶち、ぶち、と。

だがそんなことをしていたのも一分間程度だ。彼は歌いながら草原を散歩した。自ら、歌っている歌は忌々しい歌だと思っている。だが歌っている。むしろ、だからこそ歌っている。己の気分を忌憚無く表している歌を叫ぶ。気持ちたまぎらわすため。気分を和らげるため。

いつしかフレディ似のおっさんは、墓の前に立っていた。

墓と言っても石と棒を置いた程度の、墓とはとても言えないものだが。

墓前に置かれている供花は枯れていて、棒は腐っている。

なんでこの墓前に突っ立っているのか、その前後を思い出すことは出来ないがおっさんには何かの予感があった。何か締め付けるような、恐ろしさを告げるような、触れてはいけないような。

だからおっさんは墓を掘った。手で、石をどけて棒を抜いて。背徳的な行為。やってはいけない、死者の眠りを覚ますような。それも触れてはいけないという感覚があるというのに、おっさんは掘った。爪に土が入り込んでしまうのも気にせず、掘る。掘る。掘る。掘る……………。

おっさんはそこに娘が埋まっているような気がした。直感。ただの勘。確証などまるで無くて、申し訳程度のお墓には名前が刻まれていたわけでもない。だけど、前後不明の意識の中で、目の前に突然一つのお墓が出現したというのは、おっさんに何かの予感を示すには十分だった。汗が止まらなかった。腋から、額から。だが、掘る手を止めることは無い。どんどん掘るその速度を速めていく。やがて、遺骨を埋めているのであろう壺が出て来た。古びた、色あせた。

おっさんは手を伸ばし、それを地上に出す。必死だった。汗がくだった。

奥深くにあることから取り出すことに実に苦労したが取り出すことに成功した時に、久しぶりに彼は土の中から目を反らした。だからこの時になってようやく、周囲の景色が草原ではなく荒地に変わっていることに気が付いたというわけだ。おっさんは驚きのせいで壺を取り落としそうになったが危うい姿勢を保って何とかそれを防ぐ。何だ、まさか再び地獄に来たのか？と考えたくもなるが、優先するべきは壺だった。蓋を開けるのに躊躇は多少したが、ためらいはわずか。壺の蓋の中に答えがあると思い、開く。少し力を込めれば、難なくそれは開いた。だが…。

そこにあっただのは骨でもなければ娘でもなかった。

「…なんだこれは…」

思考をするためにある脳が停止によって思考を拒絶し、おっさんは壺の中に入っていたもの二つを見比べるようにして交互に見ているがわけがわからなくなる。

だがしばらくすると思考出来るようになり、二つのものについて考えるようになる。片方は手紙と思える文章。もう片方は物。

おっさんは手紙を読み終えた。驚愕を抑え切れなかった。こんなことがあるのか、と感じる。

おっさんは決意した。手紙に書かれている『願い』を叶えてあげようと思つた。

その瞬間に、物が、光を発した。目映い光にウツ、とたじろいだおっさん。再び目を開いた時には青い光線が、おっさんの視界の前方に伸びていた。何かを目指しているように長々と、地平線の果てまで光線は伸びている。おっさんは自らの目的をその光線に重ねることを決意し、手紙と物を握つたまま、歩き出した。

ずんずん、ずんずん、一歩一歩を踏みしめるようにして、荒野を歩き出した。

やがて荒野を歩き続けていると、一つの皮を見つけ出す。おっさんはそれを見て、やはりここは『地獄』なのだろうかと思う。ぺらぺらの皮は『地獄』の洋館にてよく見られる代物だったからである。しかし今はそれを気にする時ではなかった。青い光線は皮のところでちょうど止まっていたから、おっさんはこれこそが手紙を書いた人物の求めている皮なのだとわかる。ぺらぺらしている。

その手首にあたる細い部分に皮は、一つの腕時計をつけていた。『地獄』と真つ赤に蛍光している腕時計、だ。

そして、腕時計の『地獄』と蛍光している部分に、青い光線は差し込まれていた。

「……ロマンチックなものだ……」そんな感想がついて出た。まじまじとそれを見るにつれ、おっさんはその皮に見覚えがある

ことに気が付く。以前、この皮をくるくると回したことがあると思
い出す。地下駐車場のようなあの鬱蒼とした場所で。

何か運命的なものを感じたおっさんは、娘を見つけられないこと
でずっと低調だった心に、何か充足するような、使命感のような、
ものが満ちた。

「君は幸せだな。一人でないということとは幸せだよ。とてもな」

そう述べてから苦笑すると、おっさんはべちよりとしている皮を
拾い上げた。

しばらくそれをくるくる回しながら、墓が会った場所に戻ろうと
する（今度は赤い光線が『地獄』腕時計から発されている）。その
途中に、声が脳味噌に響いてきた。

（俺は、幸せなんかじゃない）

おっさんは少し驚いたが、なるほどこんなこともあるだろうと、
地獄で様々な経験をしてきたおっさんはすぐに平常な気分になると、
脳に響いてきた声に、

「そんなことはないさ」

と答えた。だが声は何を落ち込んでいるというのだろうか、（だ
めなんだ）と即座に返事を送ってくる。おっさんは辟易した。だけ
ど、言わなければならぬことを言っただけよと思っただけ。

「君には待っている人がいるんだよ。その人がこの赤い光線の先に
待っている。腕時計だって地獄で君たちが再び出会えるように、彼
女が用意しておいたものなのだとしたら、彼女は本当に君と別れた
くなかったんだよ。再び出会いたかったんだよ。少しオカルトチツ
クで驚きはしたが、ロマンチックでもある。こんなこと、俺から見
たらとても羨ましくもあるさ。人は一人じゃ、寂しいだけだ」

今度は、しばらく返事は返ってこなかった。だが空に流れ星が一
つ流れた頃に返事は返って来た。

（俺は彼女を愛せるような人間じゃないかもしれない。俺はなさけ
ない。だからきつと気持ちが変わる。だから会いたくない。会
えても、きつと幸せになんかなれない。少なくとも俺にはもう声が

なくなつてしまった。今考えてみると、声は救世主だったんだ。俺にとつての最後の、神みたいなものだったんだ。だけどそれはもう消えたんだ。聞こえてこないんだ。俺はだから救われない。救われちゃいけない。皮として何も考えず、無として………)

フレディマーキュリー似のおっさんの内側から怒りが湧き上がつて来た。長い言葉を聞いている最初のうちは笑つてやり過ごせる程度かとも思ったが、おっさんはキレそうになった。

だけど、その気持ちを落ち着けた。そして、なんとかこの皮を説得できはしないかと思った。おっさんは皮より長いこと生きているからわかる。無になれることなどあり得ない。たしかに人間が死ぬは無になることはあるだろうと生きている時は思っていた。だが、死者として、地獄の世界で、皮になつても意識がある存在が『無』になれることなどあり得るだろうか？そこにおっさんの持論を加えさせてもらうなら、どんな姿でも、どんな場所でも、そこに存在している限り、存在は、希望を捨ててはいけないのだ。怯えから何もしない無になろうと願うなど、むなしいことだ。最低なことだと言ひ換えてもいいとおっさんは思っている。希望を捨てれば絶望が残る。絶望の先にあるのは絶望だけだ。無にならない存在は絶望を味わうしかなくなる。だから存在は常に希望を追うべきだ。希望を追うからこそ、存在は絶望をしないのだ。絶望を防ぐことは希望を追ひかけるコト以外には一つもないはずなのだ。

おっさんはその思いを、その重要さを、なんとかこの皮に伝えたかった。その大切さを伝えたかった。生きるということとは、存在であるということとは、それだけで何かをしなければならぬ、何かをしなければ絶望だけが広がっていくだけだということがどれだけ大切かということ、どれだけ意識しなければいけないことなんかということ、教えたかった。

ただ言葉で伝える必要はないようだった。どうやら、おっさんが今思っていたことは全て皮に筒抜けだったようだった。

(本当におっさんは、そう思えるのか？ 娘と出会えないかもしれ

ないとわかった今でも、そういう風に考えることが出来るのか？

もう止めようとは思わないのか？ もうだめだとは思わないのか？

俺はだめだと思った。おっさんみたいに考えられることもあったけど、俺は最低なくじなしなんだ。だからだめだ。おっさんのように希望を見出す体力だつて持ち合わせていない。ほら、手足だつてないんだ。皮じゃないか…俺は…)

「本当に無になれると思っっているのか？ お前は絶望を甘く見てるんじゃないのか？ 本当の苦痛というものを甘く見てるんじゃないのか？ お前はまだ間に合う。全然間に合う。俺だつてまだ間に合うんだから、お前が間に合うのは当然のことだ。なんでお前はそんなに諦めが早いんだ？ 可能性はいくらでも広がっている。それをわかれ」

おっさんは語気を強めた。もはや冷静ではいられない。だが、皮はいじけている。

(可能性なんてどこにもない。滅多にない。大抵、絶望の海が広がっている。希望の道はほんの一握りにしか広がらない。俺はもう絶望の海に浸っている。だから希望を少し示されたつて、待っているといわれたつて、それに応えることができるわけではない。絶望の海に浸っている俺は相手にも絶望を与えるだけだ。チエーン現象だよ。絶望を持っている存在は、他の存在にも絶望を伝える！ デフレスパイラルと言い換えてもいいよ！ だから無だ。無になればいい。声ももうなくなつてしまつたしね)

なんたることだ、とおっさんは思う。こないじけた存在があつていいものか、とおっさんは呆れる。彼女が可哀想だ、彼女は墓の下で待っているというのに…。けどまだ伝えられる言葉はあつた。もうこれでだめだつたら本当にだめだが、おっさんとは何か言葉を振り絞ろうと思った。自らの経験から伝えられそうな、或いは、知っている知識から、相手の気持ちを変えられる可能性を。

「……わかつてほしいのは、存在は全てが繋がることによつて存在しているということだ。だから君の言うこともわからないでもない。

確かに君は、時に相手に絶望を伝えてしまうのかもしれない。相手の希望の芽を潰してしまうような言葉を言ってしまうのかもしれない。だとしたら、それは確かに恐ろしいことだ。絶望的なことだ」
(ああそうだ。だから無になる努力をしていたほうがいい)

「しかし君の今後のために貴重なアドバイスをさせてもらうが、それは大きな勘違いであり自意識過剰であり阿呆だ。そして馬鹿だ。単純だ。浅はかだ。若いとしか言いようが無い。なさけないというのはたしかだ。君はたしかに、なさけない」

(よくそんなことが言えるね。だけどその通りだよ)

「しかしだ。しかし何故、君は自分のなさけなさ自分が自分だけのものだと思うのか。何故、もつと他者のなさけない部分を見ようとしなのか。全ての存在が欠けていて、なさけなくて、絶望的な要素を持っていて、だからこそ希望的な要素も持っているのだと気が付くことが出来ない？ それを全てのものが持っているということ、何故君は理解しようとしない？」

(何…?)

「わかっていない。この世に完璧なるものなど何一つ存在していない。全てが曖昧で全てがダメな要素を持っている。絶望したくなるような、目を塞ぎたくなるような、性質を持っている。なあ、目を閉じる必要があるが、目をずっと閉じている必要なんてない。義務なんてない。そんな責任などないしそれは逆に絶望を生み出す要因になるだけだと思わないか」

(完璧な存在を目指しているわけじゃない。ただ俺は最低すぎると自分でわかるから、そんな存在は目をずっと塞いでいたほうが様々なもののために言いと言っているだけだ)

「不完全すぎる存在は必要ないと思っているのなら、それだって間違っている。不完全だと自分で自覚しているというなら、猶の事間違っている。お前は必要ある。現に、お前は一人の女性から呼び出されている。地獄に来てまでも、君は誰かに必要とされているじゃないか。呼ばれているじゃないか。なぜそのことをもつと誇りに思

うことが出来ない？　そしてそれに怯えて逃げようとする？　誰だつてそうなんだ。君を呼んでいる彼女だつて、もしかしたら君を本当に愛せるのかどうか、君を悲しませてしまうんじゃないか、と悩んでいるかもしれない。今、この瞬間もね。完璧な存在はない。だから完璧に不完全な存在だつて無い。そう言うところいろいろなことを曖昧にぼかしているだけにも見えるかもしれない。なあなあで済ませようとしている怠慢、怠惰に見えたりもするかもしれない。でもどうか、君は自らが他者にまだ必要とされているのだと、必要とされていないなくても存在を無にする必要なんて、義務なんて、どこにもないのだと思うべきだ。可能性は無限に広がっているんだ。希望に繋がる道はたくさん広がっているんだ。完璧な絶望が無いから、完璧な希望もない。全ては中途半端でもある。でもだからこそ、放射状に道が広がっている、と感じることは出来るんじゃないか？　出来るはずだ。存在は常に様々なことを考えることが出来るのは、そういうことだ。様々な可能性を見出せるということだ。例えば空にあるUFOを見る。UFOを見てくれ。死者になる前、俺はあれがUFOだと考えることはほとんど無かった。大抵、ああ飛行機が飛んでいるな、という一言で済ましていた。そこに輝くものなどなかった。他に考える余地などわずかにもなかった。でもな、違うんだよ、地獄に来てから浮かんでいたあの謎の飛行物体を見て思ったよ。全ては捉え方次第なんだ。天を飛んでいるUFO。あれは何なのか誰にもわからない。そのはつきりとした、完璧にその正体を明かす方法だつてない。だけどだからこそいいんだと思えないか？　未知は可能性だと思つんだ俺は。あれが何なのかはつきりとわからないからこそ、人はそれに可能性を見出せる。新たな展開を望むことが出来る。それは希望だろうか？　少なくとも絶望ではないだろうか？　そういうことだと思つんだよ。それこそがUFOなんだと思つんだよ。飛行機じゃだめなんだよ。だから、無、なんてやめたほうがいい。瞼の裏なんていうもつとも近い場所を見る必要なんてない。空を見れば、あんなに遠くの星の輝きと、月と、太陽と、UFOと、

見る事が出来るんだ。あんなに遠くのを、見る事ができるんだ。この赤い光線も同じ事だ。この先にいる、待っている人、待っている光景、その全ては未知だ。まだ出会ってないんだからな。予測は出来るが、見るまではそこに何が起きるのか、待っているのかは確実にはわからない。大切なのはそれだと何故感じる事が出来ない？ 何故失敗を恐れる？ 失敗の先にもまだ未知は広がっているじゃないか。絶望を伝えてしまっても、希望を再び伝えればいいじゃないか。無になることなんて、ないじゃないか。なあ、そうだろう。そうじゃないか。そうだろう？」

救世主

壺の中に入れられてしばらくすると、皮でぺらっぺらだった感覚に、内側からジャガイモが何個も詰まっていく感じが湧き上がり、それは次第に柔らかかみも持ち出し、筋繊維となったのだと気が付く。或いは、内臓、脂肪、と言ったところだろうか。壺の中でそんな風になったら壺が破裂するのが通常だと思われるが、その時、すでに隆太は壺の中にはいなかった。

何故そんなことになるのか。夢だからなのか。地獄だからなのか。それはわからない。

肉体があり、その場所で再び人間の姿で直立している自分がたしかにある。間違いではなく、あると感じられる。隆太はしかし感動している場合ではなかった。前を向く。

真ん丸い穴ぼこ。洞窟のような。それが陽の光を通すこと無く佇んでいる様、は幽霊でも住んでいるのだと感じさせる雰囲気であるが、その先に彼女が待っているということとはもうわかっていて。腕時計から発される赤い光が、真っ直ぐ洞窟の暗闇へと向っているからだ。

隆太は既に皮では無くなった体で、その真ん丸い穴ぼこ、つまり洞窟、その入り口の前で中に踏み入るべきかそうでないか、迷っている。まだ心が完全に決まっではない。

だがフレディーマーキュリー似のおっさんは自分を壺の中に突っ込んだら、後は知らんともいうかのように立ち去ってしまったので、もういない。そして隆太は今皮ではなく、人の形として、その穴の前。何かを決断しなければいけないような、そんな空気が充満しているような気分させられる。ふと右手を持ち上げて、自分の右眼がくっ付いてるかを確認してみる。さする。たしかに右眼はある。右手もある。身体がある。

隆太は息をつく。落ち着かせるための吐息。彼女との思い出を、

再確認するかのようにして思い出してみる。そこに色はあった。少なくとも、白黒ではない。だから。

「いくか」

一步目を踏み出す。完全に心が落ち着いたわけではなく心臓は高鳴っているが、先に行こうと決める。それ以外をしたいと思いますとは思わない。先に、進む。視界を遮る暗闇に包まれた、洞窟の奥へと。

だが数歩で立ち止まる。内部から吹いてくる、凄まじい冷気。隆太の行く手を阻むかのように、これ以上奥に來ないでくれと拒絶しているかのように。

引き返すわけにはいかないと感じていた。だが、もし彼女が本当は自分には来て欲しくはないのだとしたら？ こういう冷気が奥から吹いてくるのは、彼女がこちらを嫌がっているからではないか…？
(そんなわけが、あるか？)

あるはずは無い。事実、彼女は腕時計という奇妙な仕掛けを使っている。それなのに、自分を拒絶するわけがない。では、何故、洞窟の奥から冷たい風が吹いてくるのか。自分の歩みを止めさせるような鋭い、針のようにチクチクとこちらを痛みつけてくるほどの、風を。

(試しているってことか…？)

試されている。それは隆太にとっても彼女にされたくない、つまり隆太自身ももっとも彼女にされたくない、彼女に対する自分の感情が真か偽かと言う、神経症的病氣的でもある部分を試されているような嫌味があった。それは実に重たいことで、出来ればあまり考えたくない。そう考えると勢いで彼女の方へ向っている自分がいるだけのような気がする。おっさんの言葉に諭されたような気持ちになったから会おうと一旦は決意したが、それはまさしく成り行きに身を任せているに等しいわけであって…。

UFOの話进行い出してみた。おっさんの言っていた、未知にしている話。

隆太は思う。彼女に会えば答えが出るものなのだろうか、と。自

分の気持ちすらも未知の状態に近い感覚で、確信が持てないのに、彼女の元に向うのはそれは、呼ばれたから来ました、みたいな実に消極的な姿勢で、そんなことをすることは果たして許されることだろうか。せめて自分の感情だけでも白黒ハッキリさせて、彼女に会うべきではないか。あやふやなまま彼女に出会ったところで、お互いがきまらずくなるだけなのではないか……。そう思ってみると、洞窟を進んでいる自分は実に今、ナサケナク、みっともなく、優柔不断で、冷たい風に足を止めてしまうのも必然ではないか。そもそもこうやってごちゃごちゃ考えてる時点で、彼女を本当に愛しているわけではないのではないだろうか、ならば、会うべきではないのではないか。もはや彼女に出会う瞬間にどうなるのかは、未知などではなく、悪い方向に転がるという答えが待っているのがほぼ百%ではないのか。それはお互いのために良くないのではないだろうか。

（お、俺は病気だ……。！　こんなにもうだうだうだ考えて…男じゃない…なさけないだけだ……。…こんなものは……。！……。…）ついに隆太は頭を抱えた。その場で立ち止まったまま、絶望したような表情で、頭を抱えたのである。そして彼は考える。

（こんなにも苦痛に塗れているのだから、声が聞こえてもおかしくないではないか）

隆太はそして考えてみた後に、また自分がどうしようもないことに気が付く。延々こんなことを繰り返してばかりだと気が付かざるを得ない。だけど、だからこそ、いまこそ、再び声が聞こえるのではないか、と心の何処かで勘繰りをしている。どこかで、自分を救ってくれる何かがあるんじゃないかと計算している。

まあ在り得ないよねそんなこと。と脳内で呟いている自分自身の言葉のそれにも、端々に何かを期待する匂いを纏っていて、しかもそのことを己で気が付いているのだ。そのことに対する言い訳は持っている。気が付かないよりは、気が付いているだけマシだ、という言い訳だ。

ああ。浅ましい。

『そうだ。浅ましいな。つくづく貴様は、浅ましい。そういう人間がお前だ。そしてそういう人間の呼びかけに応えてしまう浅ましい存在というのが、どうやら俺という存在らしい』

隆太は驚いた。露骨に飛びのいて、それから声が聞こえてきた方に顔を向けた。声は脳内から響いたのではなかった。洞窟の前方、それもすぐ目の前辺り、と思われる近くから聞こえてきたのである。イエス・キリスト風の、悪く言えば浮浪者風とも言える、が何か魅力ある雰囲気を持った男性が、黒スーツ姿でそこにいた。

表情にこそ出さないが、隆太はそれが現れたことに喜びを隠すことは出来なかった。イエス・キリスト風の男は隆太にとっての導きであり、頼りでもある。それに縋っている限りは……様々なことを楽でいられる。

『だけど俺は所詮お前の内側にある存在だ。お前は頼りにしているだとか、導かれていたとか、言っているが』

そんな御託はどうでも良かった。どういう理屈であろうが、その声があるから一步を踏み出せるのだとわかってはいる。だから今も、現れてくれたから、前に進めると思えた。確信を持てると思えた。

「なんでスーツ姿なのでしょう？」

隆太は世間話のつもりで尋ねる。もう言葉は必要なかった。今まで足が前に行くのを邪魔していた寒気は、目の前の男が遮ってくれているような錯覚さえある。だから何か切迫した質問をする必要はなかった。

だが救世主は返事をしない。隆太の言葉に答えを返さず、真つ直ぐな瞳で、何か芯を携えている瞳で、彼を見る。

「なんかいつてくさいよ」

と催促する隆太にも、彼は返事をしない。不審に思った隆太は、髪の毛をぼりぼりと掻いて、「あー」と少し呻いた。すると救世主は、苦笑のような、ただ頬を引きつらせただけのような、そんな表情をした。そして口を開く。

『もう、いいだろ？』

と。意味がわからなかった隆太は、「あ？」と馬鹿な相づちを打った。呆然と立ち、変な表情になってしまった。が、自分がそんな変な表情をしていると気が付く程度の余裕はまだある。

「いいって、何が？」尋ねれば、すぐに答え。

『俺はお前にとっての大切な部分だ。核だ。だからお前にとっての救世主たりえる。わけなのだが、こんなのは誰にだってある部分だ。お前はお前自身がわかつている通りなんら特別じゃない。ただ単にお前にとっての重要な部分が視覚化してお前の目の前に立っているに過ぎず、所詮俺はお前だ。核だ。だから、頼る必要はない。導かれる必要もない。だって当たり前だろ。お前はお前だ』

隆太は何となく目の前の奴が言いたいことが、わかるようでわからなかった。というか、よくよく考えてみると、まったくわからなくなってきた。目の前の奴はとち狂っている阿呆なんじゃないかと思えるような気もした。だから何も答えないでおいた。危ない奴には触れないでいるに限るからだ。

というのはまるで嘘で、実のところ言えば目の前の奴が言いたいことが何なのかは、わかった。何故ならば隆太だって理解している。目の前の救世主は、つまり自分に過ぎないということを。だけど頼るとか導かれるというのは言葉の綾にすぎない。だから気にする必要はないじゃないかと思う。自分に頼っている、自分に導かれている、そういう風に言い換えれば別におかしなことじゃない。

『そうだな。自分に頼る。自分に導かれる。素晴らしいことだ。なら、それでいい。もう面倒になつた。言葉なんてつらつら述べるものじゃないんだな。スーツ姿の俺は今からお前の内側に入って、二度と姿も声も現さない。そんなものが無くてもお前はやっていけるというかやっていけなくちゃいけない。そうしなきゃ本当に、いつか、すっからかんになる。核を失くした、ぺらっぺらになる』

「そんなに自分に厳しくしなくちゃいけないか。自分をしっかりと持つって大変なことじゃないか」

隆太の声にスーツ姿の男は、もはや何も答えはしなかった。

彼は真ん丸い形の、何かきらきらとした粒子に変わった。一体なにゆえにスーツ姿だったのだろうと思いなおさせる隙も与えず、それは、隆太の胸内に入り込んだのだった。

トクン、と心臓が重たく鳴った。

それっきり。

何かが変わったような気分も、おかしくなった気分も無い。

救世主は、呆気なく消えた。

だけど、一言だけ最後に、脳内に言葉が響いた。

『彼女はきつと、お前を見て、喜ぶ』

何度も隆太の頭にその言葉が響き、全身に染み渡る。その言葉は消えた後も、小さな暖かみみたいなものとして、残った。

隆太は一度だけ胸をドンと力強く叩くと、前を向いた。

冷たい風はもはや感じない。

洞窟の奥へ足を進める。光の無い暗闇を、進む。

「なんて弱い自分か。こんな一言で、確信を持てるなら、うだうだ悩んでたのはまるで馬鹿だ」

苦笑をしながらも、しかしまっすぐに見据えている。

先ほどの、救世主のように。

彼と彼女

彼女がまず感じたことは安心だった。

洞窟を歩いてくる者の、ハッキリとしている、快活な音。その足の音は彼女に確かな安心を感じさせている。彼女自身は気が付いていなかったが、淀んでいた瞳が、光を得たように力を持った。

だから、彼が暗闇を切り裂いて現れた瞬間にもう、彼女は彼へと飛びついた。なぜなら、待ち詫びていた瞬間だったから。それこそが望みだったから。彼が自分を力強く抱きしめるためにここまで歩んできてくれることこそを、望んでいたのは間違いないことだから。勿論、不安はあった。だけど彼の足音と瞳のその力強さは、そんな不安を吹き飛ばした。

だから彼女は、飛びついた。そして自らの背にも手を回してもらえたその瞬間の暖かみを。洞窟の、暗く、寒い所では得られることは決してないまどろみを得た。

洞窟は一瞬にして広々とした草原に変わった。ぶわあ、と弾けるように。全てが豹変したかのように。二人はキョロキョロと戸惑ってから、お互いに顔を見合わせ、そして微笑んだ。

「びつくりした」と彼は腕時計を見せた。ここまで彼を導いた『地獄』腕時計を。

彼女は微笑む。そして大空にふと目をやる。とても広い、何処までも広がっている青空。雲が穏やかに流れ、太陽は明るく全てを照らし上げている。草むらが風にそよぶき、その風は暖かい。

「あれ、見て！」彼女は空に指を指した。彼もその指の方向に顔を向ける。

青空を翔けるようにして、虹が浮かんでいた。しかし通常の虹とは違うことは明らかで、何か細かい粒子のようなものが七色に点滅していて、キラキラと虹のような放物線を描いているのだ。

二人にはそれが何なのかわからない。彼女もそれを果たして虹と

呼んでいいものなのかわからなかった。だが、彼が、

「UFOの大群だ…」

と独り言のように呟くのを聞き、おかしな表現だね、と笑った。彼は少し戸惑ったような間を置いてから、「そんなことはないよ」と薄く微笑んだ。二人、顔を見合わせて微笑む。

そして二人は口付けを、交わした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2038q/>

地獄の空に舞うは花びらの虹

2011年3月13日11時41分発行